

平成10年度国庫補助事業（2）

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

— 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

冠遺跡（第14地点）

芦屋廃寺遺跡（第55地点）

堂ノ上遺跡（第4地点）

2020年3月

芦屋市教育委員会

平成10年度国庫補助事業（2）

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

— 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

冠遺跡（第14地点）

芦屋廃寺遺跡（第55地点）

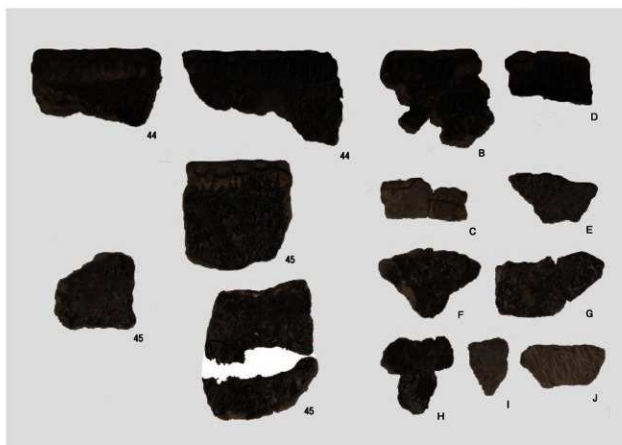
堂ノ上遺跡（第4地点）

2020年3月

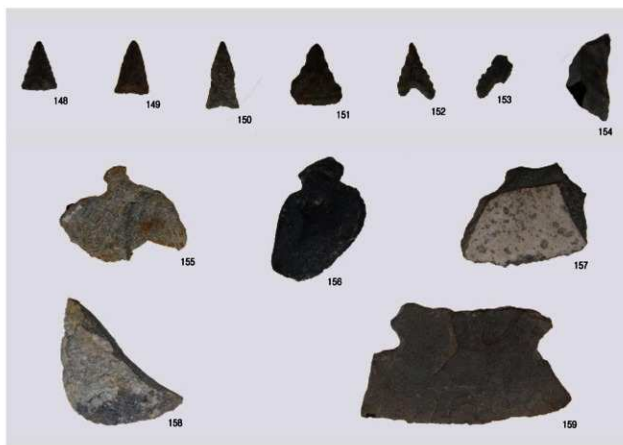
芦屋市教育委員会



堂ノ上遺跡第4地点の流路11出土縄文土器



堂ノ上遺跡第4地点の流路12出土縄文土器



堂ノ上遺跡第4地点の遺物包含層出土石器



堂ノ上遺跡第4地点の遺構・遺物包含層出土貿易陶磁

例 言

1. 本書は、芦屋市教育委員会が平成10年度国庫補助事業として実施した阪神・淡路大震災における埋蔵文化財緊急発掘調査（震災復興調査）の概要報告書である。当該年度の全地点の発掘調査費・遺物整理費等の総事業費は54,000,000円である。また、報告書（本書）作成のため、平成31年度の国庫補助事業の一環として遺物整理作業・原稿作成・編集等を実施し、当該年度の国庫補助事業の総事業費は3,000,000円である。補助率は、国1/2、県1/4、市1/4である。
2. 各地点の発掘調査は、芦屋市教育委員会文化財課係長（学芸員）森岡秀人、同文化財課係員（学芸員）竹村忠洋、同文化財課嘱託若林純也が担当した。国庫補助事業に係わる事務は、文化財課長山本英明ならびに課員の久家登志子・長岡一美が担当し、文化庁記念物課文化財主任調査官岡村道雄・同文化財調査官坂井秀弥の両氏、兵庫県教育委員会社会教育文化財課長補佐井守徳男および、大平茂、山本誠、山下史朗の諸氏、同県教育委員会埋蔵文化財調査事務所副所長大村敬通、同復興調査班班長小川良太、主査水口富夫・深井明比古の諸氏から種々指導を賜った。
3. 当該年度に届出があり、確認調査を行ったのは50地点である。平成9年度ならびに当該年度の確認調査の結果を受けて本発掘調査を実施したのは13地点である。この内、国庫補助事業として確認調査ないし本発掘調査を実施した11地点の実績報告については、平成17年度に『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集（以下、『実績報告集』と略記。）』（芦屋市文化財調査実績報告集2）によってその内容を公にしている。これは、職員・支援職員が平成10年4月1日から平成11年3月31日までの限られた期間でまとめた実績報告であるため、調査地点によっては図面の清書ができていないものや、出土遺物が未整理・未報告の段階のものを含んでいた。このような状態であったため、平成8～12年度に実施した阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査については、埋蔵文化財の保存・活用を図ることを目的として、平成24年度から国庫補助事業として再整理作業を実施しており、平成30年度からは、平成10年度調査分について作業を進めた。その成果として、平成30年度に『平成10年度国庫補助事業（1）芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－ 八十塚古墳群（第68地点：岩ヶ平支群第50号墳） 大原遺跡（第35地点） 寺田遺跡（第105地点・第106地点・第109地点） 城山・三条古墳群（第19地点：城山古墳群第18号墳）』（芦屋市文化財調査報告 第112集）を刊行した。次いで、『平成10年度国庫補助事業（2）芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書－阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－』（芦屋市文化財調査報告 第113集）として本書を刊行する。本書では、再整理によって遺構や遺物についてさらに詳しい情報を得ることのできた3遺跡3地点（冠遺跡第14地点・芦屋廃寺遺跡第55地点・堂ノ上遺跡第4地点）を報告している。報告書作成において、土層や遺構の認識は、基本的には発掘調査時の所見に従っているが、『実績報告集』や図面・記録等を参考にしながら多少の用語の統一を図った。また、その後の周辺調査によって判明した新たな知見を盛り込んだり、当時から異なる見解に至ったりしたところがある。なお、個々の調査地点、所在地、調査担当者の氏名・所属（調査当時）については、例言末に一覧表を付している。
4. 平成10年度には、発掘調査の出土遺物・資料整理作業は、支援職員ならびに森岡・竹村・若林が担当し、その指導の下、下記の芦屋市臨時的任用職員（調査員・調査補助員・整理員・整理補助員）が従事した（50音順）。

相澤敦子 荒木幸治 岩戸晶子 牛山恵美 梅本素子 岡 美和 岡本久仁子 岡本陽子 奥谷由香 奥出淑子 片岡亜紀 北島恭太郎 木南アツ子 楠 貴大 久保ふく子 小島静子 齊藤里加 桜井雅子 笹山美津子 菅 佐智子 高橋美代子 竹林裕一 多田尋美 且 和子 中井みどり 仲谷由利子 中西邦子 永野 香 古川久雄 堀川恵子 藪和幸

5. 平成31年度の遺物・資料の再整理作業、報告書（本書）の編集・作成作業は、芦屋市教育委員会生涯学習課嘱託（学芸員）白谷朋世が担当し、同課文化財係長（学芸員）竹村忠洋と同課学芸員森山由香里、同課嘱託（学芸員）西岡崇代が補助した。上記の職員のほかに、下記の臨時的任用職員・文化財ボランティアが従事した。

（臨時的任用職員） 小林久実代 西岡巧次 水谷千賀子

（文化財ボランティア） 梅本素子 仲谷由利子 星野剛一

本事業に関わる事務は、同課長茶嶋奈美、竹村、森山が担当した。

6. 堂ノ上遺跡は、発掘調査当時、旧石器時代とみられる遺構・遺物について、関西大学博物館学芸員山口卓也氏に鑑定していただいた。また、平成31年度に、石器については、兵庫県立考古博物館学習支援課の山本誠氏に、縄文土器については、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課の大本朋弥氏に、鑑定いただいた。
7. 堂ノ上遺跡については、当時の自然環境を復元し、当時の人類の生活環境を知る手がかりを得ることを目的として自然科学的分析を行った。その内容は、植物遺体分析（大型植物遺体分析および花粉化石分析）と火山灰分析で、株式会社トーコー地質に業務を委託した。
8. 本書の編集・執筆は、調査時の調査担当者の実績報告書や記録をもとに白谷が行った。
9. 本書の調査地位位置図には、平成10年度に使用していた、「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図 利用の手引き」（芦屋市文化財調査報告 第24集）芦屋市教育委員会（1993年刊行）に添付されている「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図」を用いている。このため、現状地形や現在の埋蔵文化財包蔵地の範囲と異なる部分がある。
10. 方位については、真北を用いた。標高については、東京湾平均海水準（T.P.）で表示している。
11. 本書を作成する上で引用および参照した文献などは、巻末に集約している。なお、発行機関が教育委員会の場合は「教委」と省略して記している。また、芦屋市文化財調査報告は、〔第〇集〕と表記している。
12. 今回報告する平成10年度ならびに平成31年度の調査・整理作業において、下記の諸氏からご助言、ご教示を賜った（50音順）。

赤松佳奈 勇 正廣 市川 創 尾野善裕 葛野 豊 佐藤公保 佐藤良二 篠宮 正 神野 恵 都出比呂志 棚宣田佳男 橋爪康至 菱田淳子 平尾政幸 藤川祐作 松田和義 村川行弘 森内秀造 山本徹男 山本信夫 渡辺 昇

発掘調査地点一覧表

遺跡地名	所在地	発掘担当者（所属）
冠道跡第14地点	山芦屋町145番地4	森岡秀人・竹村忠洋（芦屋市）
芦屋廃寺遺跡第55地点	西山町112番地1	森岡秀人・若林純也（芦屋市）
堂ノ上遺跡第4地点	春日町106番地1、106番地2、106番地6～13	森岡秀人・竹村忠洋（芦屋市）

目 次

巻頭図版

例 言

目 次

第1章 平成10年度の埋蔵文化財保護行政と発掘調査報告書の刊行

第1節 平成10年度における震災復興調査の経過	1
1. 震災復興調査の進展	
2. 平成10年度の震災復興調査の概略	
3. 平成10年度の発掘調査報告書の刊行	
第2節 発掘調査に基づく旧地形の復元	3

第2章 冠遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境	5
第2節 第14地点の調査	6
1. 調査に至る経緯	
2. 発掘調査の方法	
3. 発掘調査の経過	
4. 調査区の層序	
5. 遺構	
6. 遺物	
7. まとめ	

第3章 芦屋廃寺遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境	16
第2節 第55地点の調査	17
1. 調査に至る経緯	
2. 発掘調査の方法	
3. 発掘調査の経過	
4. 調査区の層序	
5. 遺構	
6. 遺物	
7. まとめ	

第4章 堂ノ上遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境	30
第2節 第4地点の調査	31
1. 調査に至る経緯	
2. 発掘調査の方法	
3. 発掘調査の経過	
4. 調査区の層序	

5. 遺構

- (1) 概要
- (2) 南区近現代遺構面
- (3) 南区第1遺構面
- (4) 南区第2遺構面
- (5) 南区第3遺構面
- (6) 南区最終検出面
- (7) 北区開析谷の土層
- (8) 北区上層遺構面
- (9) 北区下層遺構面
- (10) 北区最終遺構面
- (11) 小結

6. 遺物

- (1) 概要
- (2) 南区遺構出土遺物
- (3) 北区遺構出土遺物
- (4) 包含層出土遺物
- (5) 石器

7. まとめ

第3節 第4地点の自然科学的分析（株式会社 トーコー地質）	57
-------------------------------	----

1. 業務概要

- (1) 業務の目的と一般事項
- (2) 業務内容

2. 分析結果

- (1) 植物遺体分析
- (2) 火山灰分析

第5章 総括

第1節 芦屋廃寺遺跡と冠遺跡	87
(1) 芦屋廃寺遺跡と冠遺跡の関わり	
(2) 芦屋廃寺の寺域	
第2節 縄文土器の出土について	88
(1) 芦屋市内における縄文遺跡把握の経緯	
(2) 芦屋市内の縄文遺跡の分布	
第3節 貿易陶磁の出土について	90
(1) 概要	
(2) 芦屋川右岸の扇状地の動向	
(3) 芦屋川右岸の丘陵上の動向	
(4) 芦屋川右岸の平野部の動向	
(5) 芦屋川左岸の扇状地の動向	
(6) 宮川左岸の翠ヶ丘丘陵縁部から平野部の動向	

引用・参考文献

報告書抄録

第1章 平成10年度の埋蔵文化財保護行政と発掘調査報告書の刊行

第1節 平成10年度における震災復興調査の経過

1. 震災復興調査の進展

平成7年(1995)1月17日午前5時46分に淡路島北部を震源地として発生した「兵庫県南部地震」は、芦屋市内において震度7を記録した。この地震によって「阪神・淡路大震災」が引き起こされ、人家や公共施設、ライフラインに壊滅的な被害をもたらし、多くの人命が失われることとなった。

被害の甚大であった地域には埋蔵文化財包蔵地が広範に分布しており、被災地の早期の復興において埋蔵文化財の取扱いが問題になった。このため、3月29日付で文化庁次長から「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針について(以下、「基本方針」)」の通知が出され、同年6月1日以降における埋蔵文化財の保護手続きに関する基本原則が定められた。

芦屋市教育委員会は6月1日から文化財関係業務を再開したが、この基本方針に基づいて兵庫県教育委員会を中心に整備された適用要領に合わせて、実情とケースに応じた軽減措置をとった。震災前には個人住宅建設に限られていた国庫補助事業の対象を中小企業

の事業にまで拡大適用し、取扱いも平常時に比べかなり弾力的なものとなった。具体的には、①新たな試掘や確認調査は原則として避ける、②被災前の規模・構造を大幅に変えない復旧工事については調査を要しない、③発掘調査は工事による掘削が遺構を破壊する場合に限る、とした。このような方針であったが、復旧・復興に伴う発掘調査の件数は膨大であったため、その対応策として、全国から支援職員を受け入れた「復興調査班」が兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所内に設けられた。芦屋市は平成7年度の下半期から本格的な復興調査体制に入り、平成9年度まで支援職員の力を借りながら復興調査を進めた。なお、基本方針の適用は平成7年6月1日から平成9年度までであったが、復興の進行度合いから、平成11年度までさらに2年間延長された。

2. 平成10年度の震災復興調査の概略

平成10年度は、震災関連事業量がかなり低下してきたとして国による人的支援は終了したが、通常事業量が上向線を辿っていることを受けて、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所所属技術職員による復興調査班1班が維持されており、芦屋市教育委員会は県技術職員の支援を受けながら、復興調査を継続した。

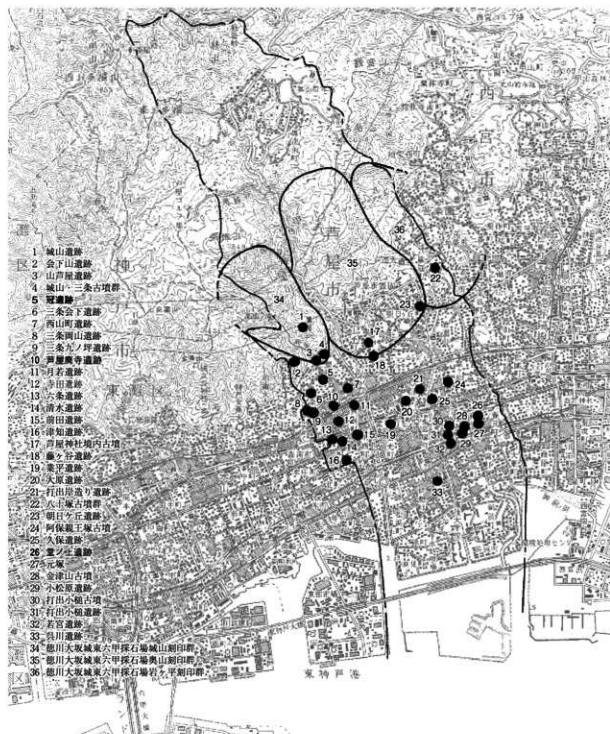


第1図 兵庫県と芦屋市の位置

芦屋市教育委員会が実施した平成10年度の確認調査は50件、立会調査は10件、本発掘調査は13件で、確認調査の件数はピークであった平成8年度より大きく減少したが、本発掘調査の件数は平成9年度を上回った。

本発掘調査では、大原遺跡第35地点・三条岡山遺跡第11地点の2件について、県技術職員の支援を受けた。これと併せて、市職員を担当者とする11件の調査（津知遺跡第17地点、城山・三条古墳群第19地点（城山古墳群第18号墳）、冠遺跡第14地点、芦屋庵寺遺跡第55

地点、寺田遺跡第105・106・109地点、八十塚古墳群第68地点（岩ヶ平支群第50号墳再調査）、堂ノ上遺跡第4地点、若宮遺跡第4・10-1地点を実施した。これらのうち9件は、国庫補助事業として実施したものであるのに対して、原因者負担によるものが4件あり、その内訳は、市による土地区画整理事業や住環境整備事業に伴うものが3件（津知遺跡第17地点、若宮遺跡第4・10-1地点）、大企業による共同住宅の新築工事に伴うものが1件（三条岡山遺跡第11地点）である。



第2図 芦屋市内主要遺跡分布図 1/50000

また、本発掘調査と併行して震災復興関連の公共工事に関わる事前協議・調整と確認調査も実施した。市職員が国庫補助事業として担当した確認調査では、津知川排水区（三条南町）雨水管敷設工に伴う芦屋座寺遺跡第53地点・寺田遺跡第104地点で重要な基礎資料が得られたことから、平成10年度に確認調査概要報告書を刊行している〔第35集〕。さらに、兵庫県教育委員会によって、芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業に伴う六条遺跡の第2次確認調査が実施された。この確認調査の結果、六条遺跡の分布範囲が変更になったのを受けて、平成11～14年度に本発掘調査が実施され、六条遺跡が縄文時代晩期から近世の複合遺跡であることが明らかになった。加えて、弥生時代前期の墓域（方形周溝墓・土器棺墓など）、平安時代後期の掘立柱建物跡や池など、特徴的な遺構も検出されている〔第41集、兵庫県教委2003〕。

3. 平成10年度の発掘調査報告書の刊行

阪神・淡路大震災復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査については、当該年度中に実績報告を作成している。ただし、これらは調査・整理体制が不十分中でまとめたため、出土遺物が未整理・未報告の調査地点を含んでいた。このため、芦屋市教育委員会は、平成24年度より国庫補助事業で出土遺物や図面等を整理し、順次、発掘調査報告書を刊行している。遺物や諸記録の所在の確認といった基礎作業から始めて、出土遺物と遺構・土層の照合、各遺構や遺物の検討を行い、29年度までに平成8・9年度の発掘調査地点について、概要報告書6冊を刊行した〔第95・97・101・105・109・111集〕。平成30年度からは平成10年度に国庫補助事業として本発掘調査を実施した7遺跡9地点について整理作業を行い、このうち4遺跡6地点については、平成30年度に発掘調査報告書をまとめた〔第112集〕。次いで、残りの3遺跡3地点について報告したのが本書である。

なお、復興調査の成果については、平成7～9年度の発掘調査報告書を既に刊行しているほか、平成10・11年度の調査の一部については、個別遺跡、地点ごとに発掘調査報告書が編まれている。平成10年度の調査に関するものでは、津知川排水区雨水管敷設工事（東川用水路推定地）に伴う芦屋座寺遺跡第53地点・寺田遺跡第104地点の確認調査〔第35集〕、若宮地区住環境整備事業に関する若宮遺跡第4・10-1地点〔第38集〕や土地区画整理事業に伴う津知遺跡第17地点〔第34集〕・六条遺跡〔第41集〕ならびに「芦屋市六条遺跡」（兵庫県文化財調査報告第256冊）の発掘調査報告書がある。また、民間共同住宅建設事業に先立つ原因者負担による発掘調査である三条岡山遺跡第11地点〔第36集〕の報告書がある。

第2節 発掘調査に基づく旧地形の復元

阪神・淡路大震災復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成7年度が試掘・確認・立会調査159件、本発掘調査16件、平成8年度が試掘・確認・立会調査194件、本発掘調査36件〔第95集〕、平成9年度が確認調査67件、第2次確認調査2件、本発掘調査12件〔第109集〕、平成10年度が確認調査50件、本発掘調査13件〔第112集〕と膨大なもので、市内の広域に及んだ。当初は住宅の再建に伴う発掘調査が中心であったが、平成9年度以降は、震災復興関連の公共工事に関わる確認調査が増加し、震災復興住環境整備事業に先立つ本発掘調査も行われるようになった。平成9年度には、芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う確認調査（津知遺跡第14地点）と都市計画道路山手幹線・川西線整備事業に伴う確認調査（寺田遺跡第103地点・月若遺跡第49地点・業平遺跡第43地点・大原遺跡第32地点・打出岸造り遺跡第24地点）、若宮地区震災復興住環境整備事業に係る共同住宅建設に伴う本発掘調査（若宮遺跡第2・3地点）を実施している。平成10年度にもこのような調査は継続しており、第1節で述べたように、芦屋座寺遺跡第53地点・寺田遺跡第104地点の確認調査や六条遺跡の第2次確認調査、津知遺跡第17地点や若宮遺跡第4・10-1地点の本発掘調査を行っている。

これらによって、従来発掘調査が実施されていなかった地域の情報が急激に増加したことで、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の見直しが行われた〔第40・97集〕。また、各発掘調査地点における土層観察やボーリング調査のデータに基づき、六甲土石流団地研究グループの佐藤隆春氏の協力や、当時、市教育委員会嘱託であった辻康男氏の精力的な分析によって、芦屋市域の土質の分類や旧地形の復元が行われるようになった〔第30・34・35・38・41・46・47・52集〕。

第3図は、第38集に掲載した芦屋川・宮川流域地形分類図で、芦屋川右岸、芦屋川左岸・宮川右岸、宮川左岸で大きく地形が異なることがわかる。

芦屋川右岸では、沖積扇状地（新期扇状地上位面・新期扇状地下位面）に芦屋座寺遺跡・寺田遺跡・月若遺跡・六条遺跡・津知遺跡などの主要遺跡が集中している。

一方、芦屋川左岸・宮川右岸には広く沖積扇状地（新期扇状地下位面）が広がっており、業平遺跡や大原遺跡・打出岸造り遺跡が点在しているが、遺構・遺物の分布密度は低い。

また、宮川左岸は前二者と大きく地形が異なる。標高18m付近までは「翠ヶ丘丘陵」ないし「打出丘陵」と称される丘陵で、更新統である大阪群や段丘礫層（段丘堆積物）が分布している。その足下にわずかに沖積扇状地（新期扇状地下位面）があり、さらに南側

第2章 冠遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境

冠遺跡は、昭和61年（1986）に住宅建設に伴って発見された遺跡で、山芦屋町を中心に、三条町・西山町に広がっている。既往調査によって弥生時代後期～近世の複合遺跡であることが明らかになっており、出土遺物は古墳時代～中世のものが多く傾向にある。六甲山地南麓の高位段丘面に伴う段丘崖から下った扇状地上部、標高40～60mの傾斜地に位置しているのが、弥生時代においては準高地性集落ともいえる立地である。ただし、平成11年度に作成した微地形復元図によると、谷地形に位置している【第84集】。なお、遺跡名は旧三条村の大字名「かむり」を採用したものであるが、古来、各所に「冠郷の水」とよばれる湧水点があったようである。

昭和61年に発掘調査を実施した第1地点は、標高53mの傾斜地に立地している。弥生時代後期～古墳時代初期の溝や柱穴、奈良時代の石列などを検出しており、完形の弥生時代後期の土器や石瓦丁片、奈良時代の須恵器やイダコ壺が出土した。平成2年（1990）の第3地点の調査では、古墳時代と中世を主体とする遺物包含層を確認している。

阪神・淡路大震災後の復旧・復興調査として平成8年度に実施した第7地点の発掘調査では、標高40m付近の地形変換部において、昭和13年（1938）の阪神大水害による洪水層（第3層）より上位にみられる近現代の整地層から、弥生時代後期～古墳時代前期の土器と、飛鳥時代～平安時代前期の土師器・須恵器・黒色土器等が多く出土している。特に、律令期の土師器・須恵器・黒色土器・瓦など官衙や寺院に関わる可能性の高い遺物、中世の土師器・須恵器・瓦器などが目に付くほか、土師質焼成の土鍾も含まれている。しかし、遺物の年代に対応する遺構は検出されず、第3層より下位には当該地の災害痕跡を示す土石流堆積層を何枚も確認したこと、調査地一帯が頻りに土石流の被害を受けていたことが明らかになった。また、遺物は二次堆積によるものが多く、調査地点に近接する上位面に集落遺跡や古墳、さらに官衙や寺院関連施設が存在していたことを示唆している【第95集】。

平成9年度には、冠遺跡第1地点に近接する位置に住宅の新築工事計画が相次ぎ、第9・10地点の本発掘調査を実施した【第109集】。標高約50mの第9地点では、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・イダコ壺・鉄製品などが出土し、中世から始まる水田耕作面を3面確認した。水田耕作面には犁痕を伴っており、中世の段階に既にこのような高所にまで耕作地の開発が及んだことが明らかになった。芦屋市

内各所では当該期の耕作地が検出されているので、中世には低地の開発も含めて、地形による困難さを克服した大規模な開発が行われていたことがわかる。また、第10地点では、明確な遺構は確認できなかったが、弥生時代中期に遡る遺物包含層を検出しており、調査地点の山側に弥生時代中期頃の集落の存在が推測できる。さらに、古墳時代後期の遺物の状況から、古墳などの存在も想定できる。確認調査を実施した第13地点でも、弥生時代の遺物包含層を確認している。また、平成14年度に本発掘調査を実施した第23地点でも、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器を含む遺物包含層を確認している【第78集】。

次節で報告する第14地点は、中世の耕作面を確認した第9地点や土石流堆積物を検出した第10地点の南東側である（第1図）。

以上のような成果から、現在、冠遺跡は、東西約150m、南北約120mに及ぶ複合遺跡と認識されるようになっており（第5章第1図）、令和2年（2020）1月31日現在の調査地点は28地点である。

ところで、冠遺跡の北側段丘上には山芦屋遺跡や三条古墳群が、西側の斜面地には三条下遺跡や三条岡山遺跡が、南側の扇状地には芦屋廃寺遺跡が位置しており、冠遺跡周辺は遺跡の密集度が比較的高い。三条岡山遺跡は、弥生時代後期後半の準高地性集落と考えられる【第82集】。また、三条下遺跡では4世紀や6世紀の堅穴住居跡を検出しており【第73集】、冠遺跡にも当該期の集落が広がっている可能性が考えられる。加えて、冠遺跡の北側には古墳時代後期から終末期に営まれた三条古墳群が広がっているの、冠遺跡で出土する当該期の遺物は、古墳から流出したものも含んでいるだろう。また、冠遺跡の中心域から300m程南にある芦屋廃寺跡は、白鳳期創建の寺院跡であり【第7・87集】、冠遺跡から奈良時代の遺物が出土する背景として、芦屋廃寺に関わる僧や寺院従事者の住まいを推測することもできる。



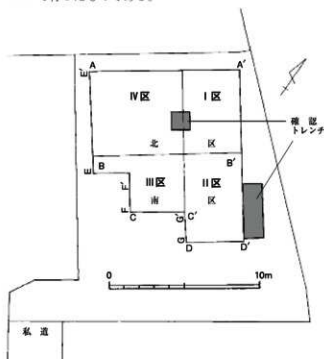
第1図 調査地位置図 1/5000

第2節 第14地点の調査

1. 調査に至る経緯

芦屋市山芦屋町145番地4（敷地面積約240㎡）では、平成7年（1995）1月17日未明に発生した阪神・淡路大震災により家屋が倒壊し、住宅の再建が急がれた。当該地において木造2階個人住宅の新築計画が進捗したが、周知の埋蔵文化財包蔵地である冠遺跡の範囲内において、平成9年（1997）に発掘調査を実施した冠遺跡第9・10地点の南側に接していることから（第1図）、文化財保護法第57条の2第1項に基づく届出が、平成10年（1998）9月29日付（芦教社文第72号）で地権者より本市教育委員会に提出された。計画建物の基礎工事は、遺構や遺物包含層に影響を与える可能性があったため、本市教育委員会は10月27日に土層の堆積状況、遺物包含の有無などの基礎資料を得るための確認調査を実施したところ、中世の遺物包含層を確認した。その結果、計画建物の建築による遺構・遺物包含層の損壊は避け難く、損壊を受ける建物基礎部分を全面調査して記録保存を行う必要があると判断した。そこで、平成10年11月24日から12月15日まで、建物基礎部分91.29㎡（調査面積95㎡）を対象とする発掘調査を実施した。

なお、今回の調査は阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針」（平成7年3月29日、文化庁次長通知、平成10・11年度延長。以下「基本方針」とする。）に基づいて行ったものである。



第2図 調査区配置図 1/250

2. 発掘調査の方法

調査範囲は、「基本方針」にしたがって、損壊部分である計画建物の基礎部分のみとした（第2図）。調査深度は工事深度である現地表下45cmまでとして、残土は場内処理で、反転掘削の調査方法を採用した。調査区の輪郭に沿って側溝を掘削して遺物包含層の遺存状況や深度を確認した上で、表土から人力によって掘削した。

調査区は、反転掘削のため南北に分けて、「北区」（約66㎡）、「南区」（約28㎡）と呼称するとともに、調査区全体を4分割して北東部を「I区」として、時計回りに北西部を「IV区」とした。基準高は、本市道路課設置のマンホール上面基準高（T.P.49.16m）より水準測量を実施した。なお、埋め戻しには重機を用いて、現状復旧を行った。

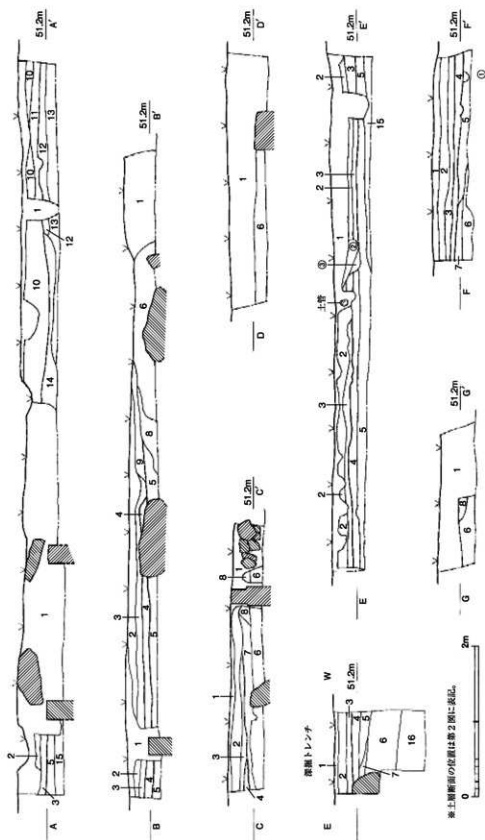
3. 発掘調査の経過

11月24日に設計者との調査前立会を行い、建物設計図にしたがって調査区を設定した。まず、北区と南区の境界部分にサブトレンチを掘って土層を確認した後、25日に南区から掘削を開始した。26日には第4層を除去した段階で遺構面を検出したので、平板実測と全景写真撮影を行った。27日には土層断面を実測した。30日には重機を搬入して、南区の埋め戻しと北区の掘削を行った。12月1日には第1遺構面を精査し、平板実測や全景写真撮影を行った。2日には第4層を除去して第2遺構面を検出し、当該遺構面の全景写真を撮影したうえで、平板実測した。7日には地権者と調査終了立会を行い、重機で埋め戻して調査を終了した。

4. 調査区の層序

土層番号は、層序に関係なく記録順に通し番号でアラビア数字を付した（第3・20～23図）。第1層は表土で、第2～9層は南区で土層番号を付したもので、北区でも対応する土層は同じ土層番号を用いている。一方、第10～15層は北区で、第16層は深掘トレンチで確認した土層である。

調査区の南西部を中心に、上から順に第1～5層が堆積しているが、調査区北東部はI区を中心に、第1層の下に第2～5層はなく、代わって第10～14層が堆積している。また、第5層の下も単一ではなく、IV区一帯に第15層があり、南寄りには西から順に第7層、第8層、第6層が斜面堆積している。このうち第6層は、縄文土器・弥生土器と直径10～15cmの皿角礫が混在しており、土石流堆積物と考えられる。第9層は、調査区中央部において第5・6・8層上にみられたブロック、第16層は深掘トレンチで第6層の下位に確認した土石流堆積物の可能性が考えられる層である。なお、第2層は近現代水田耕作土、第7層は造成土と考



【土層注記】

- 第1層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR4/1 褐灰 粘土～シルト 粗砂を含む。
- 第2層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/2 灰白 シルト～極細砂 粗砂を含む。
- 第3層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第4層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第5層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第6層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第7層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第8層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第9層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第10層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR5/3 白 粘土～シルト 粗砂 直徑1cmの褐色粘土ブロックを含む。
- 第11層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/4 白 灰黄 粗砂～極細砂 粗砂を若干含む。
- 第12層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/2 黒褐 粗砂～極細砂 粗砂を若干含む。
- 第13層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/2 黒褐 粗砂～極細砂 粗砂を若干含む。
- 第14層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/2 黒褐 粗砂～極細砂 粗砂を若干含む。
- 第15層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/2 黒褐 粗砂～極細砂 粗砂を若干含む。
- 第16層 灰色粘砂混じり砂質土 10YR5/2 黒褐 粗砂～極細砂 粗砂を若干含む。
- ①層 シルト～粘土 直徑30cm以下の角礫を含む。
- ②層 褐色粘砂混じり砂質土 10YR4/1 褐色 粗砂～極細砂 粗砂のクマミがみられる。SD00層土。
- ③層 褐色粘砂混じり砂質土 2.5Y5/2 灰黄 極細砂～粘土 しまりは良い。SD00層土。

第3図 調査区土層断面図 1/50

えられるもので、第14層はSR01埋土である。

第3～6・10～13層が遺物包含層で、近現代水田耕作土である第2層直下の第3層には、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・サヌカイト切片が混在しており、遺物包含量の多い第4・5層も、中世を主体としながら古墳時代の須恵器や黒色土器・サヌカイト切片・銅製品が混じる。「実績報告書」で「弥生時代の遺物包含層」と報告した第6層は、縄文土器・弥生土器・サヌカイト切片が主体で、土師器・須恵器・瓦質土器の薄片や土錘がみられるが、中世以降の遺物は混入であろう。また、第10～12層から出土した土器は、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器の薄片が多いが、下位で確認した第13層からは回転台土師器碗を含む土師器のみが出土している。

なお、第2層以下の土層名や土質・色調・粒度・しまりなどは、土層断面図（第3図）に付記している。色調は「新版標準土色帖1995年度後期版」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修）により、客観化を図った。また、SR01を除く遺構埋土は丸囲み数字で表示している。

5. 遺構

南区では第4層直下で1面の遺構面を、北区では、第3層直下と第4層直下で2面の遺構面を検出した。北区の上面を「第1遺構面」、下面を「第2遺構面」と呼称し、南区の遺構面は土層の対応関係から「第2遺構面」として扱っている（第4・5・12～19図）。

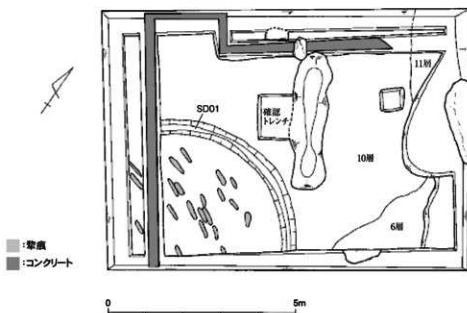
第1遺構面は、第3層に覆われた面であるが、第3

層が広がっていないI区やIV区北部は、掘削深度を考慮して第10・11層上面をこの遺構面とした。IV区南部では、北西から南東方向（N58°W）に走向する鵜痕群を検出した。また、幅約40cm、深さ約5cmで円弧を描く溝（SD01）を検出した。埋土は、上位がラミナのみられる暗灰色砂質土（②層）、下位が淡黄灰色粘質土（③層）である。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・レンガ片が出土しており、近世から近代の溝とわかるが、機能は不明である。第1遺構面が耕作面として機能した時期は、第3層に含まれる遺物から中世に比定した。

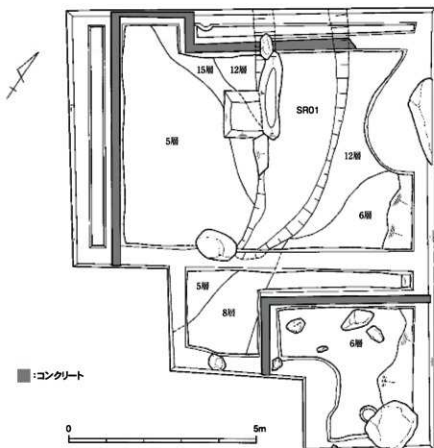
第2遺構面は、第4層に覆われた面である。当遺構面では、北区中央部を南北方向に流れる自然流路（SR01）を検出した。幅約250cm、深さ約20cmを測る。埋土は黄灰色砂礫（第14層）である。弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・サヌカイト切片が出土しているが、規模や埋土の様相から、当流路は一時的なものであったと考える。SR01は第12層上面から切り込み、床面は第13層に達していることや、出土した遺物から、中世前半の流路と考える。

南区ではII区を中心に表土直下で弥生時代の遺物包含層と考えた第6層が、北から南にのびる尾根状の高まりとして検出されており、当地点が中世水田の末端であったことが推測される。

なお、当面では、西から順に、第5層、第15層、第12層、第8層、第6層と土質や包含する遺物の年代に差のある自然堆積土がみられるので、東から西に下る微地形を観察することもできた。



第4図 調査区第1遺構面平面図 1/100



第5図 調査区第2遺構面平面図 1/100

6. 遺物

今回の調査では、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・土鍾・石鉄・サヌカイト剥片・銅製品など、27ℓ容量のコンテナ1箱分の遺物が出土しているが、総じて磨滅が顕著で、小片が多い。以下に、主たる遺物について述べる（第6～8図）。

遺構から出土した遺物では、自然流路（SR01）から出土した弥生土器の壺（1）と土師器皿（2）を図示した。1は石英や長石を多く含む橙～にぶい橙色の広口壺片で、摂津Ⅱ様式であろう。これは、遺構面のベースである第6層に起因するとも考えられる。2は口径9.8cmを測る2段ナデの小皿で、遺構が中世に下る証左となる。

包含層出土の遺物では、第6層から出土した縄文土器（3・4）、側溝から出土した須恵器（5）、第13層から出土した回転台土師器（6）、第5層から出土した東播系須恵器鉢口縁部（7・8）を図示した。また、第6層直上の攪乱から出土した石鉄（9）、第6層から出土した土鍾（10）、第3層から出土した青磁（11）の写真も掲載している。

3は縄文時代後期～晩期の深鉢口縁部片で、砂粒を

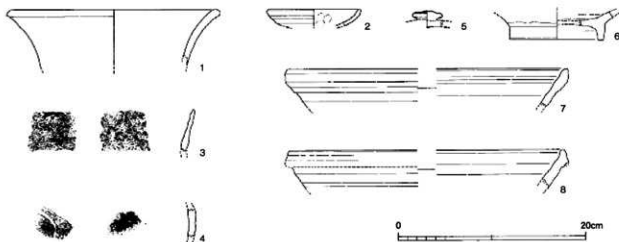
多く含み、器面は磨滅している。やや外反ぎみに立ち上がる口縁部の端部内面に、わずかに刻目状の痕跡がみられる。外面がにぶい褐色、内面がにぶい橙色を呈する4は、外面に弧を描く沈線があるので、後期の深鉢だろう（公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課の大本明弘氏のご教示による）。

5は奈良時代の須恵器杯蓋で、扁平な宝珠つまみを有する。6は回転台土師器碗の底部で、直立する高台は高い。7・8は東播系須恵器鉢口縁部で、7が口縁端部を上方に拡張し端面に弱いナデを加えるB1b類、8が口縁端部を外方に拡張して断面形が三角形に近くになっているB2類なので、13世紀頃のものと見える〔中世土器研究会事務局2015〕。

9は頂部が欠損している凹基式の石鉄で、残存長2.3cm、幅1.9cm、厚さ0.3cm、重さ1.2gを測る。

棒状有孔土鍾10は一端が欠損しているが、欠損部にも穿孔部の痕跡が認められる。中央部の断面形は長軸1.7cm、短軸1.5cmの楕円形だが、端部は扁平化していて、長軸1.8cm、短軸1.1cmの小判形になる。穿孔部の直径は0.65cm、残存長は5.7cmなので、本来の全長は6.8cmほどであろう。

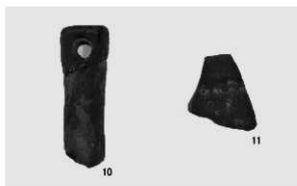
釉が灰オリブ色に発色している11は、龍泉窯系の



第6図 出土遺物実測図 1/4



第7図 石鏃（原寸大）



第8図 出土遺物

青磁碗で、外面は無文、内面には片影文がみえる。

上記の遺物では、縄文時代～弥生時代の土器や石鏃（1・3・4・9）・サヌカイト剥片が、冠遺跡の上方に広がる山芦屋遺跡に由来するものと考えられるが、そのほかのものは、冠遺跡が居住域として用いられた時期に持ち込まれたものと考えられる。

ただし、本遺跡周辺の地形を考えると、奈良時代～平安時代の遺物（5・6・11）をもって、本遺跡一帯に集落が展開するようになったとみるのは難しいだろう。その段階には、芦屋庵寺に関わる小規模な施設が点在する程度で、人々の活動が活発になるのは、中世になってからであろう。

7. まとめ

当該地は平成9年に発掘調査を実施した冠遺跡第9・10地点〔第109集〕の南側に接している。第9・10地点の調査では、中世の水田と弥生時代や古墳時代の遺物包含層を検出している。今回の調査でも中世の耕作面を検出したことで、当地域の水田の広がりを確認することができた。これら3地点の調査結果では、それぞれに中世耕作地の末端が検出されており、中世における耕作地の広がりを復元することができる。中

世においては、六甲山地と海浜部を除いた市内の全域で水田が検出されており、中世になって急速に耕作地の開発が行われたことがわかる。

一方、縄文土器・弥生土器・サヌカイト剥片を包含する第6層は、土器とともに直径10～15cmの垂角礫を含んでおり、弥生時代に起こった土石流堆積物と推定できる。その場合、これらの土器は上方から流れてきたということになるので、当該地の北側に位置する山芦屋遺跡に関わるものといえる。

なお、寒川旭氏の研究によると、六甲南麓では弥生時代後期の大地震が想定されているので〔寒川2007〕、その地震に際して、山崩れが発生した可能性も考えられよう。



第9図 調査地近景



第10図 調査地現況



第11図 作業風景



第12図 南区全景（北東から）



第13図 南区西部（南東から）



第14図 北区第1遺構面全景（北東から）



第15図 北区第1遺構面全景（南西から）



第16図 北区第2遺構面全景（北東から）



第17図 北区第2遺構面全景（南東から）



第18図 北区第2遺構面自然流路 (SR01) (南東から)



第19図 北区第2遺構面南東部 (南東から)



第20図 深掘トレンチ南壁土層



第21図 南区西部西壁土層



第22図 北区東部北壁土層



第23図 中央畦北壁中央部

第3章 芦屋廃寺遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境

芦屋廃寺遺跡は、阪急芦屋川駅の西方約300m付近を中心として、東西約200m、南北約250mの範囲に広がる縄文時代～近世の複合遺跡で、現在の三条町・三条南町・西山町・西芦屋町にまたがっている。芦屋川と東川（中近世に東川用水路として用いられ、現在は地下埋設水路）の合力によって形成された扇状地の上の地形変換部（標高約30～35m）に立地しているが、この扇状地の上には、ほかに西山町遺跡、月若遺跡、寺田遺跡が分布しており、市内で最も濃密に埋蔵文化財を包蔵する地域である。なお、背後には会下山（標高約200m）、鷹尾山（標高約260m）がそびえる環境下から、各所に埋没谷・埋没河川が存在している。

この遺跡は、明治時代以来、西山町付近で古代瓦が大量に出土することから、古代寺院の存在が推定されてきた。しかし、史料等に該当する寺院名がないため、近代の芦屋村西ノ坊の地名に由来して「芦屋廃寺」と呼ばれている。その寺院は既に宅地化して地上にその面影を留めていないが、発掘調査結果の蓄積によって、伽藍配置や建立・再建・廃絶の様相が、ある程度推測できるようになっている〔芦屋市教委2006、芦屋市役所1971・1976、芦屋廃寺跡発掘調査団・芦屋市教委1987、今村・町田1997、第7・15・17・21・27・28・35・65・72・78・83・84・87・88・95・97・98集〕。

発掘調査の嚆矢は、昭和42～43年（1967～1968）に実施した第1～3次調査である。ここでは、白鳳時代から近世の瓦や埴が大量に出土しており、この調査地付近が芦屋廃寺の中核部と推定されている。なお、明治41年（1908）には、西山町西ノ坊で石棺の蓋が出土したことが伝えられている。また、昭和11年（1936）には第1～3次調査地点の南側近接地で塔心礎が出土しており、現在は芦屋市立美術館に移送されている。昭和60年代に入ると発掘調査が増加し、阪急神戸線のすぐ北側に位置するB地点では、昭和61～62年（1986～1987）の調査によって古代～近世の瓦や遺構を多く検出するとともに、戦時中の防空壕も確認している。平成11年（1999）に実施した第62地点の調査においては、古代寺院の建物基礎の一部を検出している。ここでは、文禄5年・慶長元年（1596）の慶長伏見地震に伴う地割れと、それによって壊滅した寺院の建物基礎、大量の瓦が出土している。ただし、B地点のすぐ南に位置するA地点では、古代瓦の出土が極めて乏しかったことから、芦屋廃寺の伽藍域がB地点や第62地点を南限とすると考えられる。また、平成13年（2001）に発掘調査を実施した第75地点では、「寺」字のスタンプが施された鉄鉢形須恵器鉢をはじめとする大量の

土師器・須恵器・瓦が出土し、煤化した供膳具を数多く含むことから、奈良時代中頃の法会に関わる土器群と考えられている。その出土状況は、西側の谷地形への一括投棄を推測させるもので、この地点が伽藍の西限を示唆するといえる。第75地点の北東側に位置する第108地点では、平成20年（2008）に、律令期や平安時代後期の土器類と火災後の片付けに伴う谷への廃棄層が確認されている。さらに、東川が下刻する谷地形に接する位置に、寺院に伴う金属加工工房が存在していた可能性も考えられるようになっている。

一方、芦屋廃寺遺跡の北東部に位置する第115地点は、平成21年（2009）の調査によって、古代の遺構は多いものの、芦屋廃寺の中心伽藍からは外れると目されるようになっている。さらに、江戸時代初期の徳川大坂城再築に係る採石場を確認しており、徳川大坂城東六甲採石場の範囲が扇状地上にも広がっていたことが認識されるようになっている。

このほか、第77地点では、縄文時代早期の遺物包含層や縄文時代前期初頭の堅穴住居跡を確認している。第48地点や第122地点では、弥生時代後期後半～古墳時代前期の集落跡として、重複する堅穴住居群や大量の遺物を検出している。灰跡や粘土貯蔵穴など、きわめて特徴的な遺構も多く、碗状や多様な搬入土器も認められるなど、他地域との交流や文化伝播の顕著な集落であったことがうかがえる。また、7世紀代の乳幼児の墓棺も出土した。そのほか、L地点では、谷斜面に大量の中世土師器皿が廃棄されており、O地点では、中世の掘立柱建物跡を検出するなど、中世の遺構や遺物の存在も確認されている。

このように、随所で多様な遺構・遺物を検出しており、多彩な集落の展開を理解できる。なお、今回の調査地点は本遺跡の北東端に位置する（第1図）。



第1図 調査地位置図 1/5000

第2節 第55地点の調査

1. 調査に至る経緯

芦屋市西山町112番地1（敷地面積約160㎡）において鉄骨造1階建個人住宅の新築計画が進捗したが、当該地は周知の埋蔵文化財埋蔵地である芦屋廃寺遺跡の範囲内であることから、平成10年（1998）11月13日付（芦教社文第91号）で、地権者より文化財保護法第57条の2第1項に基づく発掘届出書が本市教育委員会に提出された。

計画建物は既存建物と規模・構造が異なるため、遺構や遺物包含層に影響がでる可能性があった。そこで、本市教育委員会は、12月10日に土層の堆積状況、遺物包含の有無などの基礎資料を得るために確認調査を実施した。その結果、現地表下約80cmで遺物包含層を確認したが、計画建物の建築による遺物包含層の損壊は回避し難く、損壊を受ける建物擁壁部分を本発掘調査して記録保存を行う必要があると判断した。そこで、平成11年（1999）1月12日から21日まで、建物擁壁部分約26㎡を対象として発掘調査を実施した。

なお、今回の調査は、阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、「阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財の取扱いに関する基本方針」（平成7年3月29日、文化庁次長通知、



第3図 調査風景

平成10・11年度延長。）に基づいて行ったものである。

2. 発掘調査の方法

発掘調査は、現地立会によって設計者が明示した擁壁工事部分を調査対象とした（第2図）。盛土・近現代水田耕作土は重機掘削を行い、第1遺構面直上層（中世遺物包含層）より人力掘削による調査を行った。

各遺構面の記録として、平板測量による平面図作成と35mm白黒・リバーサルフィルムによる写真撮影を行った。また、東壁・北壁・南壁3面の土層断面図を作成した。なお、基準高は本市道路課設置のマンホール上面基準高（T.P.371.1m）を使用した。

排土は調査地内に仮置きし、調査終了後、重機による埋め戻しを行って現状復旧した。

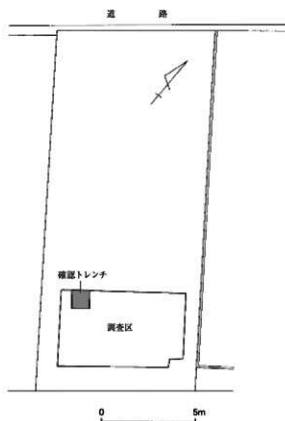
3. 発掘調査の経過

1月12日に現地立会を行い、調査を開始した。調査区を設定して、第1遺構面である第4層直上まで重機掘削した後、人力により遺構面を検出した。第1遺構面の遺構の掘削や写真撮影、遺構実測等を14日まで行い、引き続いて第5層上面の第2遺構面、第6・7層上面の第3遺構面を検出した。第2遺構面の調査は18日まで、第3遺構面の調査は20日まで行い、最終日には最終掘削面である第8層上面まで掘削して土石流堆積の状況を確認するとともに、土層断面図を作成した。その後、調査区の埋め戻しを行って、調査を完了した。

4. 調査区の層序

検出した土層は、記録順に通し番号でアラビア数字を付した。また、遺構埋土は九囲み数字で示している（第4・19図）。

現表土・盛土である第1層の下には、上から順に、第2～5層がほぼ水平に堆積している。第5層の下は、調査区西寄りが第6層、東寄りが第7層で、本来の堆積土である第7層を切り込むように、北東から南西にかけて土石流堆積物である第6層が広がっている。また、第7層の下にも、土石流堆積物と考えられる第8



第2図 調査区配置図 1/200

層がみられた。なお、第3～7層は遺物包含層で、第3～6層からは古墳時代から中世後半までの遺物が、第7層からは弥生時代～古墳時代を主体とする土器片が出土している。第3層からは江戸時代の染付小片も1点出土しているが、そのほかに明らかに近世に下るものはみられないので、第3層は中世後半を下限とする遺物包含層であろう。

各遺構面のベースは、第1遺構面が第4層、第2遺構面が第5層、第3遺構面が第6・7層である。なお、①層が第1遺構面のSK01埋土、②・③層が第2遺構面のSK02埋土、④層が第1遺構面のSP19埋土、⑤層が第3遺構面のSX01埋土である。

以下に、各土層の色調、粒度、しまり、包含物などを記述する。

第1層 現表土・盛土。

第2層 淡灰色砂質土。

第3層 明褐色砂質土。土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器（古瀬戸）・磁器（青磁・染付）・瓦・イイダコ壺・スサ入の壁土片・サヌカイト剥片・石器（砥石）が出土している。

第4層 淡灰褐色砂質土。土師器・須恵器（東播系須恵器を含む）・瓦器・瓦質土器・磁器（白磁・青磁）・瓦・スサ入の壁土片が出土している。

第5層 暗褐色砂質土。土師器・須恵器（東播系須恵器を含む）・緑釉陶器・瓦質土器・陶器（古瀬戸・常滑）・磁器（青白磁）・土製品（土鍬）・瓦が出土している。

第6層 暗灰褐色砂質土。土師器・須恵器（東播系須恵器を含む）・瓦質土器が出土している。

第7層 黒褐色砂質土。第V様式の弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器が出土している。中世の土師皿片もみられるが、これは混入と判断している。

第8層 暗黄色砂。しまりは悪い。無遺物層。

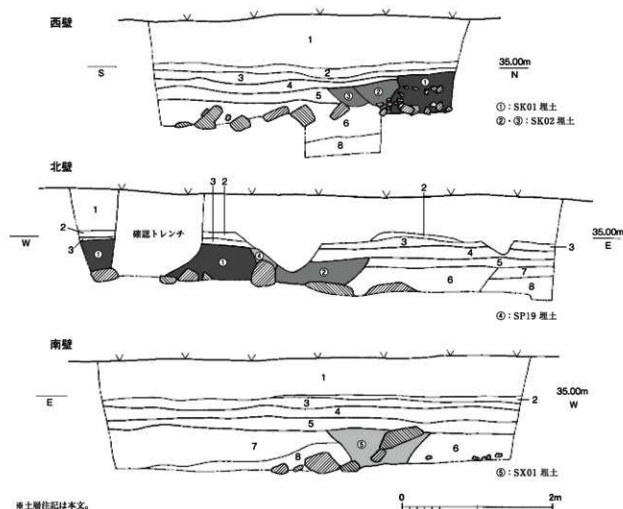
①層 暗褐色砂質土。華大の礫を多く含む。

②層 灰褐色砂質土。

③層 暗黄灰色砂質土。

④層 茶褐色砂質土。

⑤層 暗灰褐色砂質土。



第4図 調査区土層断面図 1/50

5. 遺構

今回の調査では、3面におよぶ遺構面を検出することができた。上から順に、第4層上面を「第1遺構面」、第5層上面を「第2遺構面」、第6・7層上面を「第3遺構面」と呼称する。

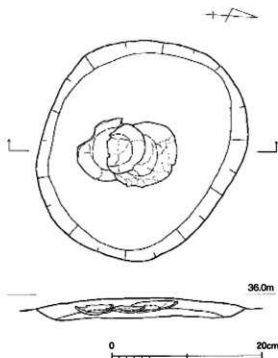
第1遺構面では、調査区中央部に溝1条（SD01）、調査区北西端に土坑1基（SK01）、調査区全域に性格不明のビット20数基（SP01～23ほか）を確認した（第5・6・20～22図）。遺構面を覆う第3層や基盤層の第4層、各遺構から出土した遺物の様相から、第1遺構面は中世後半の遺構面といえる。

SD01は、南北方向にのびる幅0.2m、検出長0.6m、深さ0.14mの溝で、須恵器杯片（第13図13）が出土している。

SK01は、隅丸方形の土坑で、調査区外に広がっている。検出した範囲は東西幅2.5m、南北長1.2mで、第6層を大きく掘り込み、深さは0.56mを測る。暗褐色砂質土を埋土としていて、土師器・須恵器・瓦器・磁器・瓦・土製品・石製品・サヌカイト剥片とともに拳大の礫が多く出土している。土師器へそ皿や東播系須恵器鉢といった通有の遺物に加えて、古代から中世の瓦（軒丸瓦・軒平瓦を含む）や移動式甕片、土師質焼成のイイダコ壺、石鍋転用の温石、青白磁皿片など、特徴的な資料が含まれる（第13図1～12）。しかし、いずれも破片であることから、廃棄土坑と考えられる。

ビットはほぼ円形で、直径約15～70cm、深さ約10～20cmである。

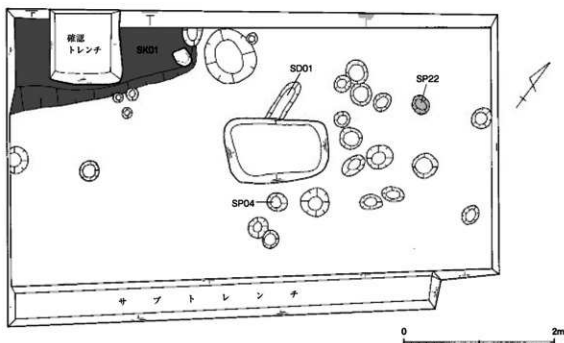
調査区北東部で検出したSP22では、土師器小皿（へ



第6図 SP22平面図・見通し断面図 1/5

そ皿）3枚（第13図15～17）が重なって出土した（第6・22図）。また、スサ入の壁土片も出土しており、建物に近接する位置であったことがわかる。あるいは、地鎮等の祭祀遺構であろうか。

各ビットから出土した遺物は中世の土師器や須恵器の小片が多いが、調査区中央南寄りのSP04からは、奈良時代の須恵器杯蓋片（第13図14）も出土している。



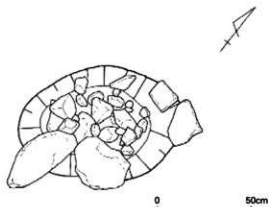
第5図 第1遺構面平面図 1/50

第2遺構面では、第1遺構面のSK01の下位に、土坑1基(SK02)を検出した。また、SK02の上面で性格不明のピットを3基(SP24~26)、調査区南寄りでは2基(SP27・28)検出した(第7~9・23図)。第1遺構面と同じくこの遺構面も、中世後半の遺構面である。

SK02は、SK01と同様に調査区外に広がっていた。検出した範囲は東西幅2.8m、南北長1.9mとSK01より一回り大きい。深さはSK01とほぼ同じで、埋土は灰褐色砂質土や暗黄灰色砂質土である。出土遺物は、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・陶器・瓦で、SK01と異なり調理具や食器が多く、完形に復元できたへそ皿も2点ある(第14図18~27)。しかし、そのほかは破片ばかりで、やはり廃棄土坑と考える。土層の切り合い関係や出土した遺物の様相から、SK02が人為的なし自然に埋まった後で再掘削したものがSK01と考えられるが、切り込んだ面が異なることから、時期差が想定できる。ただし、ほぼ同じ位置に廃棄土坑が設けられていることから、建物配置との関わりにおいて、土地利用に大きな変化はなかったことがわかる。

ピットは不定形のもの(SP24~26)と円形のもの(SP27・28)がある。

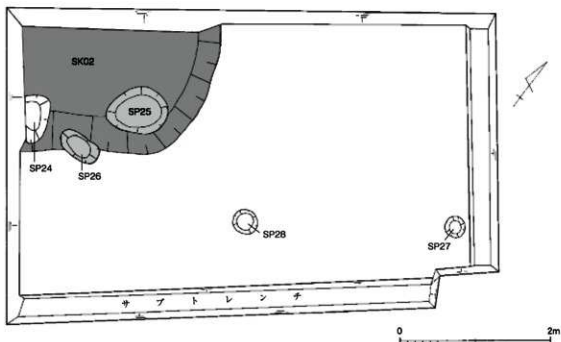
SK02の上面で検出したSP25は長径0.88m、短径0.60mの楕円形の遺構で、礫が詰まっていた(第8・9・23図)。瓦器小片とともに土師器皿(第14図28)が出土している。また、SP24やSP26からは、土師器や須恵器の細片に加えて、瓦質や土師質の煮炊具や陶器甕体部片など、中世の遺物が出土している。



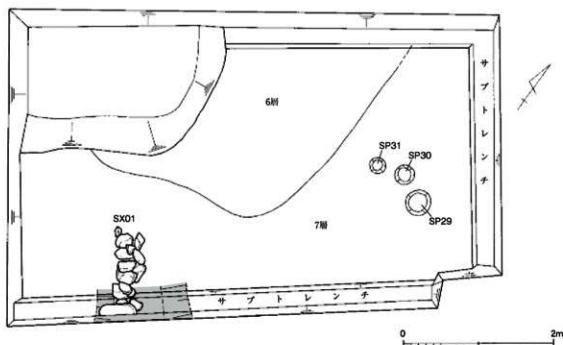
第8図 SP25平面図 1/20



第9図 SP25(南東から)



第7図 第2遺構面平面図 1/50



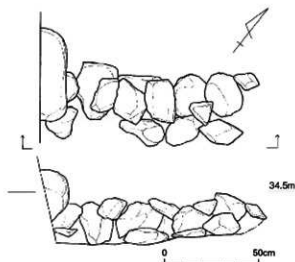
第10図 第3遺構面平面図 1/50

第3遺構面は、調査区東部に円形のピット3基（SP29～31）を確認した（第10・24図）。これらは直径20～35cmで、SP29からは古墳時代の須恵器甕片が出土している。

また、遺構面を精査した段階では把握できていなかったが、調査区南壁の土層断面の観察によって、調査区南西部に第6・7層上面から掘り込む、幅1.35m、深さ0.5mで断面形が逆台形の溝があることがわかった。この溝の埋土は第4図⑤層（暗褐色砂質土）で、この溝を掘方として、高さ約0.3m、残存長約1.1mの石列（SX01）が構築されていた（第11・12・25

図）。したがって、第3遺構面としての第10図には、SX01も合成している。なお、SX01の掘方からは、磨滅した奈良時代の須恵器杯Bの底部片が出土しているので、奈良時代以降の遺構であることがわかるが、遺構の年代は確定できない。また、その性格も不明である。ピットやSX01に伴う遺物に中世のものがみられないので、第3遺構面は、中世よりも遡る遺構を含んでいる可能性がある。

なお、第3遺構面の下位では、第8層（しまりの悪い暗黄色砂）を主体とする大規模な土石流跡を確認した。この土石流は北東から南西方向に向かって流れていて、1m大のボルダーを含んでいた（第25図）。



第11図 SX01平面図・立面図 1/20



第12図 SX01（南西から）

6. 遺物

今回の調査では、弥生土器・土師器・須恵器（東播系須恵器を含む）・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・陶器（古瀬戸・瀬戸・美濃焼・常滑焼・備前焼）・磁器（白磁・青磁・青白磁・染付）・土製品（移動式甕・イイダコ壺・土師）・石器（砥石・硯石）・サヌカイト切片・鉄釘・スサ入の壁土片などの多様な遺物が、27ℓ容量のコンテナ6箱分出土している。調査面積の割に量は多く、弥生時代後期～終末期、古墳時代後期、平安時代～鎌倉期を中心とする。以下、遺構出土遺物と遺物包含層に分けて、年代の根拠となる遺物や、特徴的な遺物を抽出して報告する（第13～16図）。

第13図は、第1遺構面の遺構から出土した遺物で、1～12がSK01、13がSD01、14がSP04、15～17がSP22に伴う。第14図は、第2遺構面の遺構から出土したもので、18～27がSK02、28がSP25の遺物である。第15図は、遺物包含層の遺物で、29・30が第3層から、31～45が第5層から、46・47が第6層から、48～52が第7層から出土している。また、第16図に写真を掲載したものは、53が第4層、54が第7層の出土遺物である。

1は東播系須恵器鉢で口縁端部は肥厚し、断面が三角形を呈する。2は橙色～にぶい褐色を呈する土師器甕体部で、焼成は良好である。外面には目の細かい平行タキを格子状に施しているが、内面は当て具の圧痕をナデ消して平滑である。煤化がみられるので煮炊具として使用した可能性と、火事などによる被熱の可能性が考えられる。3は明緑灰色に発色する青白磁片である。内面に、陽刻で白色の花弁を表現しており、小さな高台をもつ14世紀頃の中国製の皿であろう（京都市文化財保護課の赤松佳奈氏のご教示による）。土師質焼成の4は、釣鐘形のイイダコ壺の鈕部分である。土師質焼成の5は、にぶい黄褐色を呈する破片である。端部はナデによる平坦面をもつが、長刷毫等の口縁部にしては歪が大きく、使用痕跡は明確ではないが、移動式甕の底と判断した。外面は端部に直交するハケ調整、内面は端部に並行するハケ調整で、外面と内面では使用する原体が異なる。芦屋市内では、船戸遺跡第14地点で、陰刻花文緑釉陶器や方形の大形柱穴などとともに移動式甕が出土しており、何らかの祭祀に伴うものと判断している（第110集）。5も同様の性格が考えられよう。6～11は瓦片で、6が軒丸瓦、7が軒平瓦、8～10が平瓦、11が丸瓦ないし面戸瓦である。6・9・11は焼し瓦であるが、7・8・10は土師質焼成の古代瓦で、磨滅は顕著である。6は、外縁や中房は既に失われているが、圏線と珠文が認められる。瓦当裏面には、瓦当と丸瓦を接合した際の指ナデ調整が明瞭に残る。7は、磨滅が顕著で調整等は観察できないが、重廊文軒平瓦片である。幅0.8～1.0cmの外縁に加えて同じ太さの弧線がみられるので、既往調査で出土して

いる外縁の中央部に弧線が1本入る重廊文と同じである。「第7集」図版5の11と同範瓦であろうか。胎土には花崗岩風化粒を多く含んでいる。8～10は凸面に簾状タキ、凹面に布目痕がみられる。一方、11は、布目痕の残る凹面にコビキやヘラケズリを加えたもので、凸面は縦方向のナデで仕上げている。

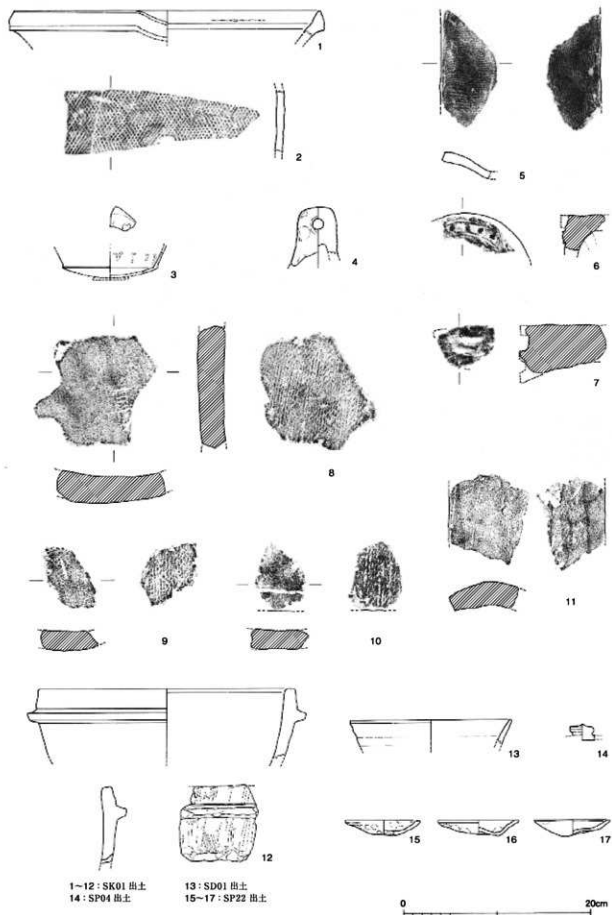
12は滑石製の石鍋を加工した、縦8.1cm、横8.0cmの板状の石製品である。明確な孔はみられないが、鍋の下部を斜めに切り落とし、端面を丁寧にミガキ仕上げているので、温石であろう。石鍋の形は、口縁部直下に断面形が台形の鋳を有するもので、木戸分類のⅢ～Ⅳに相当するので、13世紀代のものといえる（木戸1995）。

口縁端部を丸く収める13は須恵器杯であろう。14は須恵器杯蓋の宝珠つまみである。

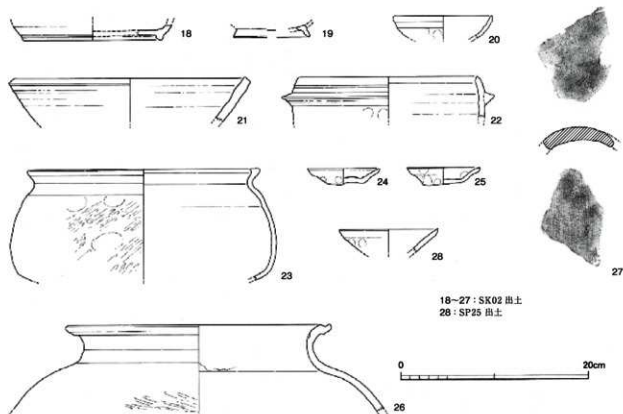
15～17は重なった状態で出土した土師皿で、手づくね成形のへそ皿である。いずれも、胎土や調整は同じで、同時に作られたものとわかる。にぶい橙色を呈する胎土は、少量の褐色砂粒を含む水糞土である。口縁部にヨコナデを加えるが、平面形は精円に近い歪なもので、底部の中心と口縁部の中心が一致しないなど、雑な作りである。なお、灯明皿等に使用した痕跡は認められない。

18は須恵器杯B身である。焼成はあまく、磨滅は顕著で、底部外縁付近に付く高台の端部が丸くなるなど、流入遺物と考えられる。19は内黒の黒色土器碗の底部で、華者で細い高台を有する。20は内黒気味に立ち上がる瓦器碗だが、暗文は観察できない。21は土師器鉢である。外傾面をもつ口端部はほとんど比厚しておらず、12世紀前半の東播系須恵器鉢に似るが、傾きや焼成状態から土師器と判断した。22は胎土にシャモットや褐色微細粒を含む土師器羽釜である。口縁部の立ち上がりは短く、鋳も小さい。体部外面には指オサエ調整がみえる。残存率の高い23は土師器の煮炊具で、甕形タイプの播丹型である（長谷川2007）。短く立ち上がる口縁部の端部が内側に巻き込むもので、15世紀後半～16世紀前半に特定できる。24・25は土師器小皿である。胎土は15～17よりも精良で、灰白色～浅黄褐色である。24・25ともに外面下部に指頭圧痕を残すが、外面上部から内面にかけてはヨコナデで仕上げている。外底面は平底に近く、底部内面外周には溝状の強いナデが巡る。26は焼成があまく、磨滅が顕著な東播系須恵器甕である。口縁部は大きく外厚し、口端部は小さく肥厚し、内面に沈線が巡る。体部は外面に並行タキを残すもので、12世紀中頃ののものかもしれない（兵庫県教委1983）。焼し瓦27は薄手の丸瓦で、凸面はタキをナデ消しているが、ちりめん皺状の痕跡が残る。凹面には目の細かい布目がみえる。

28は土師器の小皿片である。直線的に外に開き、端部を細く収めるもので、24・25より深手のへそ皿と推測



第13図 第1遺構面遺構出土遺物実測図 1 / 4



18～27：SK02 出土
28：SP25 出土

第14図 第2遺構面遺構出土遺物実測図 1/4

している。

29はオリブ灰色に発色する青磁碗である。線刻で表現する蓮弁の幅にばらつきがある。30はシルト質の堆積岩製の砥石（仕上げ砥）である。欠損して長さが7.6cm、幅3.8cm、厚さ1.1cmしか残っていないが、明確な使用痕跡が認められる。

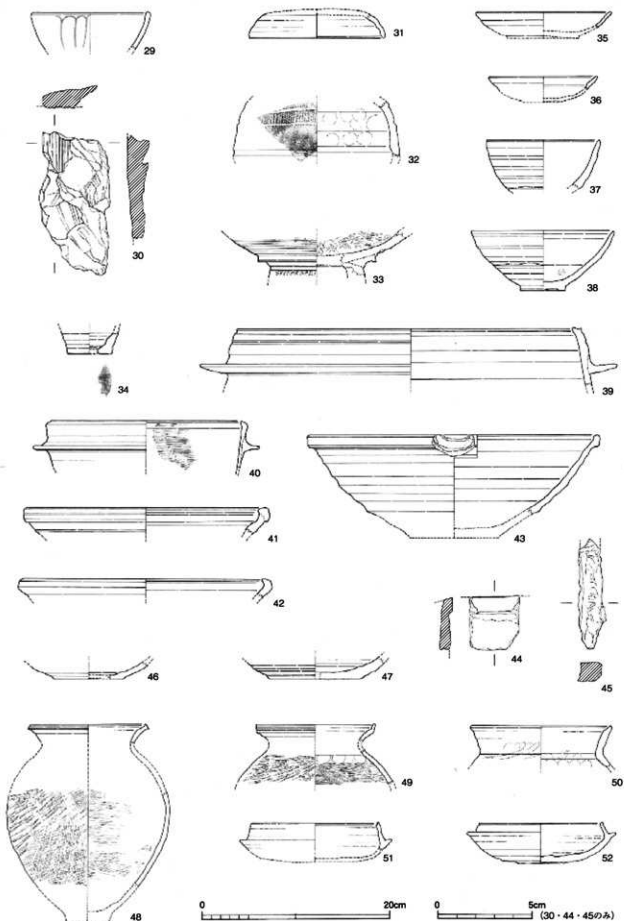
31～34は須恵器で、31が杯蓋、32が長頸壺、33が器台、34が壺Gである。31～33は古墳時代後期のもので、肩部に沈線と二段以上の列点文を施す32と、高杯形で杯部と脚部の境界部分に突帯、脚部上端にクシ描き波状文を有する33は、古墳の副葬品とみてよいだろう。34は底部外面に糸切り痕が残る。35は口縁端部が外反する緑釉陶器皿である。焼成はやや軟質で、断面は灰白色を呈し、薄い釉は浅黄～淡緑色なので、平安京近郊で作られたものである〔高橋2003〕。9世紀前半のものと考えて、底部を図上復元した。体部中位で屈曲する36は、釉が灰色に発色する白磁の皿である。天目茶碗37は、体部にやや丸みがあり、口縁部の屈曲はあまい。38は底部が完存し、口縁部も4分の1ほど残る瀬戸・美濃焼の平碗である。内面に目跡がみられる。器高は6.3cmを測り、その器形から大窯3段階（1560年代～1590年頃）の資料といえる〔藤澤2001〕。

39・40は羽釜で、使用による煤の付着が顕著である。39は瓦質土器で、復元口径が36.0cmを超える大形品である。一方、土師質土器の40は、短く直立する口縁部

に細い鈎が付くもので、内面にハケ調整を施す。内彎気味に立ち上る口縁部外面には段がみられる。東播系須恵器鉢41・42は、41の口縁部が口縁帯状であるのに対して、42は内面への巻き込みが強く15世紀に下る。43は丸みを帯びた体部に、小さな口縁帯状の口縁部が付く片口鉢である。その形態は13世紀後半頃の東播系須恵器鉢に似ているが、体部の内彎傾向が強く、外面のナデによる凹凸が著しい。被熱痕跡があるので、土師質土器ないし瓦質土器の鉢と考えるが、火災等によって二次焼成を被った東播系須恵器鉢の可能性は残る。44は欠損のため、長さ2.8cm、幅2.6cm、厚さ0.7cmしかないが、砥石または硯石の小片である。端部から0.7cm内側に、幅0.8cm、深さ0.2cmほどの切り込みがあり、砥石としての使用痕ないし小形の硯石の海であろう。石材は砂岩のようである。鉄釘45は、断面形が1.0～1.2cmの方形で、残存長は5.8cmである。

46は土師器碗・皿類の底部片で、外面に糸切り痕がみられる。47は東播系須恵器鉢だが、焼成はかなりあまく、全体に磨滅が進んでいる。底部外面には糸切り痕が残る。

48・49は弥生土器甕、50は弥生土器壺、51・52は須恵器杯身である。48は胎土や焼成状況から同一個体と判断した口縁部と体部を図上で合成している。48・49は体部外面に平行タキがみられるV様式甕だが、48は外面にハケ調整を加えており、緩やかに外反する口



第15図 遺物包含層出土遺物実測図 1/4・1/2

縁部の端面はナデによる面をもつ。一方、49は口縁が受口状である。体部にタテハケを施す50は短頸の直口壺であろう。これらは弥生時代後期～終末期に属する。51は立ち上がりが高く、口端部に沈線状のナデが巡っており、MT15型式に新しい要素が混じる。焼成堅緻な52は、器高4.3cm、復元口径13.0cmを測る。TK10型式の杯身である。底部外面にはヘラ記号とみられる直線が1本引かれている。

53は須恵器提瓶の把手である。第4層からは、東播系須恵器や瓦器・磁器（白磁・青磁）などが出土している。53が土層の年代を示すものではないが、32・33と同様に、近在に横穴式石室墳があったことの証左といえる。54は土師器の鍋や甑の把手である。

ところで、第1遺構面のSK01やSP22、第2遺構面のSK02、SP25などは、室町時代の遺物を主体とする。遺物包含層から出土した遺物も、当該期のものが多い。しかし、第2遺構面のベースとなる第5層から16世紀後葉に下る38が出土していることは注意を要する。これが第5層への混入でなければ、第5層は16世紀後葉以降に形成された遺物包含層であり、それより上位に、室町時代までの資料を伴う遺構が作られたことになる。SK01・02を慶長伏見大地震後の片づけ等の遺構と解釈すれば、地震よりも古い時期のもののみが廃棄された遺物群とみることは可能かもしれないが、14～15世紀頃の土師皿を3枚重ねて埋納していた第1遺構面のSP22と第5層の年代は矛盾する。したがって、38は、16世紀後葉以降の遺構に伴うものを第5層の遺物として取り上げたと理解する。

この場合、38が慶長伏見大地震以前に芦屋廃寺で使用されていたものである可能性と、それ以降の大坂城石垣用石材の採石に伴ってもたらされた可能性が考えられよう。本調査地の北西約40mの芦屋廃寺遺跡第115地点では、徳川大坂城期の採石場が確認されているので、当該期にこの地域に立ち入った人々がいたことは明らかである。また、本調査地の南西約150mの芦屋廃寺遺跡第62地点では、1596年の慶長伏見大地震で倒壊した建物跡を検出している。本調査地点から第62地点にかけて、東西150m、南北150mほどの緩傾斜地があって、芦屋廃寺の伽藍や僧坊・工房などの関連施設が広がっていたと考えられるが、地震後に寺院が復興した形跡はない。したがって、採石活動時には、寺跡の緩傾斜地に飯場や資材置き場が設けられた可能性は十分に考えられるだろう。

このような理解の下、第4～6層は中世遺物包含層とみなす。一方、第7層は、弥生時代後期から古墳時代の遺物に限られるので、芦屋廃寺成立以前の遺物包含層といえる。なお、第4～6層や、遺構に混入している遺物には、白鳳～奈良時代の芦屋廃寺に関わる資料は乏しい。図示した杯B身の18やSX01出土の杯B身も増減の顕著な流入遺物であったことから、本調査



第16図 遺物包含層出土遺物

地は、奈良時代頃まで芦屋廃寺の主要部分からは外れていたことが推測できる。しかし、第5層から須恵器壺G34や緑釉陶器35が出土していることから、平安時代には、本調査区にも寺院に伴う施設が広がっていたことが想定できる。

また、第5層から出土した須恵器壺32・器台33や第4層から出土した須恵器提瓶把手53は横穴式石室墳の存在を示すものである。明治時代に石棺の蓋が出土したと伝えられる西ノ坊は、本調査地点一帯の旧字名なので、近在に古墳が存在していたことは明らかである。32・33・53などの出土は、自然災害だけでなく、中世において、耕作地開発等に伴う古墳の破壊が進行していたことを示唆する資料といえよう。

7. まとめ

今回の調査では3面の遺構面を確認した。性格のわかる遺構は少ないが、第1遺構面のSK01や第2遺構面のSK02は廃棄土坑と考えられる。また、土師器のへそ皿が3枚重なって出土したSP22は地鎮に伴う遺構であろう。調査面積に比して遺物の出土量が多かったことから、本調査地点は、平安時代以降生活の場として土地利用がなされていたといえる。しかし、芦屋廃寺に直結するような古代の遺物は乏しかった。これは、古代において本調査地点の土地利用が少なかったことを示唆している。

その要因の一つとして、第3遺構面より下位で確認した土石流路からもわかるように、土砂災害を受けやすい不安定な場所であったことが想定できる。本調査地点の北西40mの位置で実施した芦屋廃寺遺跡第115地点の発掘調査では、3mを超えるボルダーを含む土石堆積物を伴う谷地形を検出しているが、この谷地形の西岸には古墳時代後期～飛鳥時代を主体とする遺構群が展開しており、当該期に人々の居住が確認されている〔第87集〕。本調査地点と第115地点の差異は、本調査地点が古代においては居住に向かない環境であり、その結果として芦屋廃寺の寺域や周辺集落の範囲外であったことを示していると考えたい。



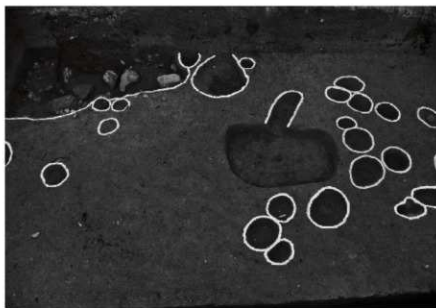
第17図 調査地近景（南西から）



第18図 調査地現況（南から）



第19図 調査区南壁土層断面
（北東から）



第20図 第1遺構面（南東から）



第21図 SK01（南東から）



第22図 SP22（手前が南西）



第23図 SK02・SP24~26 (南東から)



第24図 第3遺構面 (北東から)



第25図 SX01と土石流跡 (北東から)

第4章 堂ノ上遺跡の調査成果

第1節 地理的・歴史的環境

堂ノ上遺跡は、市内唯一の銅鐸出土地として遺跡名を付し、昭和63年度に弥生時代の遺跡として遺跡分布地図に登録した遺跡である〔第16集〕。堂ノ上銅鐸は、宝永年間（1704～1710年）に堂ノ上から出土したと伝わる外縁付鈕式流水文鐸で、現在、打出町に所在する親王寺が所蔵している〔芦屋市役所1971・1976〕。ただし、一帯は、今日住宅地となって当時の面影を留めておらず、銅鐸の正確な出土場所は不明であるため、昭和63年・平成5年に発行した埋蔵文化財包蔵地図には、遺跡の範囲を示していない（第1図）。

堂ノ上遺跡は、市域の南東部、阪神電鉄打出駅より北東へ約350mのところに位置しており、芦屋市春日町・楠町に広がる。地形的には、六甲山地南麓より舌状のび、大阪府群で構成される翠ヶ丘丘陵の縁辺部、標高11～17mの緩傾斜地に立地しており、江尻川の東岸を中心に、東西約200m、南北約300mの範囲と考えられる。現在は、縄文時代から中世に至る複合遺跡として周知している。

本遺跡における発掘調査は、平成8年（1996）に実施した阪神・淡路大震災の復興調査（第1地点）を嚆矢とする〔芦屋市教委2005a、第97集〕。当調査では、中世末期から近世の井戸、水田耕作に伴う犁痕、自然流路などを検出しており、近世に中世末期から近世の集落の存在が予測された。また、縄文時代の石鐸、古墳時代の土師器・須恵器片、中世の須恵器・陶器片、近世の肥前系陶器・磁器片などが出土した。第1地点の西側に近接する第4地点は、平成10年度に発掘調査を行ったもので、第2・3節に詳述する。中世の遺物包含層や耕作地に加えて、開析谷において、縄文時代を中心とする流路群を検出し、縄文時代中期～晩期の土器や石鐸・石錐・石匙・削器・楔形石器・石皿・叩石・石棒・ササカイト剥片などの石器、花崗岩やチャートなどの円礫、流木や種子などの植物遺体が出土した。

しかし、令和2年（2020）1月31日現在、第13地点の調査を実施しているが、未だに銅鐸に併行する時期の遺構や遺物は希薄である。

なお、本遺跡付近には、同丘陵上に遺跡が点在しており、南西側に、打出小槌遺跡、小松原遺跡、若宮遺跡（平成8年度に埋蔵文化財の存在を確認し、平成9年度からこの名称を用いるようになったので、第1図には遺跡の範囲を示していない）、金津山古墳が集中している〔芦屋市教委2006、第19・23・27・30・38・58・66・75・78・83・89・91・97・109・110集〕。

打出小槌遺跡では、旧石器時代の国府型ナイフ形石器（第4・22地点）やササカイト剥片（第7・36・37

地点）が出土している。

縄文時代では、小松原遺跡（第8地点）や若宮遺跡（第1～4・11・16～2（1）地点）で縄文時代晩期の土器が出土している。弥生時代については、若宮遺跡で前期の竅穴住居跡や土壌墓、土器棺墓（第2・4地点）、後期の溝（第11地点）、金津山古墳で前期の土坑などを確認しており、臨海部に集落の存在が知られる。打出小槌遺跡では、流路（第22地点）や弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の粘土採掘土坑（第41地点）を検出している。また、小松原遺跡では中期後半の溝状遺構（第8地点）を検出している、方形周溝墓の周溝の可能性が考えられるほか、弥生土器を含む遺物包含層を確認している（第9地点）。

古墳時代には翠ヶ丘丘陵が墓域として利用されており、前期後半の阿保親王塚古墳、中期中頃の金津山古墳、中期後半の打出小槌古墳、後期の駒塚古墳などの首長墓が営まれている。また、若宮遺跡でも5世紀後半～6世紀前半の埴輪・須恵器が出土しており、古墳群の広がりが推測できる（第42・45・50～52地点）。

奈良時代以降は、打出小槌遺跡で土器類が出土している（第1・31・36・37・41・45地点）ほか、若宮遺跡で法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦（第52地点）を検出しており、地形的に一段高くなっている丘陵南縁部に、官衙や寺院の存在を推測することができる。

平安時代後期になると、翠ヶ丘丘陵上にも集落や耕作地が展開し始めるようで、中世以降、削平面と耕作地が確認されることが多く、次第に農村化していったようである。



第1図 調査位置図 1/5000

第2節 第4地点の調査

1. 調査に至る経緯

市街地東部に位置する芦屋市春日町106番地1、106番地2、106番地6～13（敷地面積約750㎡）では、平成9年度に、基礎工事のための掘削深度が現地地表下3～4mに及ぶ鉄筋コンクリート造9階建店舗・事務所付共同住宅の新築計画が進捗した。

地権者から埋蔵文化財の存在に関する照会を受けた本市教育委員会では、当該地が周知の埋蔵文化財包蔵地である堂ノ上遺跡に近接することから、未周知の埋蔵文化財が包蔵されている可能性が高いと回答した。上記の回答を受けた地権者は、工事進行中の埋蔵文化財の不時発見を回避するために、本市教育委員会に確認調査を依頼した。そこで、本市教育委員会は、平成10年（1998）3月16日に確認調査を実施するとともに、3月17日付で、芦屋市教育委員会から兵庫県教育委員会社会教育・文化財課長宛に埋蔵文化財包蔵地の確認調査着手の報告を送付した。

確認調査を行ったところ、幅1.8m、長さ17.5mの確認トレンチにおいて、3面の遺物包含層（第2図第3～5層）が認められ、少なくとも中世の水田耕作面が3面あることがわかった（第2図）。この結果を受けて地権者と協議をしたが、計画建物の建築による遺構・遺物包含層の損壊は回避し難く、損壊を受ける建物基礎部分を発掘調査して記録保存を行う必要があると判断した。

そこで、平成10年5月11日から5月30日までの予定で、建物基礎部分約500㎡を対象として、発掘調査を実施するに至った（調査面積430㎡）。しかし、南区の

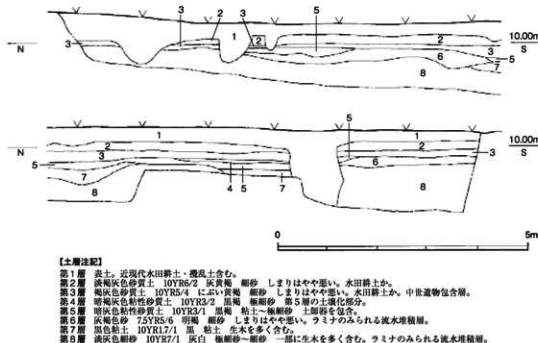
第3遺構面において、確認調査時には認識していなかった縄文時代の流路や旧石器時代に遡る可能性のある礫群等を検出したことから、発掘調査期間を延長することになり、最終的な調査期間は8月5日までとなった。

なお、今回の調査は、阪神・淡路大震災の被災地における住宅建設に伴うものであり、見なし規定を適用し、「基本方針」に基づいて実施したものである。

2. 発掘調査の方法

調査範囲は、「基本方針」に従って、計画建物の基礎部分のみとした。残土は場内処理で、反転掘削の調査方法を採用した。調査区は南北に分けて、「北区」（230㎡）、「南区」（200㎡）と呼称した（第3図）。基準高は本市道路課設置のマンホール上面基準高（T.P.10.73m）より水準測量を実施した。

南区は、重機を用いて表土を除去し、それ以下は、確認調査時の土層データを参考にしながら人力で分層発掘を行った（第4図）。ただし、確認調査時には未確認であった縄文時代の遺構や遺物包含層を検出したことから、南壁・東壁沿いに設けたサブトレンチや深部確認トレンチの土層観察に基づいて調査を進めた。一方、北区については、中世の遺構面の調査は省略し、第3層までを重機で掘削して、南区の第3遺構面に相当する遺構面から調査を行った。中央部に土層確認用に十字の深掘トレンチ（南北確認トレンチ・東西確認トレンチ）を設定して土層観察を行い、このトレンチを境にして北東部から時計回りでⅠ～Ⅳ区に細分して、人力による分層発掘を行った（第5図）。なお、Ⅱ区については、確認トレンチより西側をⅡ-Ⅰ区、東側をⅡ-Ⅱ区としている。



第2図 確認トレンチ土層断面図 1/75

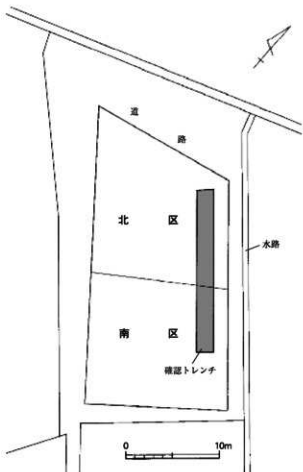
各遺構面の記録として、平板測量による平面図作成と白黒・リバーサルフィルムによる写真撮影を行った。また、必要に応じて、調査区各壁や遺構の土層断面図を作成した。出土遺物は、出土した地区や層位を記録して取り上げた。加えて、流路から出土した木材や種子の樹種鑑定や花粉分析、火山灰の可能性がある土壌のサンプルを採取して、自然科学的分析を行った。

最終的には、現地表下2.4mまで掘削を行い、その後、重機を用いて埋め戻しを行い、現状復旧した。

3. 発掘調査の経過

5月11日より南区から調査を開始した。重機を用いて表土を除去し、近現代遺構面を検出した。この面の掘削と平板による平面図作成を進めて、14日に遺構面の全景写真を撮影した。次いで、第2層を除去して第3層上面で第1遺構面を検出し、遺構の掘削と図面の作成を行った。18日に当遺構面の全景写真を撮影した後、第3層を除去して第2遺構面を検出したが、この面はベース層が不均質で、わずかに犂痕を確認したのみであったので、19日に平板で犂痕方向を記録するとどめた。同日、南壁側溝を掘削中に、東壁から約6mの位置において、第2遺構面下17cmの洪積層中（第7層）からサヌカイト製の石器が出土した。確認調査では第7層より上位にある遺物包含層しか認識していなかったが、深部に旧石器時代ないし縄文時代の遺構面がある可能性がでてきた。20日に第2遺構面の全景写真撮影を済ませて、南壁の土層断面図を作成した。その後、第3遺構面を検出するため、南壁の土層を参考にしながら掘削を進めたところ、サヌカイト切片2点が出土した。21日から第3遺構面の遺構を掘削したところ、3本の流路を確認し、流路Aから若干の土器片が、流路1（「流路B」）として報告）からサヌカイト切片が出土した。そこで、南壁沿いに「旧石器確認トレンチ」を設けて掘り下げていくと、サヌカイトやチャートの切片ならびに円礫・亜円礫を中心とする礫群を確認した。また、南区西壁の土層断面図を作成した。25日には、南区南部を中心に広がっていた黑色粘質土（第6層）の掘削を進めながら、現地で関西大学博物館学芸員山口卓也氏に旧石器時代とみられる遺構・遺物について鑑定していただいた。26日には遺構の掘削と並行して、礫群の平面図や遺構の土層断面図を作成した。

27日には、山口氏の鑑定結果を受けて、第3遺構面より深部に旧石器時代の遺構・遺物があるという推測から、調査期間を6月15日まで延長することになった。同日、第3遺構面の全景を写真撮影してから、次の遺構面への掘削に入ったところ、サヌカイトの切片・チップが集中して出土した（「サヌカイト切片集中部」と呼称）。精査と図面作成を並行して進めていくと、6月1日に、洪積層と考えていた土層（第7層）から縄



第3図 調査区配置図 1/400

文土器が出土したことで、この遺構面が縄文時代の遺構面であることがわかった。また、図面の作成が終わったところから礫やサヌカイト切片を取り上げた。なお、発掘調査時には旧石器時代の可能性を考えたサヌカイト切片集中部ならびに南壁付近の礫集中箇所（「礫群1・2・3」と呼称）では縄文土器片も出土しており、その後の検討で、縄文時代の遺構・遺物と解釈するに至った。4日には、礫群1・2・3付近で、火山灰分析のための土層試料を柱状に抜き取った。また、深部確認南北トレンチで76層を掘削したところ、サヌカイトの切片やチップが出土したので、遺物包含層が深部にまで存在していることが明らかになった。また、直径が30cmあるような巨木や植物遺体を良好に残す河川堆積物を確認した。調査期間が不足したため、5日に河川堆積物の一部を掘削し、流木を検出した。この状態を撮影した後、南区の埋め戻しを行い、南区の調査を終了した。

6月8日に北区の掘削を開始した。北区では、南区の第3遺構面に相当する面（北区上層遺構面）から調査、記録を行った。遺構面を検出して、10日には調査区の中央に十字の深掘トレンチ（南北確認トレンチ・東西確認トレンチ）を設定し、深部の遺物包含層の存否を確認した。掘削を開始すると、縄文時代の深



第4図 南区調査風景



第5図 北区調査風景

鉢の大きな破片が出土したことで、深部に縄文時代の遺構面があることが確定した。そのため、トレンチの掘削を荒掘りからガリ・パチによる掘削に切替えて調査を進めたところ、縄文時代の河川を検出し、土器と石器が相次いで出土した。このため、深部の遺構面について、トレンチ調査ではなく平面的な調査が必要と判断した。そこで、今後の対応について地権者と協議をするため、16日から30日まで調査を中断した。

7月1日に調査を再開した。まず、北区上層遺構面の遺構検出を行った。検出した遺構の多くは流路であったので、引き続いて遺構掘削を行い、3日に上層遺構面の平面図作成や全景写真の撮影を行った。その後は、確認トレンチに沿って土手を残して掘削を進めた。縄文時代の河川が複雑に重複しており、所々に土器を伴うことから、それらを記録し、切り合い関係等を推定しながら掘り下げた。流路には流木も多く、流木の間からも縄文土器が出土した。23日には、調査区の各壁面や確認トレンチの分層や土層断面図の作成・注記も進めた。平面掘削は、8月1日に無遺物層まで達した。2日から3日にかけて、土手を掘削し、層ごとに遺物を取り上げた。その後、埋め戻しを行い、現状復旧して、5日に調査を完了した。

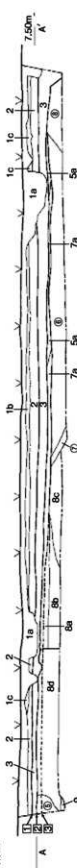
4. 調査区の層序

本発掘調査は、当初、確認調査時の土層を基準にして掘削を進めていった。しかし、南区でサブトレンチを掘削した時点で、確認調査時に調査対象と認識していなかった下位層についても、縄文土器や石器の包含を確認したため、改めて土層断面図を作成して土層番号を振り直し、本調査の基本層序とした(第6・48図)。さらに、深部の土層を観察するために、南区中央部に「深部確認南北トレンチ」を設けて記録している。また、北区については、東壁・北壁・西壁に加えて、「南北確認トレンチ」、「東西確認トレンチ」の土層断面図を作成して、調査時の基準資料とした(第11図)。ただし、縄文時代を中心とする流路が錯綜していて、南区と対応できた土層は極めて限られるので、北区については、

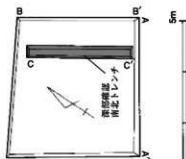
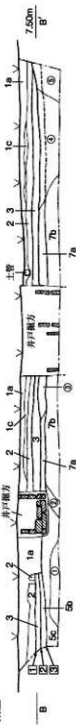
南区とは別に、「南北確認トレンチ」の南半と北半、「東西確認トレンチ」の東半と西半のそれぞれについてアラビア数字で土層番号を振り、通し番号で「〇層」と表記した。そのうえで、南区や他の土層断面と対応関係が認められるものは、その旨を土層注記に付記している。なお、確認調査時の土層番号は「確認第〇層」と表記し、本発掘調査の南区を基準とする基本層序は、土層番号を「第〇層」として区別する。

第1～3層は、上から順にほぼ調査区全面に水平堆積している。第1層は、確認第1層に対応する表土や近現代耕作土で、1a～1c層に細分した。第2層は確認第2層に対応する灰褐色砂質土で、下面が第1遺構面である。第3層は確認第3層に対応する灰茶色砂質土で、下面が第2遺構面である。第4層は褐色シルトを指標としており、概ね確認第4層に対応する。しかし、実際には第5層や第7層の上部(7a層)の土壌化部分で、層厚は2cmほどしかない。第5層は、第3層の下に堆積した中世遺物包含層で、概ね確認第5層に対応しており、5a～5c層に細分した。第6層は、第6図にみられないが、南区南部を中心に広がっていた黒色粘質土で、流路Aの主要埋土である。第7層は灰白色や灰色のシルトで、調査当初は洪積層と認識していたが、後期前半を中心とする縄文土器の包含を確認した。あるいは、確認第8層に対応するのかもしれない。なお、第4層の下面を指標として任意の第3遺構面を設定・精査したが、実際に遺構を検出したのは、第5層や7a層の下面である。第8層は旧河川堆積物と認識して8a～8d層に細分したもので、一部に石器を含む。確認第8層に対応する可能性が考えられる。第9層は、南区最深部で確認した暗緑灰色粘土で、炭化物を含む。

第6・11図には、土層番号の後に、土層名を記し、色調・粒度・しまり・包含物などを付記している。なお、色調は「新版標準土色帖1995年度後版」(農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修)により、客観化を図った。また、南区で基本層序扱いしなかった土層については、丸囲い数字で表示している。



※ ⑨・⑩図は欠番。



事C-2' は反転トレース。

【土層表記】

- | | | |
|---|------|-----|
| 1 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55 | 56 | 57 | 58 | 59 | 60 | 61 | 62 | 63 | 64 | 65 | 66 | 67 | 68 | 69 | 70 | 71 | 72 | 73 | 74 | 75 | 76 | 77 | 78 | 79 | 80 | 81 | 82 | 83 | 84 | 85 | 86 | 87 | 88 | 89 | 90 | 91 | 92 | 93 | 94 | 95 | 96 | 97 | 98 | 99 | 100 |
| 1 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 | 24 | 25 | 26 | 27 | 28 | 29 | 30 | 31 | 32 | 33 | 34 | 35 | 36 | 37 | 38 | 39 | 40 | 41 | 42 | 43 | 44 | 45 | 46 | 47 | 48 | 49 | 50 | 51 | 52 | 53 | 54 | 55</ | |

[illegible]

第6图 南区土層断面図 1/75

5. 遺構

(1) 概要

南区において、5面の遺構面を確認した。上から順に、表土直下の「近現代遺構面」、第2層直下で検出した「第1遺構面」(中世後半～近世の耕作面)、第3層直下で検出した「第2遺構面」(中世の耕作面)、第4層や第5・7層の上部を掘削して流路や落ち込みを検出した「第3遺構面」(縄文時代を中心とする遺構面)、第3遺構面の遺構掘削後に第7層を掘り下げて、礫群やサヌカイト剥片・縄文土器を検出した「最終検出面」(縄文時代の遺構面)である。ただし、最終検出面は、土器や石器の出土を指標としたもので、安定した遺構面ではなく、縄文時代の流路内堆積物の残存状況を記録したものといえる。なお、縄文時代の流路については、最終検出面において深部確認トレンチ(南北トレンチ・東西トレンチ)を設定して、状況把握に努めた。南区では、第1遺構面と第3遺構面を図示している(第7・8図)。

一方、北区は、南区深部で確認した縄文時代の流路の追究を主たる目的として、南区第3遺構面に相当する遺構面から調査を行った。落ち込み2ヶ所(落ち込み2・3)と14条の流路(流路2～15)を検出したが、土層の切り合いや検出レベルを考慮して、落ち込み2・3と流路8条(流路2～8・14)を「上層遺構面」の遺構、流路5条(流路9～13)を「下層遺構面」の遺構として平面図を示している(第12・13図)。ただし、流路10は南北確認トレンチ、東西確認トレンチの土層

断面でのみ認識したもので、流下する方向等は不明である。さらに、下層遺構面より下位にあって、流路15を含む流路群を最終検出面の遺構とした。このほかにも、調査区各壁面やトレンチにおいて多くの流水による堆積層が認められる。これらについて「流路」と呼称していないが、調査区全域が間析谷にあたっていて、長期間にわたって上流からの流水で谷が削られては再堆積を繰り返すといった、流路の形成と埋没が頻発していたことがわかる。したがって、「落ち込み」や「流路」と呼称したものについても、その性格は、間析谷における一時期の堆積層である。

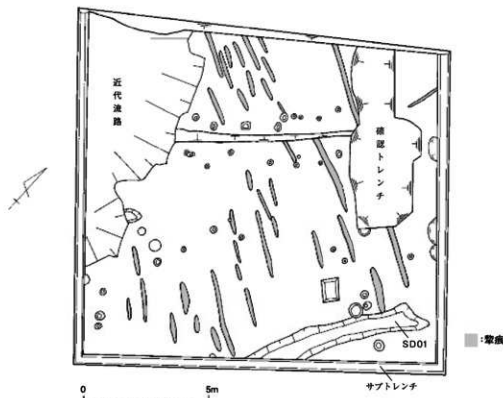
以下、南区と北区に分けて、遺構面ごとに詳述する。

(2) 南区近現代遺構面(第40図)

表土直下で確認した遺構面で、近現代の建物に伴う礎石列やビット、耕作に伴う犁痕を検出した。礎石とビットは北東-南西方向に並んでおり、建物礎石埋土からは、18世紀代の染付磁器(第15図1)が出土している。また、犁痕は、北東-南西方向ないし、それに直交する北西-南東方向にのびており、現状地形・地割りとの整合性が認められる。この遺構面に伴う遺物は乏しいが、この遺構面のベースである第2層を除去したところ、近代のガラス瓶を伴う流路(「近代流路」と呼称。)を検出したので、この遺構面が近世に遡ることはない。

(3) 南区第1遺構面(第7・41図)

第2層直下で検出した耕作面で、第3層をベースと



第7図 南区第1遺構面平面図 1/150

する。調査区北西部には、近現代遺構面形成時には埋められていた近代流路を検出したほか、全面に北西から南東方向（N35°W）に走る犁痕（幅0.1～0.3m、深さ0.02～0.07m）やピットを確認した。また、南東部では、犁痕に直行するように北東～南西方向の幅1m、深さ0.16mで褐灰色（7.5YR5/2灰褐）砂質土を埋土とする溝（SD01）を検出した。

この遺構面で検出した遺構は、北西部の流路が、近世の陶磁器（第15図2・3）やガラス瓶（第16図4～6）を含む近代の遺構であったが、そのほかの遺構からは、土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・土製品（土鍾）・鉄製品が出土している。中世の土器小片を主体とするが、若干近世に下るものがみられる。一方、ベースである第3層は、土師器や須恵器・瓦器・瓦質土器に加えて貿易陶磁や銅銭片を含む中世遺物包含層なので、第1遺構面は、中世後半～近世の遺構面と判断した。

なお、北区では、この遺構面の調査は省略した。

（4）南区第2遺構面（第42図）

第3層直下で検出した遺構面で、ベースは第4層や第5層である。第1遺構面と同様に、北西～南東方向（N32°W）に走る犁痕（幅0.10～0.32m）を検出した。第4層や第5層が中世遺物包含層であることから、中世の耕作面と考える。

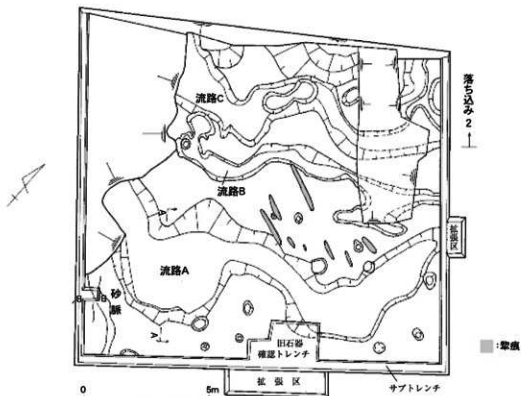
当遺構面についても、北区では調査をしていない。

（5）南区第3遺構面（第8～10・43～47図）

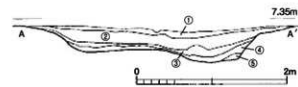
第7・8層を掘り込んで東西方向に流れる3条の流路（流路A～C）と、これらの流路よりも新しいピットや、流路を横切る北西～南東方向の中世の犁痕がみられた。流路は、南から順に、「流路A」、「流路B」、「流路C」と呼称した。このほか、南西隅では地震痕跡である噴砂の砂脈もみられた（第8・43図）。

流路Aは、やや蛇行する東～西方向の流路で、幅約2.5～5.0m、深さ約0.3～0.4mを測る。総じて南側がやや深く、底面のレベルは東から西へ緩やかに0.3mほど傾斜している（第44図）。3ヶ所に土層観察用の土手を設けて堆積状況を確認したところ、埋土の上部は第5層に相当する灰茶褐色砂質土（第9図①層）で、その下に層厚0.2mほどの黒色粘土（第9図②層）が広がっていた（第9・45図）。②層は第6層に相当する土層で粘性は強く、泥炭層といえる土質である。その下には、植物遺体を含む暗灰色粘土（第9図③層）、灰色砂（第9図④層）、白色粘性砂質土（第9図⑤層）が堆積しており、一部にはラミナもみられる。したがって、元々は水が流れる状態であったが、④・⑤層の堆積後に次第に湿潤化し、②層が形成される段階では沼地化していたことがわかる。

出土遺物を見ると、①層からは、土師器・須恵器・瓦器・土鍾などが出土しており（第17図7～16）、下限は13世紀前半であるが、転用礎である須恵器杯（7・8）もみられる。一方、②層からは、少量の縄文土器や弥生土器、石器、④層または⑤層からは、縄文土器・弥生土器の小片が少量出土している（第17図17～20）。



第8図 南区第3遺構面平面図 1/150



※土層断面の位置は第8図に表記。

【土層注記】

- ①層 灰茶褐色砂質土 7.5YR3/1 黒腐 細砂 第5層に相当。中世遺物包含層。
 ②層 黒色粘土 10YR1/7 黒 粘土 しまりは良い。粘性は強い。炭灰層。
 ③層 黒色粘土 10YR3/2 黒腐 粘土 しまりは良い。白色シルトのミナミがみられる。
 植物遺体(生木)を含む。
 ④層 灰白色シルト 10YR5/1 黒腐 細砂 中砂
 ⑤層 灰色粘性シルト 10YR4/1 黒腐 細砂 粘性あり。

第9図 流路A土層断面図 1/50

なお、縄文土器は既後期前半のもので、18のように巻貝条痕のみられるものや、19のように外面に縄文(LR)のみられる無文深鉢の体部がある。

流路Bは、流路A・流路Cとは並行する東-西方向の流路で、埋土は淡黄色細砂である。幅約0.7m、深さ約0.1mで、底面のレベルは東から西へ下降する。出土遺物には、弥生土器の細片や土師器・須恵器・土鉢(第17図21)が少量みられる。

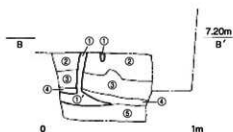
流路Cは南区北部の流路で、東-西方向である。遺構検出時に、南区北壁まで広がる「落ち込み遺構2」として認識した遺構で、埋土として第5層や第6層が堆積していた。掘削の結果、「落ち込み遺構2」の南部が幅約1.4m、深さ約0.25mの流路として完結したものが流路Cである。底面は東から西に下がっており、土器器小片や縄文土器片が少量出土したほか、近世の陶磁器が若干混入していた。その中には、縄文時代中期末の波状口縁片が1点含まれている(第17図22)。なお、落ち込み遺構2とした第5・6層の広がりは北区南端にも広がっており、最大幅は約4.5mである。

これらの流路は、第3遺構面検出した中世の隳痕より先行するが、上部の埋土は中世包含層である。元々は縄文時代-弥生時代に自然流路であったところに土砂が堆積し、徐々に沼地化した窪地状になった部分に中世の遺物包含層が堆積したものと理解している。

地震痕跡の噴砂は南西隅で確認した。砂脈は南東-北西方向に走っており、最も長いものは2mを超える(第10・46・47図)。砂脈は、炭化物を含む灰色シルト(第10図①層)を供給源として白灰色極細砂(第10図①層)が0.25m以上噴き上げており、幅は3cmを測る。土層断面図には示されていないが、調査時に中世の遺物包含層を貫いていると記録されているので、中世以降の巨大地震に伴う液状化現象といえる。

(6) 南区最終検出面(第49-51図)

第3遺構面から第7層や第8層を0.2-0.4m程度掘り下げたところで、中央部付近(流路Aの北肩部から北東方向)でサヌカイト剥片並びに縄文時代後期前半



【土層注記】

- ①層 白灰色極細砂 10YR6/3 細かい黄砂 細砂 しまりはやや悪い。噴砂。
 ②層 灰色シルト 10YR5/1 黒腐 シルト しまりは良い。炭化物を含む中砂。植物遺体を含む。
 ③層 灰白色シルト 10YR8/2 灰白 シルト しまりは良い。炭分の斑点みられる。
 ④層 灰茶褐色細砂 10YR5/2 灰黄 細砂 しまりは良い。炭分・マンガン質を含む。
 ⑤層 灰色粘性シルト 10YR5/6 明黄 細砂 しまりは良い。
 ⑥層 暗灰色シルト 10YR4/1 黒腐 シルト しまりは良い。炭化物を含む。

第10図 南区噴砂土層断面図 1/25

頃と推測される土器片の集中部(サヌカイト剥片集中部)、南端中央部で旧石器時代後期の可能性を想定した礫群3ヶ所(礫群1~3)を確認した。さらに、深部確認トレンチを設けて掘削したところ、これらの遺構群の下に流路の埋没を確認したのを受けて、礫群の北側を中心に一部を掘削した。

サヌカイト剥片集中部は、中央部の東西約1.5m、南北約1.0mの範囲で、サヌカイト剥片約100余点と少量のチャート剥片、40点以上の土器小片が出土した。改めて石器を検討したところ、石鏃・石錐・楔形石器・加工痕のある剥片は確認できたが石核はなく、旧石器時代に遡る定型石器もみられなかった。また、共存した土器は既後期前半の縄文土器片であった。したがって、これらのサヌカイト剥片は縄文時代後期前半まで下る一群であって、旧石器時代の遺構とはいえない。また、その性格は、石器製作跡そのものではなく、近在で石器加工時に生じた剥片や不要になった石器が河川内に流入、堆積したものと考えられる。

南端中央部で検出した礫群については、南壁側に東西約4.3m、南北約1.0mの長方形の拡張区を設けて掘削した結果、3つのグループ(「礫群1」・「礫群2」・「礫群3」)と認識した(第51図)。直径15cm程度の円礫86個以上が、平面では東西4.5m、南北2.0mの範囲に、垂直方向では標高7.2~7.4mの範囲に分布していた。石材は、花崗岩や花崗斑岩に加えてチャートが混じっている。調査時には後期旧石器時代の礫群の可能性を考えたが、密集度の低さや被痕跡が認められないことを考慮すると、人為的な遺構というより河川への流入堆積物とみるべきである。

旧河川の埋積土はラミナのみられる灰色系の砂質土・砂(第6図⑬・⑭~⑰層)や植物遺体を含む灰色系の砂(第6図⑱~⑳・㉑・㉒・㉓・㉔層)が多いが、灰色シルト(第6図⑬・㉕層)や木材の腐植層(第6図㉖層)もみられる。また、下部には直径5cm以下の礫を多く含む灰白色砂礫(第6図㉗層)もある。流木が多くみられたことから、周辺の樹木等が流入するほどの出水が起ころ、そのあとに湛水するといったことが繰り返

返される環境であったことがわかる。なお、ここからは、縄文時代後期を中心とする土器片や石器が出土しているが、図化できたものはない。

(7) 北区開析谷の土層 (第11図)

北区では基本層序の第5層まで重機で除去した上で、それより深部を調査対象としたことや、流路の錯綜のため、第6図で示した南区の基本層序との対応比定は困難であった。このため、北区中央部に十字に設けた南北確認トレンチと東西確認トレンチの土層観察に基づき、基本層序第7層以下を対象として、安定したシルトを指標とする新たな基本層位Ⅰ～Ⅳ層を設定した(第11図)。個々の土層番号は、南北トレンチの南半・北半、東西トレンチの東半・西半ごとに通し番号を付し、土層注記によって対応関係を示している。

Ⅰ層は、しまりの非常に良い白褐色シルトで、南北トレンチ北半4層がこれに当たる。落ち込み3や流路2・5のベースである。

Ⅱ層は、灰色シルトで、しまりは非常に良い。南北トレンチ北半14層や東西トレンチ東半7層、北区東壁26層に相当する。流路14はこの層よりも上位に位置し、流路9・10はこの層の上面から切り込んでいる。

Ⅲ層はⅡ層の直下にある暗灰色シルトで、しまりは非常に良く、植物遺体を含む。南北トレンチ南半35層や南北トレンチ北半15層、東西トレンチ東半8層、北区東壁27層に相当する。流路12はこの層の上面から切り込んでおり、流路12よりも上位に位置する流路11もこの層を切っている。なお、Ⅲ層下面において出土したとされる縄文土器やサヌカイト剥片があり、その中には第20図52のように、晩期の篠原式〜新段階に下るものが含まれている。混在とみているが、Ⅲ層をはじめとする基本層位の堆積時期は不明である。

Ⅳ層はしまりの良い灰色シルトで、植物遺体を含んでいる。南北トレンチ南半36層や南北トレンチ北半21層、東西トレンチ東半9層、東西トレンチ西半24層で、流路11・12はこの層を切り、底面はさらに下位に達している。なお、Ⅳ層より下位にも、流路15などの流路が存在している。

ちなみに、南北トレンチ南半23・24層、南北トレンチ北半29・46・47層、東西トレンチ東半13・14層、東西トレンチ西半34・35層など、しまりの良い灰緑色粘土や暗灰青色極細砂、淡緑色粘土などのグライ層を地山と判断したことを付記しておく。

(8) 北区上層遺構面 (第11・12・52〜56図)

概ね南区第3遺構面に相当するが、第5層をほとんど除去した状態で遺構面を検出しており、中世に下る遺構は確認していない。落ち込み2ヶ所(落ち込み2・3)と流路8条(流路2〜8・14)を当遺構面の遺構と判別した(第12図)。北西部に落ち込み3が広がっ

ていて、その下位には流路9が位置する(第13図)。流路2〜8・14は、落ち込み3と流路9との間のレベルで確認したものである(第11図)。

落ち込み3は、北区北西部、Ⅳ区からⅠ区西部にかけて検出した深さ約0.15mの浅い落ち込みである。埋土は黒色粘土(第11図南北確認トレンチ北半1層)で、南区の流路A・Cと共通する。ここからは、縄文土器片やサヌカイト剥片と共に、土師器や須恵器、瓦器の小片が出土している。その中には、第18図24のように凸帯文のある晩期の長原式の鉢も含まれる。この遺構は、南区の流路A②層や流路Cの上位に広がっている落ち込み2と同じく、湿地化を示すものである。

流路2・5は同一の流路であるが、調査中は別の遺構として扱っていた。流路2はⅠ区北東端から南西に向かい、Ⅳ区南東端をかすめて緩やかに弧を描き、流路5はⅢ区南端に向かって北から南へ流れていて、検出長は約17mである(第54・56図)。幅約1.30m、深さ約0.25〜0.50mを測る。埋土は、東西確認トレンチ西半で、しまりの悪い黄灰色砂(2層)、南北確認トレンチ北半で、しまりの良い淡灰色粗砂混じり砂質土(2層)、褐色砂(5層)や黒色粘土(6層)で、一部にラミナがみられる。弥生土器片が少量出土しており、第18図23は中期の甕である。

流路3は、Ⅰ区東部を北西から南東方向に流れていて、幅約1.5m、深さ約0.15mを測る(第54・55図)。土層断面図に対応する土層は明示されていないが、実績報告書によると、埋土は黄色砂である。弥生土器ないし縄文土器の小片が少量出土している。

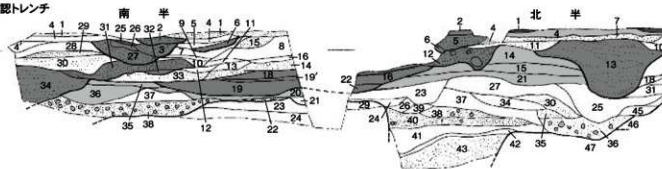
流路4は、Ⅱ・Ⅲ区を東から西に向かって流れる流路で、幅約1.1m、深さ約0.15mを測る(第56図)。埋土は、南北確認トレンチ南半にみられる白黄色砂(2層)で、細砂〜粗砂で構成されており、しまりはやや悪い。

流路6は、Ⅱ〜Ⅲ区を北西から南東方向に流れるが、北側は流路3に切られている(第55図)。幅約0.7m、深さ約0.15mを測る。埋土は、黒灰色粘土で、弥生土器の体部片や、器面を磨いている縄文時代後期のボール形の浅鉢片がわずかながら出土している。

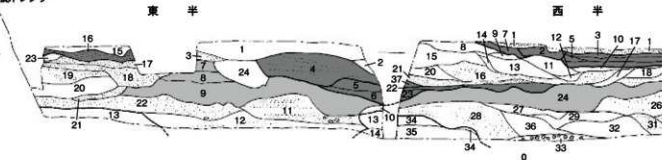
流路7は、Ⅳ区南西部からⅢ区にかけて検出したが、北側肩部しか確認できなかったため規模はわからない。東西確認トレンチ西半で観察したところ、埋土は、上から、しまりの良い黒褐色シルト(3層)、灰白色極細砂(4層)と黄褐色砂(5層)、黒色粘土(6層)で、沼地状の堆積層に砂が流入している。確認できた最深部の深さは0.35mである。

流路8は、Ⅲ区北端でみられた東西南方向の流路で、幅約0.8m、深さ約0.1mを測る。埋土は黒色粘土〜シルトで、南北確認トレンチ南半6層と東西確認トレンチ西半7層が該当する。西側は流路5によって壊されており、東側も流路4・14と切り合うようで、検出長は2.3mのみである。

南北 確認トレンチ



東西 確認トレンチ



【南北確認トレンチ南半土層】

- 1層 黄褐色細砂質土 10YR7/4 に近い黄褐色 細砂-粗砂 しまりは非常に良い。東西トレンチ西半8層に対応。
- 2層 黄褐色 10YR8/2 灰白 粗砂-細砂 しまりはやや悪い。流路4層上。
- 3層 黄褐色 10YR8/6 黄褐色 粗砂-細砂 しまりはやや悪い。鉄分を多く含む。ラミナがみられる。流路14層上。
- 4層 黄褐色細砂質土 10YR8/2 灰黄褐色 極細砂 しまりは良い。
- 5層 黄褐色細砂 10YR8/2 灰黄褐色 極細砂 しまりは良い。
- 6層 黄褐色 10YR8/2 黒 粘土 しまりは良い。流路8層上。
- 7層 黄褐色細砂 10YR4/1 黄褐色 極細砂-粗砂 ラミナがみられる。
- 8層 灰白シルト 10YR8/1 灰白 シルト しまりは非常に良い。ウツ管がみられる。東西トレンチ東半1層、東西トレンチ西半13層に対応。
- 9層 黄褐色 7.5YR8/4 黄褐色 粗砂-中砂 しまりはやや悪い。
- 10層 黄褐色粘土質砂質土 10YR3/1 黒褐色 粗砂 灰化層を含む。
- 11層 黄褐色細砂質土 2.5YR8/2 灰白 極細砂
- 12層 灰褐色粘土質土 2.5Y6/1 灰黄褐色 粗砂
- 13層 黄褐色細砂質土 2.5Y7/2 灰黄褐色 粗砂
- 14層 黄褐色 粗砂 7N/0 灰白 中砂-粗砂 しまりはやや悪い。東西トレンチ西半21層に対応。
- 15層 黄褐色 10YR7/6 黄褐色 粗砂-中砂
- 16層 灰白シルト 10YR5/1 黄褐色 シルト 直立した直径3mmの植物遺体が見られる。東西トレンチ西半20層に対応。
- 17層 黄褐色細砂 10YR6/3 に近い黄褐色 粗砂 ラミナがみられる。
- 18層 灰褐色細砂 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂 灰化層を含む。ラミナがみられる。東西トレンチ西半37層に対応。流路12層上。
- 19層 黄褐色シルト 10YR4/1 灰白 シルト 直立した植物遺体を含む。東西トレンチ東半6層、東西トレンチ西半23層に対応。流路12層上。
- 20層 黄褐色シルト 10YR5/1 黄褐色 粘土 直立2mmの直立した植物遺体を含む。東西トレンチ東半5層、東西トレンチ西半22層に対応。流路12層上。
- 21層 黄褐色 10YR7/2 に近い黄褐色 粗砂-中砂 しまりは良い。直径3mmの直立した植物遺体を含む。当面の下層で土路が出土する。ラミナがみられる。東西トレンチ東半9層、東西トレンチ西半24層に対応。
- 22層 黄褐色 10YR7/2 に近い黄褐色 粗砂-中砂 しまりはやや悪い。
- 23層 灰褐色粘土 2.5Y6/1 オリーブ黄 粘土 しまりは良い。南北トレンチ北半20層、東西トレンチ東半13層、東西トレンチ西半34層に対応。地山と判別。
- 24層 黄褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは良い。東西トレンチ東半14層、東西トレンチ西半35層に対応。地山と判別。
- 25層 黄褐色 10YR8/3 黄褐色 粗砂-粗砂 しまりはやや悪い。流路14層上。
- 26層 黄褐色粘土 10YR5/2 灰黄褐色 シルト しまりは良い。流路14層上。
- 27層 黄褐色 7.5YR8/4 黄褐色 粗砂-粗砂 鉄分を多く含む。ラミナがみられる。流路14層上。
- 28層 灰褐色 10YR6/2 灰黄褐色 シルト しまりは良い。
- 29層 黄褐色 10YR8/6 黄褐色 粗砂-粗砂 しまりはやや悪い。
- 30層 黄褐色 7.5YR8/4 黄褐色 粗砂-粗砂 しまりはやや悪い。鉄分を多く含む。ラミナがみられる。
- 31層 灰褐色 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂-粗砂 しまりはやや悪い。水平に植物遺体が見られる。鉄分を含む。ラミナがみられる。流路11層上。
- 32層 黄褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは良い。直立3mmの植物遺体を含む。東西トレンチ東半7層に対応。流路11層上。
- 33層 黄褐色 10YR5/3 に近い黄褐色 粗砂-粗砂 しまりはやや悪い。直立3mmの植物遺体を含む。東西トレンチ東半8層に対応。流路11層上。
- 34層 灰褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは良い。直立3mmの植物遺体を含む。東西トレンチ東半9層、東西トレンチ西半24層に対応。流路11層上。
- 35層 灰褐色シルト 10YR5/2 灰黄褐色 シルト しまりは良い。灰化層を含む。南北トレンチ北半13層、東西トレンチ東半8層に対応。直層。
- 36層 灰褐色シルト 10YR5/2 灰黄褐色 シルト しまりは良い。直立3mmの植物遺体を含む。南北トレンチ北半21層、東西トレンチ東半9層、東西トレンチ西半24層に対応。直層。
- 37層 灰褐色粘土質土 2.5Y6/1 黄褐色 粗砂
- 38層 灰褐色 10YR8/1 灰白 粗砂 しまりはやや悪い。チャート主体の直径5cm以下の円筒を含む。

【南北確認トレンチ北半土層】

- 1層 黄褐色 10YR1/2/1 黒 粘土 しまりは良い。縄文時代前期-中期の土路を若干含む。落ち込み3層上。
- 2層 灰褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂-粗砂 しまりは良い。流路5層上。
- 3層 黄褐色粘土質土 10YR5/1 黄褐色 粗砂-粗砂 しまりは良い。直径10cmの円筒を含む。
- 4層 灰褐色粘土 10YR8/2 灰白 シルト しまりは非常に良い。1層。
- 5層 黄褐色 7.5YR8/4 黄褐色 粗砂 しまりは良い。中部に、鉄分を多く含む。ラミナが顕著にみられる。流路5層上。
- 6層 黄褐色 10YR1/2/1 黒 粘土 しまりは良い。流路5層上。
- 7層 灰白粘土質砂質土 10YR8/2 灰白 粗砂 しまりは良い。
- 8層 灰褐色粘土質砂質土 10YR8/2 灰白 粗砂 しまりは良い。
- 9層 灰褐色粘土質土 10YR8/2 灰白 粗砂 しまりは良い。
- 10層 黄褐色粘土質砂質土 10YR8/3 黄褐色 粗砂
- 11層 黄褐色 7.5YR6/6 黄褐色 粗砂-中砂 ラミナがみられる。
- 12層 灰褐色 10YR8/4 黄褐色 しまりは良い。ラミナがみられる。直径30cm以下の粘土ブロックを含む。流路10層上。
- 13層 黄褐色粘土 (上) 7.5YR7/6 黄褐色 (下) 2.5YR6/1 黄褐色 しまりは悪い。ラミナが顕著にみられる。上部は褐色。下部は黄褐色を呈する。縄文土路を含む。流路9層上。
- 14層 灰褐色シルト 10YR6/1 黄褐色 シルト しまりは非常に良い。東西トレンチ東半7層に対応。直層。
- 15層 黄褐色シルト 10YR4/1 黄褐色 シルト しまりは非常に良い。直径5mmの植物遺体が見られる。南北トレンチ南半35層、東西トレンチ東半8層に対応。直層。
- 16層 灰褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは良い。植物遺体が多く含む。流路12層上。
- 17層 黄褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは非常に良い。流路9の影響を受けて、粗砂を含む。
- 18層 灰褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは非常に良い。流路9の影響を受けている。
- 19層 灰褐色粘土質砂質土 5H/1 黄褐色 粗砂 しまりは非常に良い。
- 20層 灰褐色シルト 10YR8/2 灰白 シルト しまりは非常に良い。



【南西確認トレンチ北半土層】

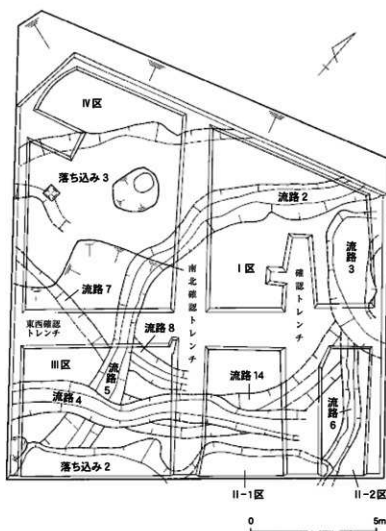
- 21 灰白色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは良い。直立方向の植物遺体を含む。南北トレンチ南半36層、東西トレンチ東半9層、東西トレンチ西半24層に対応。下面より縄文土層出土。古層。
- 22 灰白色植物遺体混じりシルト 10YR4/1 褐灰 シルト 直立・水平方向の植物遺体を含む。流路12層上。
- 23 灰白色植物遺体混じりシルト 10YR3/1 褐灰 シルト しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 24 淡灰色細砂 25Y6/1 黄灰 細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 25 灰白色細砂 25Y4/1 黄灰 極細砂
- 26 灰白色粘土 10YR2/1 黒 粘土 炭化物を若干含む。
- 27 灰白色細砂 10YR7/1 灰白 極細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 28 淡灰色微細粒じり砂質土 25Y7/1 灰白 細砂 しまりは非常に良い。直径20cmの円礫を含む。
- 29 灰白色粘土 25Y6/1 オリーブ灰 粘土 しまりは良い。南北トレンチ南半23層、東西トレンチ東半13層、東西トレンチ西半34層に対応。地山と判断。
- 30 淡灰色細砂 25Y6/1 黄灰 細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。タカイト薄片を含む。
- 31 灰白色粘質砂 10Y4/1 褐灰 細砂～粗砂
- 32 淡灰色砂質土 10YR6/1 褐灰 極細砂 しまりは良い。
- 33 淡黄色砂 25Y7/1 淡黄 細砂～中砂 しまりはやや悪い。
- 34 灰白色細砂 10YR5/1 褐灰 極細砂 植物遺体を含む。
- 35 灰白色砂 10YR5/8 明黄灰 細砂～粗砂 しまりは悪い。
- 36 灰白色砂 25Y5/1 黄灰 細砂～粗砂 しまりは悪い。直径10cmの円礫を含む。
- 37 灰白色細砂 10YR5/1 褐灰 極細砂 植物遺体を含む。
- 38 灰白色砂 10YR4/1 褐灰 細砂～粗砂 直径10cmの円礫を含む。シルトを含むラミナがみられる。
- 39 灰白色シルト 10YR6/1 褐灰 シルト しまりは良い。
- 40 灰白色砂 10YR8/1 灰白 細砂～中砂 しまりは悪い。直径10cmの円礫を含む。
- 41 淡黄色砂 25Y7/1 灰白 細砂 しまりはやや悪い。
- 42 灰白色植物遺体混じり砂 10YR2/2 黒 植物遺体埋積層 しまりはやや悪い。
- 43 灰白色砂 25Y7/1 灰白 しまりはやや悪い。
- 44 灰白色微細粒じり砂質土 10YR3/1 褐灰 細砂 直径3cm程度の礫を含む。
- 45 灰白色砂質土 10YR3/1 黒 細砂
- 46 灰白色粘土細砂 58A/1 暗青灰 極細砂 しまりは良い。東西トレンチ西半33層に対応。地山と判断。
- 47 淡灰色粘土 25G7/1 暗青灰 灰 粘土 しまりは良い。地山と判断。

【東西確認トレンチ東半土層】

- 1 灰白色シルト 10YR6/1 灰白 シルト しまりは非常に良い。ウツギがみられる。南北トレンチ南半8層、東西トレンチ西半13層に対応。
- 2 褐色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは良い。炭化物を多く含む。
- 3 淡黄色砂 10YR7/4 に近い黄砂 細砂～粗砂 しまりは良い。
- 4 淡黄色砂 10YR7/4 に近い黄砂 細砂～粗砂 しまりは良い。
- 5 灰白色シルト 10YR3/1 褐灰 粘土 直径2cmの流されてきた植物遺体を含む。ラミナがみられる。流路10層上。
- 6 灰白色シルト 10YR4/1 褐灰 シルト 流されてきた植物遺体を含む。南北トレンチ南半19層、東西トレンチ西半23層に対応。流路12層上。
- 7 灰白色シルト 10YR6/1 褐灰 シルト しまりは非常に良い。南北トレンチ北半14層に対応。古層。
- 8 灰白色シルト 10YR6/1 褐灰 シルト しまりは非常に良い。断面には、直径3mmの植物遺体が直立方向にみられる。南北トレンチ北半15層に対応。古層。
- 9 灰白色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト 細砂 しまりは良い。直径3mmの直立した植物遺体を含む。ラミナがみられる。当面の下で土層が出土する。
- 10 灰白色シルト 25Y7/1 灰白 しまりはやや悪い。南北トレンチ南半36層、南北トレンチ北半20層、東西トレンチ西半24層に対応。古層。
- 11 灰白色砂 10YR5/1 褐灰 細砂～中砂 しまりはやや悪い。南北トレンチ南半21層、東西トレンチ西半28層に対応。
- 12 灰白色砂 10YR6/1 褐灰 細砂～粗砂 ラミナがみられる。
- 13 灰白色微細粒じり砂質土 25G7/1 オリーブ灰 粘土 しまりはやや悪い。
- 14 灰白色植物遺体混じり砂 10YR4/1 暗青灰 細砂 しまりは良い。南北トレンチ南半24層、東西トレンチ西半35層に対応。地山と判断。
- 15 淡灰色細砂 10YR4/2 灰黄灰 シルト しまりは良い。
- 16 淡黄色砂 10YR5/6 黄灰 細砂～粗砂 ラミナがみられる。流路14層上。
- 17 灰白色細砂 25Y7/2 灰白 細砂
- 18 淡黄色細砂 25Y6/1 黄灰 細砂
- 19 淡黄色砂 25Y6/1 黄灰 細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 20 灰白色シルト 10YR4/1 褐灰 シルト しまりは非常に良い。植物遺体を含む。
- 21 灰白色砂 N7/0 灰白 細砂～粗砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 22 淡灰色砂 N7/0 灰白 しまりは悪い。ラミナがみられる。縄文土器を含む。
- 23 灰白色シルト 25Y6/1 黄灰 シルト しまりは良い。
- 24 流路12層上。

【南西確認トレンチ西半土層】

- 1 灰白色砂質土 10YR4/2 灰黄灰 細砂～粗砂 しまりは良い。中世遺物包含層。第5a層。
- 2 灰白色砂 10YR8/2 灰白 細砂～中砂 しまりは悪い。流路5層上。縄文時代晩期後半の土層を含む。
- 3 褐色シルト 10YR2/2 黒 細砂 しまりは良い。流路7層上。
- 4 灰白色細砂 N7/0 灰白 極細砂 流路7層上。
- 5 灰白色砂 10YR6/6 明黄灰 細砂～中砂 ラミナがみられる。流路7層上。
- 6 褐色粘土 10YR1/2 黒 粘土 しまりは良い。流路7層上。
- 7 褐色シルト 10YR2/1 黒 シルト しまりは良い。流路8層上。
- 8 淡黄色植物遺体混じりシルト 10YR7/4 に近い黄砂 細砂～粗砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 9 灰白色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト
- 10 灰白色細砂 10YR3/1 褐灰 極細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 11 淡黄色砂 25YR4/4 灰黄 極細砂 ラミナが顕著にみられる。
- 12 暗灰色微細粒じり砂質土 10YR5/1 褐灰 シルト～極細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 13 淡黄色砂 10YR7/6 明黄灰 極細砂～粗砂 しまりはやや悪い。ラミナが顕著にみられる。
- 14 灰白色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりはやや悪い。ラミナが顕著にみられる。
- 15 灰白色シルト 10YR6/1 灰白 シルト しまりは非常に良い。ウツギがみられる。南北トレンチ南半8層、東西トレンチ東半1層に対応。
- 16 淡黄色砂 58YR4/4 に近い黄砂 細砂～粗砂 しまりはやや悪い。炭分を多く含む。ラミナが顕著にみられる。
- 17 灰白色細砂 10YR5/1 褐灰 細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 18 淡黄色植物遺体混じりシルト 10YR6/1 明黄灰 細砂～粗砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 19 淡黄色砂 75YR4/4 褐 細砂～粗砂 しまりはやや悪い。炭分・マンガン分を多く含む。ラミナが顕著にみられる。下面で縄文土器が出土。
- 20 灰白色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト 直径2.5mmの直立した植物遺体を含む。南北トレンチ南半15層に対応。
- 21 灰白色粘土 10YR2/1 黒 粘土 直径2.5mmの直立した植物遺体を含む。南北トレンチ南半19層、東西トレンチ東半5層に対応。流路12層上。
- 22 灰白色粘土 10YR3/1 褐灰 粘土 直径2.5mmの流されてきた植物遺体を含む。南北トレンチ南半19層、東西トレンチ東半6層に対応。流路12層上。
- 23 灰白色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト 細砂 しまりは良い。直径3mmの直立した植物遺体を含む。ラミナがみられる。当面で土層が出土する。
- 24 南北トレンチ南半20層、東西トレンチ東半9層に対応。古層。
- 25 暗灰色微細粒砂質土 N5/0 灰 極細砂 しまりは良い。
- 26 淡黄色砂 10YR6/3 に近い黄砂 細砂～粗砂 しまりはやや悪い。ラミナが顕著にみられる。
- 27 淡黄色砂 10YR5/2 灰黄 極細砂～粗砂
- 28 灰白色砂 10YR7/2 に近い黄砂 細砂～中砂 しまりはやや悪い。南北トレンチ南半21層、東西トレンチ東半10層に対応。
- 29 淡黄色砂 10YR6/1 褐灰 極細砂～粗砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
- 30 灰白色砂 10YR6/1 褐灰 細砂 しまりはやや悪い。直径2cm以上の礫を含む。ラミナがみられる。
- 31 灰白色砂 10YR8/1 灰白 細砂～粗砂 しまりは悪い。水平方向の植物遺体を含む。ラミナがみられる。
- 32 暗灰色植物遺体混じり粗砂 10YR4/1 褐灰 極細砂～粗砂 しまりはよく。直立方向・水平方向の植物遺体を含む。ラミナがみられる。
- 33 灰白色砂 10YR7/1 灰白 細砂 しまりは悪い。チャート主体の直径5cm以下の円礫を含む。
- 34 淡黄色粘土 25G7/1 オリーブ灰 粘土 しまりは良い。南北トレンチ南半23層、南北トレンチ北半20層、東西トレンチ東半13層に対応。地山と判断。
- 35 暗灰色植物遺体混じり砂 58A/1 暗青灰 極細砂 しまりは良い。南北トレンチ南半24層、東西トレンチ東半14層に対応。地山と判断。
- 36 灰白色砂 10YR6/1 褐灰 極細砂～粗砂 炭化物を含む。
- 37 灰白色細砂 10YR5/2 灰黄灰 極細砂 炭化物を含む。ラミナがみられる。南北トレンチ南半18層に対応。流路12層上。



第12図 北区上層遺構面平面図 1/150

流路14は流路4の下位に位置しており、I区東壁からII区を経てIII区へ、北東から南西方向に流れている。幅約1.4m、深さ約0.4mを測る。埋土は、ラミナのみられる褐色系の細砂～粗砂(南北確認トレンチ南半3・25・27層、東西確認トレンチ東半16層、北区東壁24層)を主体とし、鉄分を多く含む部分もある。また、一部に淡灰茶色シルト(南北確認トレンチ南半26層)を含む。なお、北区II-1区褐色砂から出土した第24図165の楔形石器は、この流路からの出土と考えられる。

このように、当遺構面では、遺構埋土から縄文時代晩期の土器片や弥生土器が出土している。落ち込み3は中世に下る遺物を含んでいるが、他の遺構の年代は弥生時代を下限とすると考える。しかし、遺物は少量で磨滅の顕著な小片ばかりなので、調査地点に近接して集落が展開していたというよりは、翠ヶ丘丘陵上のやや離れた集落からの流入資料とみるべきである。

(9) 北区下層遺構面 (第13・14・57～65・69・70図)

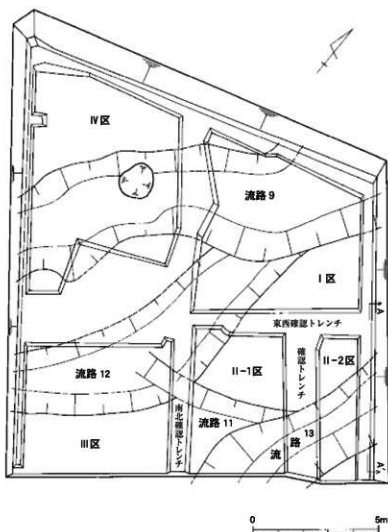
流路5条(流路9～13)を検出した。これらは上層遺構面検出遺構より規模が大きかったり、植物遺体の

包含が多かったりする傾向がある(第13・57図)。

流路9はI・IV区を北東から南西に流れる流路で、幅約3.5m、深さ約0.75～1.2mを測る(第58・59図)。埋土は南北確認トレンチ北半で確認したラミナが顕著にみられる砂(13層)で、淡黄褐色(上部は橙色、下部は淡灰色)を呈する。第18図25のような晩期の縄文土器片やサヌカイト剥片、円礫が少量出土している。

流路10は、北区中央の南北確認トレンチ、東西確認トレンチの土層断面でのみ確認したものであるため、走行方向等は不明である。埋土は、しまりが悪くラミナのみられる淡黄色砂で、南北確認トレンチ北半12層と東西確認トレンチ東半4層が該当する。上層遺構面の流路5・8の下位に位置しており、下層遺構面の流路12よりは新しい。

流路11はIII区を東西方向に流れる流路で、調査区東壁に達するが、流路13や近現代井戸堀方と切り合い関係があつて、北側肩部しか検出できなかった。幅約2m以上、深さ約0.2～0.6mを測る(第60～65図)。埋土はラミナのみられる灰黄褐色系の砂(南北確認トレンチ南半31・32・34層、第14図15層)で、木の枝や木の



第13図 北区下層遺構面平面図 1/150

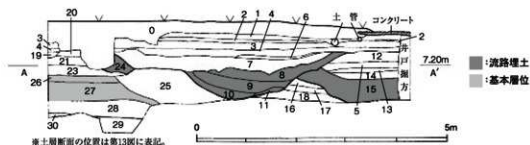
実などの植物遺体を多量に含んでいた（第14図）。サンプルを採取して鑑定を行ったところ、ハクウンボクの内果皮やカエデ属並びにクリの木材を確認した（第26・27図）。また、縄文土器も多種出土しており、中期では、船元Ⅱ式1期の深鉢（第18図26）、北白川C式の深鉢（第18図27）、後期では、中津Ⅰ式の深鉢（第18図28～35）や浅鉢（第18図36）、北白川上層式2期の鉢（第19図39）、晩期では篠原式の可能性のある深鉢（第19図40）、長原式や船橋式とみられる深鉢（第19図41～43）がある。とくに流路下部で検出した32・34といった中津Ⅰ式の深鉢はまとまっていて、残存状態も良く、この流路が機能していた主たる年代を示すと考えられる。このほか、欠損後に磨石・叩石に転用した石皿（第25図171）もみられる。

なお、流路11は流路12の堆積後の流路で、上部を流路13や上層遺構面の流路14に切られている。

流路12は、Ⅰ区からⅡ-Ⅰ区の北西部をかすめてⅢ区へ、北東から南西に流れる流路で、北区中央部では流路10の直下に位置する。幅約2.8m、深さ約0.35mを測る（第69図）。埋土には植物遺体を多く含んでおり、

暗灰色～灰色の粘土やシルト（南北確認トレンチ南半19・19'層、南北確認トレンチ北半16・22層、東西確認トレンチ東半5・6層、東西確認トレンチ西半22・23層）が主体で、上部にはラミナのみられる灰色極細砂（南北確認トレンチ南半18層、東西確認トレンチ西半37層）も堆積している。実績報告書には土器は出土しなかったと記されているが、土器観察用の土手を崩した際、流路12の埋土と認識した灰色シルト（南北確認トレンチ南半19層）の底から、口縁部に円形刺突文、外面に押し引き刺突による連弧文を施した船元Ⅰ式の深鉢片（第19図44・45）が出土している。これらは今回出土した土器では最も古いものであり、他の遺構との上下関係を勘案すれば、流路12を縄文時代中期前葉の遺構とみても矛盾は生じない。また、下層から出土した植物遺体の中には、鑑定によってエゴノキの内果皮やクリ材が含まれていることが明らかになっている（第26・27図）。

流路13は、Ⅱ区を北東から南西に流れる流路で、一部は流路11を切り込んでいる。幅約2.6m、深さ約0.8mを測る。埋土には植物遺体を多く含んでいて、北区東



【土層注記】

- 0層 近現代成土・掘乱土。
 1層 近現代木田土。第1層に対応する。
 2層 近現代木田土。第1層に対応する。
 3層 褐色砂質土 10YR5/4 黄褐色 細砂 第2層に対応する。
 4層 灰褐色砂質土 10YR5/6 黄褐色 極細砂・細砂 中世遺物を含む。
 5層 黄褐色砂質土 10YR7/6 明黄褐色 細砂 第3層に対応する。
 6層 暗紫灰色シルト 10YR4/1 褐灰 シルト しまりは良い。第5層に対応する。
 7層 淡黄褐色細砂 10YR6/4 に黄褐色 細砂 しまりはやや悪い。ラミナがみられる。
 8層 黒色植物遺体混じり粘土 10YR17/1 黒 粘土 水平方向の植物遺体を含む。流路13埋土。
 9層 黒灰色植物遺体混じり砂質土 10YR3/1 黒褐 細砂 流土多く含む。流路13埋土。
 10層 暗灰色植物遺体混じり砂 10YR4/1 褐灰 細砂・粗砂 しまりはやや悪い。植物遺体を含む。流路13埋土。
 11層 淡黄褐色細砂 10YR5/2 灰黄褐色 細砂 しまりはやや悪い。植物遺体を含む。流路13埋土。
 12層 灰白色シルト 10YR8/1 灰白 シルト しまりは非常に良い。ウツ管がみられる。東西トレンチ西平15層に対応。
 13層 淡灰色シルト 10YR4/1 灰白 シルト。
 14層 淡灰色細砂 10YR8/1 灰白 細砂。
 15層 淡灰色植物遺体混じり砂 10YR4/2 灰黄褐色 生の流土を多量に含む。縄文時代後期・晩期の遺物を含む。ラミナがみられる。南北トレンチ南平34層に対応。流路11埋土。

- 16層 灰色シルト 10YR6/1 褐灰 シルト しまりは良い。直立方向の植物遺体を含む。
 17層 暗灰色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは良い。直立方向の植物遺体を含む。
 18層 灰白色細砂 10YR8/1 灰白 極細砂・細砂 植物遺体を含む。
 19層 褐色砂質土 7.5YR5/6 明黄褐色 細砂 しまりは良い。
 20層 灰白色シルト 10YR8/1 灰白 シルト しまりは非常に良い。ウツ管がみられる。12層と同じ。東西トレンチ西平15層に対応。
 21層 黄褐色砂質土 10YR7/6 明黄褐色 細砂 5層と同一。
 22層 淡灰褐色シルト 10YR7/2 に黄褐色 シルト しまりは良い。炭化物を含む。
 23層 淡黄褐色細砂 10YR5/6 黄褐色 細砂・粗砂 ラミナがみられる。東西トレンチ東平16層に対応。流路14埋土。
 24層 白灰色細砂・淡黄褐色細砂・淡灰色シルト 東西トレンチ東平17～19層に対応。
 25層 灰色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは非常に良い。東西トレンチ東平7層、南北トレンチ北平14層に対応。II層。
 26層 灰色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは良い。直立方向の植物遺体を含む。
 27層 灰色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは良い。直立方向の植物遺体を含む。
 28層 灰色シルト 10YR5/1 褐灰 シルト しまりは良い。直立方向の植物遺体を含む。
 29層 灰緑色粘土 25G5/1 オリーブ灰 粘土 しまりは良い。地山と判断。
 30層 黒色砂混じりシルト

第14図 北区東壁 流路11・13土層断面図 1/75

壁（第14図）では、上から黒色粘土（8層）、黒灰色砂質土（9層）、暗灰色砂（10層）、淡黄褐色細砂（11層）であった。当初は水が流れていたものが次第に滞水状態になっていったことがわかる。口端に刻目を施し外面にケズリのみられた篠原式の浅鉢（第19図46）をはじめとして、後期～晩期の縄文土器片が出土している。

以上のように、下層遺構面から検出した流路からは、縄文時代後期を中心としながら中期に遡る土器や晩期に下る土器が出土している。流路の切り合い関係を見ると、Ⅱ区では流路11→流路13の順に、Ⅲ区では流路12の堆積後に流路10と流路11が形成されているので、この遺構面から検出した流路では、流路12が最も先行するといえる。ちなみに、流路12から出土したと判断した土器は中期前葉の船元I式なので、流路12は中期前葉に遡る可能性がある。一方、最も土器量の多い流路11の下層土器群は中津I式の深鉢なので、流路11の主たる時期を後期前葉とすると、流路11と流路12の土器の前後関係と遺構の上下関係とは整合性をもつ。また、流路11と流路13は、切り合い関係から流路13の方が新しいことがわかるが、流路13から出土した土器は、流路11から出土した土器の下限である長原式・船橋式の深鉢（41～43）よりも古い篠原式の鉢（46）である。これについては、晩期の土器は、いずれも散発的に破片が出土する状況であることや、流路という遺構の性格を考慮すれば、縄文時代晩期ないしそれ以降に流入した遺物とみることができる。これは、上層遺構面から検出した遺構の年代観とも適合する。したがって、下

層遺構面から検出した遺構は、縄文時代中期～晩期のものといえる。

なお、埋土をみると、ラミナの認められる砂を主体とする流路9～11、シルトを主体とする流路12、下位が砂であるのに対して、上位は徐々に粘質化していく流路13に分けることができる。

(10) 北区最終遺構面（第66～68・71図）

Ⅳ層よりも下位で確認した遺構で、流路15を含む流路群である。残念ながら土層断面図に流路の埋土に関する注記はないが、部分的に描かれた平面図やレベルの記録によって、ある程度の復元は可能である。

流路15は流路9の下位に検出した流路で、Ⅰ区西部からⅣ区にかけてのびている。その方向は流路9に似て、北肩部は北東～南西方向を示しているが、南肩部は明示されていない。流路9より規模は大きく、長さ7.5m以上、幅7.5m以上、深さ0.6m以上あったようである。植物遺体をよく含んでおり、鑑定によってクロマツの球果やエゴノキの内果皮、クリ材、クマシデ属の木材の存在が確認できている（第26・27図）。なお、少量の縄文土器を伴っていたようだが、実態は不明である。

第11図の南北確認トレンチ北半をみると、流路9の下に碗形の断面形を示す25層（灰色極細砂）や36層（黄灰色砂礫）、注記に植物遺体を含むと記されている34層（黒灰色極細砂）や37層（暗灰色極細砂）があるので、これらが流路15の埋土であった可能性が高い。

(11) 小結

このように、本調査地は、開析谷に位置しており、南区第3遺構面、南区最終検出面、北区上層遺構面、北区下層遺構面、北区最終遺構面では、縄文時代中期～弥生時代にかけての流路や落ち込みを検出した。遺構埋土と捉えたものも遺構扱いしなかったものも、いずれの土層も河川堆積物である。褐色や灰色、黒色の粘土～シルトと砂礫が繰り返し堆積しており、上流からの流水によって砂礫の供給が旺盛な環境と、流水が停滞して湿地となっている環境が頻りに繰り返され、徐々に谷が埋没していった様子がうかがえる。その中には、植物遺体も含まれていて、とくに北区下層遺構面の流路11～13や北区最終遺構面の流路15の包含量が多かった。その多くは自然木の枝や樹皮、木の実だが、伐採痕跡や加工痕跡があるようにみえるものもあった。自然科学的分析（次節に詳述）によって、大型植物遺体にはクロマツ、エゴノキ、ハクウンボク、自然木（流木）にはカエデ属の一種やクマシデ属の一種、クリが確認されている。これらの分析から、縄文時代中期～後期頃、周辺の丘陵には松林や森林が広がっていた様子がうかがえる。

なお、この谷が埋没した後、本調査地で人々の生活痕跡が認められるようになるのは、中世になってからである。第1～3遺構面では犁痕が検出されており、連綿と耕作地として利用されていたことがわかる。なお、耕作土に縄文土器がほとんど混在していない様子から、開墾時に開析谷を大きく再掘削するような地形改変は行われなかったのだろう。このほか、遺構に伴うものではないが、平安時代後期～鎌倉時代前半頃の土器や貿易陶磁がまぎれ込んで出土しているので、近在に当該期の集落が営まれていたこともわかる。ただし、中世後期～近世の遺物の出土量が極端に少ないのは、より低地に集落が移動したためだろう。

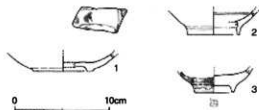
さらに、本調査地は長期にわたって耕作地として利用され続け、居住域として利用されるようになるのは近現代になってからであることも明らかになった。

6. 遺物

(1) 概要

今回の調査では、27ℓ容量コンテナ63箱分の土器・石器・植物遺体などが出土した。

土器類は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・



第15図 南区遺構出土遺物実測図 (1) 1/4

瓦器・瓦質土器・灰釉陶器・陶器・磁器と多様である。瓦や土鉢もみられる。なお、縄文土器については、器形や型式、時期について、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部整理保存課の大本朋弥氏にご教示いただいた。

石器は、石鎌・石錐・石匙・削器・楔形石器・石皿・叩石・石棒・サヌカイト剥片がある。ただし、旧石器時代に遡る石器は見当たらず、剥片は多いが、石核は含まれておらず、石器加工場の一括資料というより、石器加工場や石器を用いる集落に近接する谷地形に流入した二次移動の資料群とみることができ（兵庫県立考古博物館学智支援課の山本誠氏のご教示による）。流路から出土した植物遺体の多くは自然木や木の実であるが、これらはいずれも経年変化による劣化が著しく、現状では十分な観察が行えないことから、図化等は行わなかった。

以下、土器類は遺構から出土したものと遺物包含層から出土したものに分けて報告しており、第15～17図が南区の遺構から出土した遺物、第18～20図が北区の遺構から出土した遺物、第21・22図が包含層から出土した遺物である。また、第23～25図は石器類である。なお、縄文土器と石器、貿易陶磁は巻頭図版1・2ならびに第72～78図に写真を示している。

(2) 南区遺構出土遺物 (第15～17・72図)

第15図には、近現代遺構面と第1遺構面に伴う近世磁器を図示している。1は近現代遺構面の礎石掘方埋土から出土したもので、くわわんか手の染付皿、2・3は第1遺構面の近代流路から出土したくわわんか手の染付碗で、いずれも18世紀代のものである。

第16図の写真は、第1遺構面の近代流路から出土したガラス瓶で、この流路の年代の根拠となる資料である。白色ガラス瓶の4は、器高5.4cmで、口縁部に蓋に合わせた溝があることから、化粧クリームの瓶といえる。隅丸方形の胴部には円形の装飾があり、素文の面と縦方向の刻みの入る面が交互に配置されている。また、底部は輪高台状になっていて、高台内に「148」のエンボス文字がある。5は器高9.0cmの透明ガラス瓶で、このガラスにも気泡がみられる。口縁部から1.8cmの位置まで、内面に白色の汚れがあるのは、コルク



第16図 南区近代流路出土ガラス瓶

等の蓋で栓をしていた痕跡であろう。6は器高6.5cmの褐色ガラス瓶で、ガラスの中には所々に気泡がみられる。遮光性の蓋付き薬瓶である。これらのガラスは、大正時代末から昭和時代初期のものである。

第17図は、第3遺構面の流路A～Cから出土したもので、7～20が流路A、21が流路B、22が流路Cの遺物である。

流路Aは、上層に古代～中世の遺物を含んでおり、須恵器転用硯(7・8)、瓦器碗(9～12)、土師質土器鍋(13)、瓦質土器羽釜(14)、土鍾(15・16)を図化した。一方、下層には少量の弥生土器や縄文土器、石器を含んでおり、最下部から出土した17～20は縄文土器片である。7・8はやや高い高台をもつ杯で、7の高台内には墨が付着している。8は内底面が磨り減っている。瓦器碗片は多く出土しており、暗文の退化傾向がみてとれる。15は長さ5.4cm、幅2.8cm、厚さ1.7cmを測る有溝土鍾。16は管状土鍾の破片で、ともに土師質焼成である。17は無文深鉢の口縁部で、粘土紐の輪積み痕が明瞭に残る。18は巻貝条痕のみられる口縁部片である。19・20は無文深鉢片で、19の外面には縄文(LR)がある。これらはいずれも縄文時代後期前半に属する。

流路Bは、少量の土器細片と共に、土師質焼成の棒状有孔土鍾(21)が出土している。

流路Cは、少量の土師器小片や縄文土器片に近世の

陶磁器が若干混入していた。22は縄文時代中期末の波状口縁である。凹点が主文様で、内面や外面口縁端部に縄文(RL)がみられる。

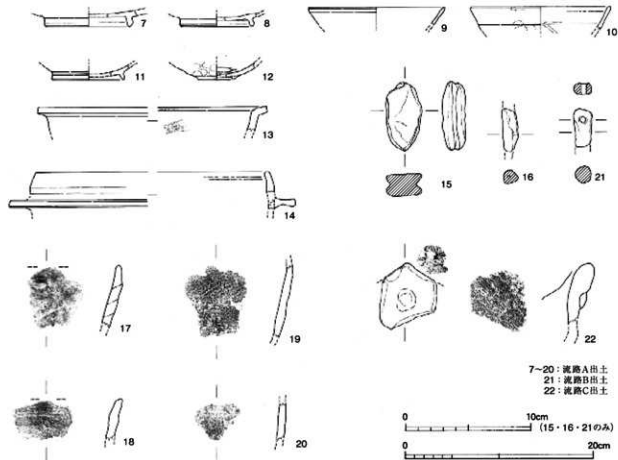
(3) 北区遺構出土遺物(巻頭図版1、第18・19・72～74図)

第18図には、上層遺構面で検出した落ち込み3と流路5、下層遺構面で検出した流路9・11から出土した土器を、第19図には下層遺構面で検出した流路11～13から出土した土器を図示しており、23が流路5、24が落ち込み3、25が流路9、26～43が流路11、44・45が流路12、46が流路13に関わる。また、第20図には、取り上げ時に層位を明記していても各流路との対応関係が不明のものや、発掘調査直後の抽出時に出土層位等の記録を失っているが、北区の開析谷から出土したと推定できるものを挙げている。

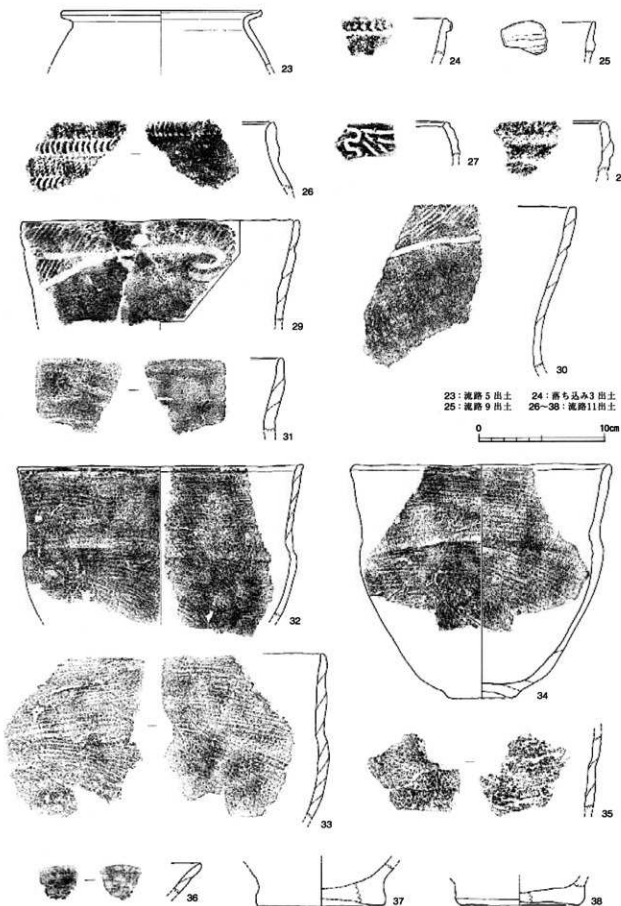
弥生土器の甕23は、にぶい黄橙色を呈する。頸部は「く」の字状に外反して、口縁端部を積み上げる第IV様式の甕である。流路2・5から出土した他の土器も弥生土器片なので、当該期の遺構と考える。

24は土師器・須恵器・瓦器の小片とサヌカイト剥片とともに出土した縄文土器で、磨滅と鉄分の付着が顕著である。口縁部外面の凸帯に刻目をもっており、晩期の長原式の深鉢であろう。

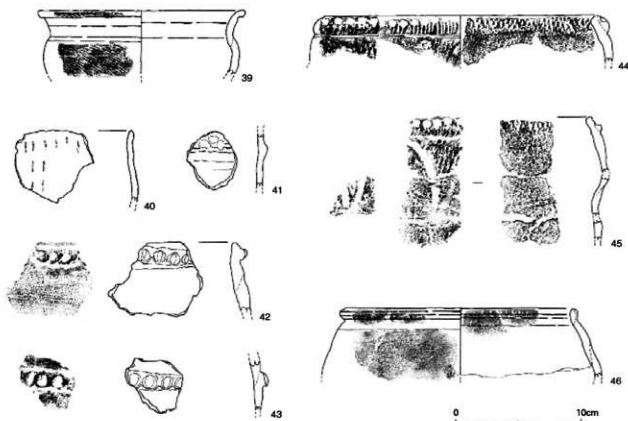
25は磨滅しているが凸帯文が観察できる。流路9か



第17図 南区遺構出土遺物実測図(2) 1/4・1/3



第18図 北区遺構出土遺物実測図 (1) 1/3



39～43：流路11出土 44・45：流路12出土 46：流路13出土

第19図 北区遺構出土遺物実測図(2) 1/3

ら出土したこのほかの土器片も概ね晩期後半のもので、サヌカイト剥片や円礫と共存している。

流路11からは、中期～晩期の土器が出土している。図化したものでは、26・28～31・34・39・42は流路11の「下層」「下部」「底」といった記録のあるもので、32・35・40・43は、「灰白色砂層c」から、36は流路11の中層から出土したものである。なお、同一個体の破片がまとまって出土した32・34は、出土状態を撮影している(第64・65図)。

流路11から出土した最も古いものは、船元Ⅱ式1期(泉編年の第3様式)〔泉2008〕の深鉢26である。口縁部内面に半截竹管文を施し、外面には縄文(RL)と凸帯上の爪形文(刻目)がみられる。キャリパー形のくびれがゆるい器形と推定する。27は内彎気味に立ち上がる口縁部の外面に、沈線による区画文がみられる。中期末の北白川C式の新段階の深鉢であろう。

胎土に5mmを超える砂粒を含む28は磨減が顕著だが、幅広の沈線が2条観察できる鉢口縁部である。

29・30は水平口縁の深鉢で、外面は太い沈線によるJ字文より上に縄文(LR)があり、J字文より下の無文部分は縄文を磨り消している。どちらも外面に煤が付着しており、直接接合できなかったので図面を分けているが、同一個体であろう。31は胎土に金雲母を含む無文土器深鉢で、外面の貝殻条痕、内面のナデが顕著である。32～34は内外面ともに巻貝条痕の顕著な

無文土器深鉢で、頸胴部界に巻貝を横引きした段がある。口頭部の条痕は横方向であるのに対して、胴部の条痕は斜め方向で、32・33の口縁端部には面取りがある。34はくぼみ底まで残存しており、底部の内外面は丁寧になでられている。なお、32に近接して出土したが、接合できなかった胴部片を巻頭図版1(上)に「A」として掲載している。35は粘土の接合痕跡が明瞭な無文深鉢である。深鉢28～35では、29・30が後期初頭の中津Ⅰ式で、その他も中津式に伴行するだろう。

浅鉢の口縁部36は、外面にミガキを加えていて光沢がある。内面の調整も丁寧だが、こちらはミガキではないようである。また、底部片37・38は流路11の下層に堆積していた流木の下から出土したもので、どちらもやや上げ底である。これらも後期前葉頃とみてよい。

第19図に図示した39は口縁部と体部に縄文のある鉢で、後期前葉の北白川上層式2期と考えられる。40は薄手で、外面に刻みが4段ほどある深鉢の口頭部である。晩期中葉の篠原式まで下るだろう。41は凸帯上面に刻みがみえないので、凸帯上面の刻目の間隔が広がる長原式頃の深鉢であろう。なお、凸帯より上に円形の刺突文のようなものが見えるが、ガジリと考えている。42と43はどちらも凸帯上に大きな刻目がある。胎土や色調、厚さ、調整技法が共通しており、二条凸帯をもつ砲弾形の深鉢の同一個体片とみて大過なからう。時期は晩期後葉の船橋式である。

このように、流路11からは、中期～晩期の土器が出土しているが、最も量が多くかつ破片が大きいのは後期初頭の中津Ⅰ式である。とくに、流路下部で検出した32～34といった深鉢は、残存状況も良いので、水流によって移動してきたものではない。したがって、この流路が機能していた主たる年代を示すと考えている。ただし、流路11下部から出土した破片の中には、40～43のように晩期に下るものも含まれているので、晩期末に至るまで、流路11において谷の浸食と再堆積が繰り返されていたことがわかる。

44・45は、ともに南北確認トレンチ南半の19層の底から出土したもので、流路12に伴うものと判断した。口縁部の断面形態が少し異なっており、直接接合できなかったで別の報告番号を付けているが、同一個体の可能性が高い。また、巻頭図版1（下）のB・C（出土層位不明）、D～J（44・45と同一層位から出土）も同一個体の破片であろう。いずれも色調は灰黄褐色で、外面口縁部には黒変が認められる。口縁端部に円形刺突文があり、外面の凸帯上に刻目を施す。口縁部外面には縄文と押し引き刺突による連弧文がみられる。また、内面にも縄文がある。器形はキャリパー形と推測できるもので、船元Ⅰ式と考える。

46は、流路13の下層から出土したもので、口端に刻目をもつ浅鉢である。外面はケズリを施しているが、内面は粘土紐接合痕が残る。流路13からは、この他にも後期～晩期の縄文土器片が出土している。

47は北区東西確認トレンチ西半の19層、流路7の直下でⅣ層直上から出土したもので、鉄・マンガング分が付着しているが、口縁部外面に磨り消し縄文と沈線によるJ字文がみえる。中期末葉の北白川C式新段階ないし後期初頭の中津Ⅰ式の深鉢であろう。48は北区東西確認トレンチ東半の「19・22層の境界層」出土と記録されているもので、流路14よりも下位から出土している。砂粒の混入が顕著で、キャリパー形のくびれはゆるい。外面に縄文（RL）と半截竹管による平行沈線文を施す。中期中葉の船元Ⅱ式と考える。49も北区東西確認トレンチ東半の「19・22層の境界層」から出土している。外面に縄巻き縄文（RL）を観察することができるので、48より新しい船元Ⅳ式であろう。北区東西確認トレンチ西半の「19・24層間」から出土したと記録されている50は、土層断面図をみると、Ⅳ層上面出土と言い換えることができる。口縁部外面にかすかに沈線が残っており、後期初頭の中津式と考えられる。波状口縁の深鉢片51は、北区南北確認トレンチ南半30層（流路11埋土の上層）から出土している。口縁部は内側に向かって肥厚しており、外面に磨り消し縄文（LR）があるので、中津式といえる。52は北区Ⅲ層下面から出土したとされるものだが、内面に条痕、外面に刻目があり、晩期中葉の篠原式～新段階まで下ると考えられる。なお、胎土には角四石を含ん

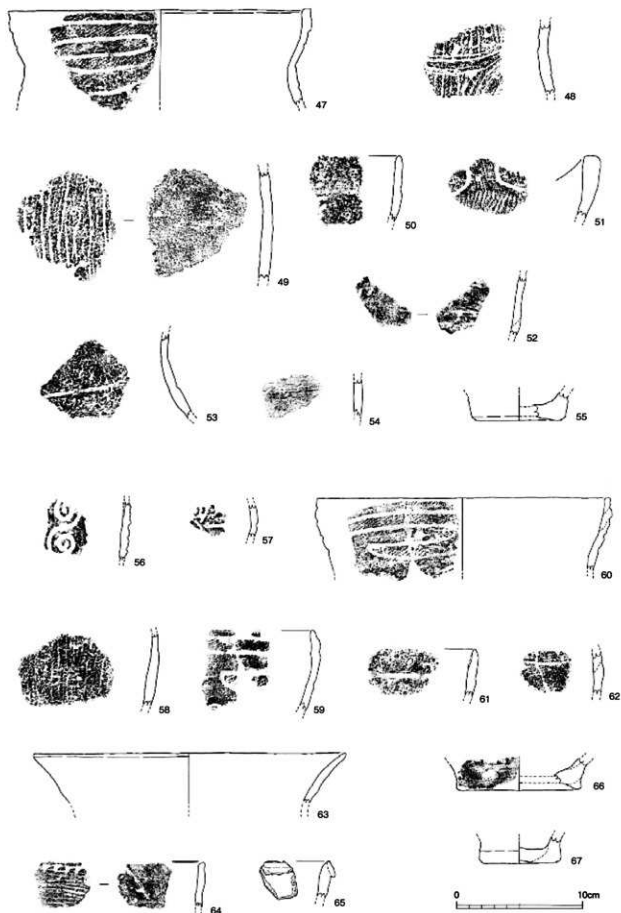
でいる。53と54は、南区7b層から出土している。砂粒を多く含む53は、磨り消し縄文が観察できるので、中津式～福田Ⅱ式の深鉢胴部片である。また、54は巻目条痕のある無文深鉢体部の破片である。底部片55は、南区サヌカイト剥片集中部の下から出土したもので、7b層出土とみて良い。53～55はいずれも後期前葉のものといえる。

56・59～62は「北区東西確認トレンチ縄文河川」出土と記録があるが、どの流路に対応するのかかわからない。56は鉄分によって砂が付着しているが、器壁が薄いことや、連弧文の間の渦巻きが明瞭に残ることから、中期末の平式の胴部片とわかる。57は記録が失われており、層位等は不明であるが、押し引き刺突文や縄文が観察できるので、中期末頃のものとする。58は「北区Ⅱ・2区南壁沿い清掃中」に出土したため、層位等がわからない。外面に縄巻き縄文を施すので、中期後葉の船元Ⅳ式か里木Ⅱ式であろう。角張った砂粒を多く含んでいる。59・60は緩やかに内彎する口縁部の外面に磨り消し縄文・J字文があり、後期初頭の中津式の深鉢である。61・62は磨減が顕著だが、かすかに磨り消し縄文が観察できる。61は深鉢口縁部片、62は体部片で、どちらも中津式とみて良い。63は「北区Ⅱ・2区南壁沿い清掃中」に出土したもので、層位等は不明である。無文深鉢の外反する口縁部で、晩期前半の滋賀里Ⅲa式～篠原式古段階に下るものである。64は「北区Ⅰ区東壁沿い確認トレンチの縄文前期下の砂層」出土と記録があるが、対応する土層を比定できない。直口の深鉢口縁部外面に三叉文があるので、63と同時期のものといえる。65は「北区Ⅱ・1区縄文河川（灰色砂層b層）」出土であるが、どの流路の埋土か確定できなかった。口縁部に凸帯文をもつもので、晩期の長原式である。記録が失われており、出土した土層等が不明な66と北区Ⅱ・2区南壁沿い清掃中に出土した67は、底部片である。どちらも後期～晩期のもので、66は外面に条痕が観察できる。

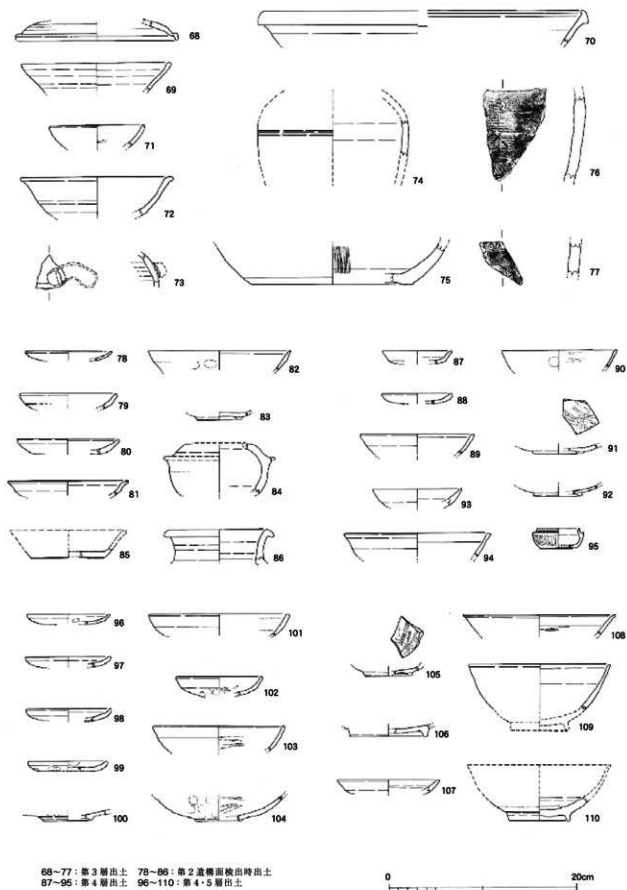
以上のように、北区で検出した開析谷から出土した土器は、中期～晩期の縄文土器が主体を占めており、上層遺構面についてみると、弥生時代中期のものや、中世に下るものも認められる。

（4）包含層出土遺物（巻頭図版2、第21・22図）

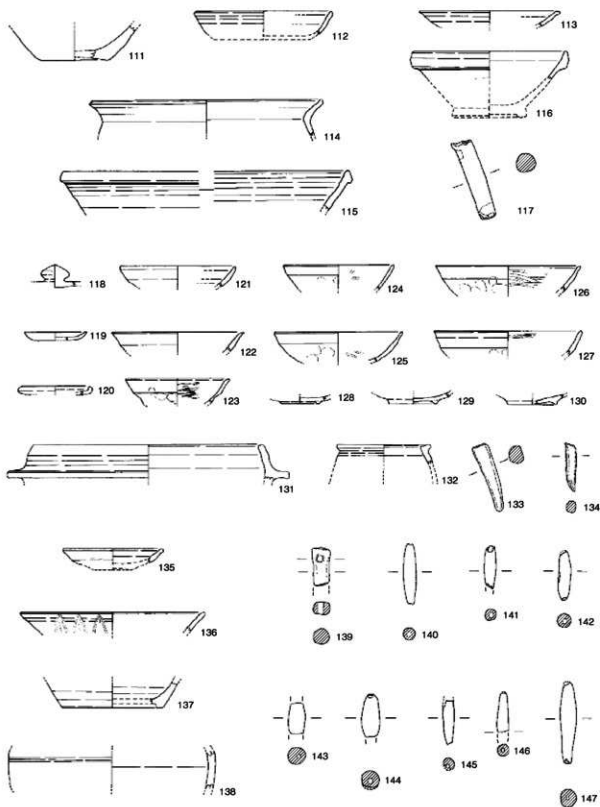
開析谷より上位にある遺物包含層（第3～5層）から出土した遺物を、上から順に包含層出土遺物としてまとめている。第21図68～77は第3層から、78～86は第2遺構面検出時、すなわち第3層下部～第4層上部から、87～95は第4層から、96～110は第4・5層から出土したものである。第22図111～134は第5層からの出土だが、第5層を細分した5b層から出土した111と、5a層から出土した112～117を第5層一括資料から分けて示している。第22図135は南区掘乱から、136は



第20図 北区出土縄文土器実測図 1 / 3



第21図 遺物包含層出土遺物実測図(1) 1/4



111: 5b層出土 112~117: 5a層出土
 118~134: 第5層出土 135: 南区擾乱出土
 136: 南区簡溝出土 137・138: 北区機械掘削時

第22図 遺物包含層出土遺物実測図(2) 1/4・1/3

南区側溝から出土しており、137・138は北区機械掘削時に採集した遺物である。その他、土鍾を139～147として一括している。

68は須恵器の杯蓋である。奈良時代後半～平安時代前期の土器の出土は極めて少なかったが、第17図7・8とともに、当該期に近在地に官衙などがあったことを示唆する遺物である。一方、69・70は東播系須恵器で、69は平安時代末～鎌倉時代初頭頃の碗、口縁部が玉縁状に巻き込み70は、15世紀以降に下る鉢である。71は細い暗文がみられる瓦器碗である。72は青磁碗、73は白磁四耳壺の把手である。74は古瀬戸の壺で、梅瓶のような形と考えられる。75は備前焼の播鉢、76・77は常滑焼の甕である。

78～81は手づくねの土師器小皿、82・83は瓦器碗、84は小形の瓦質土器足跡、85は口禿の可能性のある白磁皿、86は白磁四耳壺である。

87・88は手づくねの土師器小皿、89は東播系須恵器碗、90～92は瓦器碗、93は青磁皿、94はV類かⅡ類の白磁碗〔太宰府市教委2000〕、95は青白磁合子で釉は明緑灰色を呈している。これらは、瓦器の暗文や高台の形態などからも、13世紀に下らないことがわかる。

96～99は手づくねの土師器小皿、100は土師器碗、101は口端部に面取りを施す土師器中皿、102は瓦器皿、103～105は瓦器碗、106は灰釉陶器碗、107は青磁皿、108～110はV類の白磁碗で、108の内面には櫛目文がみられる。

南区5b層からは、土師器・須恵器・瓦器の小片とともに、縄文土器片も少量出土している。111は縄文後期～晩期の底部と判断した。

112は手づくねの土師器皿である。白色系で、口縁端部に面取りがあり、1段ナデである。113は灰釉陶器の皿である。114は土師器鉢、115は東播系須恵器鉢、116は玉縁状口縁の白磁碗Ⅳ類〔太宰府市教委2000〕、117は瓦質土器の脚部である。

118は須恵器蓋のつまみである。通常のつまみと比べて直径、高さともに大きい宝珠つまみで、径の大きい杯や短頸壺に伴うものである。119～122は土師器皿で、法量に大小の二極化がある。なお、120はコースター形の小皿である。123～130は瓦器碗である。暗文の観察ができるものが多い。131は瓦質土器の羽釜である。褐色の器面に暗灰黄色の釉が掛かる132は、褐釉陶器の壺（無耳壺）である。短い頸部に玉縁状に肥厚した口縁部をもつもので、長胴形の器形と推測できる。芦屋市内での出土は珍しい。133は瓦質土器の脚部、134は鋳鉄れによる変形はあるが、鉄釘である。

層位等が確定できないが、135は青磁皿、136は龍泉窯の鎮蓮弁文青磁碗、137は白磁四耳壺の底部など、多様な貿易陶磁が認められる。また、灰オリーブ色の釉が掛かる138は、白磁写しの灰釉陶器である。

流路Aから出土した有溝土鍾（15）、管状土鍾（16）

や流路Bから出土した棒状有孔土鍾（21）の他にも、土鍾が10数点出土している。図示した139～147は、いずれも土師質焼成で、139が棒状有孔土鍾、140～147が管状土鍾である。完形の管状土鍾で最短の140は長さ4.7cm、直径1.0cmで、最長の147は長さ6.4cm、直径1.4cmである。なお、139は近代河川、140・141・144・147は第5層、142は第1遺構面ビット、143は第4層、145は第3層、146は5a層からの出土である。

改めて、土層ごとに出土した遺物を概観すると、第3層には、70・72・74～77のように、15世紀以降の陶器・磁器が含まれている。これが、第3層下部～第4層上部になると、平安時代末～鎌倉時代初頭頃の遺物の比率が高くなる。第4層以下では、ほとんどが平安時代末～鎌倉時代初頭頃の遺物である。加えて、118のように奈良時代後半～平安時代前期の遺物も混じる。第5層は、5b層に縄文土器が混じっているが、5a層から出土したのは、土師器・須恵器・瓦器・灰釉陶器・陶器・瓦質土器や土鍾、瓦などで、縄文土器は確認できなかった。全体をみると、縄文土器は極めて少ないので、第5層が開析谷の埋積土を再掘削して形成された土層でないことがわかる。

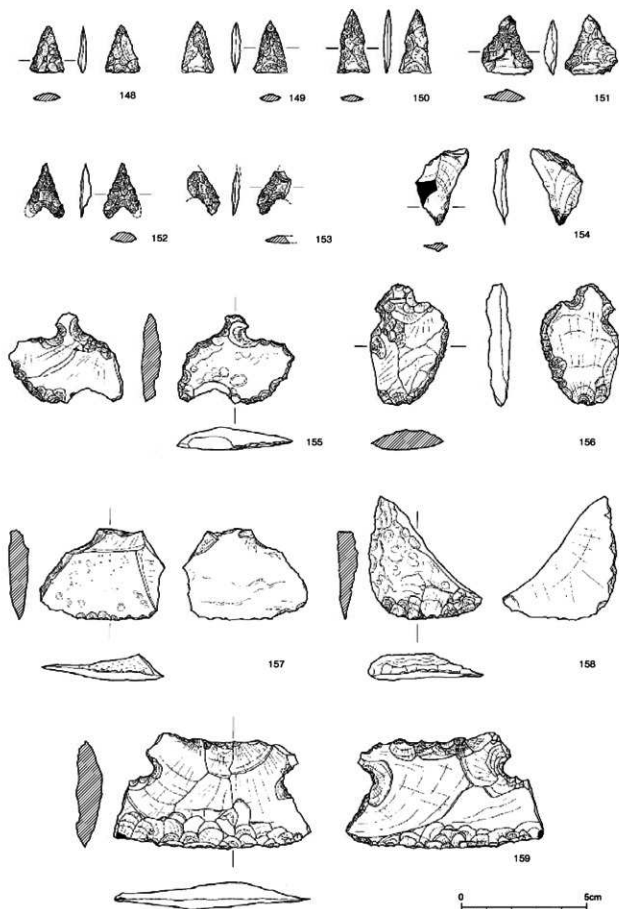
このような様相から、調査地に近接する位置に集落が展開したのは、平安時代末～鎌倉時代初頭が中心で、それ以前は未開地、それ以降は主に耕作地が広がっていたのであろう。ただし、奈良時代後半～平安時代前期には、一般集落と異なる施設が存在していたことが想像できる。また、平安時代末～鎌倉時代初頭を中心とする貿易陶磁がまをもって出土しており、良品（73・86・95・132）を含むことから、調査地に近接する集落は、日宋貿易によってもたらされた貿易陶磁を頻繁に入手できたことがわかる。それが、居住者の中に平家と関わる人物がいたためなのか、単純に福原京に近い地理的条件によるものなのかは検討の余地がある。

なお、土鍾が一定量みられることから、漁を行っていた様子もうかがえる。

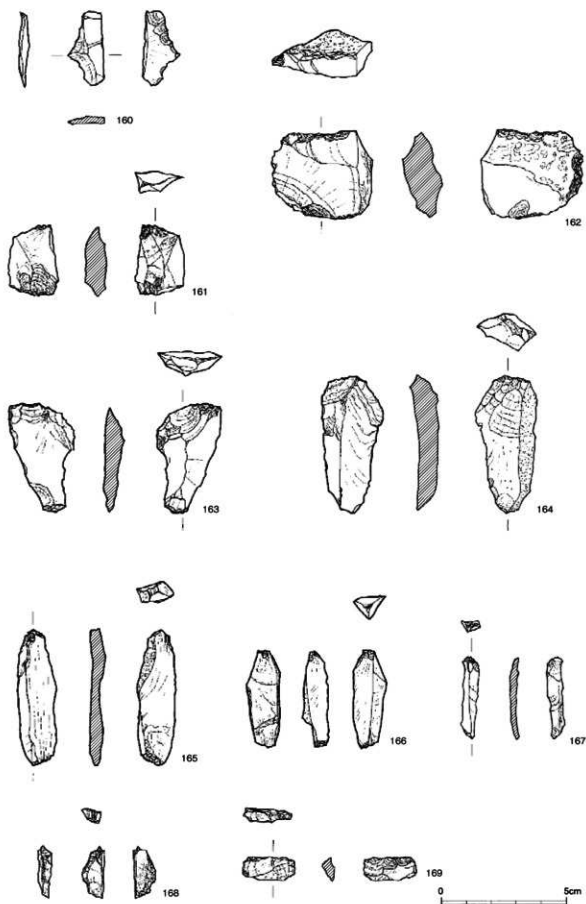
（5）石器（巻頭図版2、第23～25・77・78図）

ほとんどの石器は、開析谷の流路堆積物から出土しており、最も多いのはサヌカイト剥片である。ここでは、道具として調整加工した石鎌・石錐・石匙・削器・加工痕のある剥片・石棒・石器、道具として使用した痕跡が残る楔形石器25点を図示している。

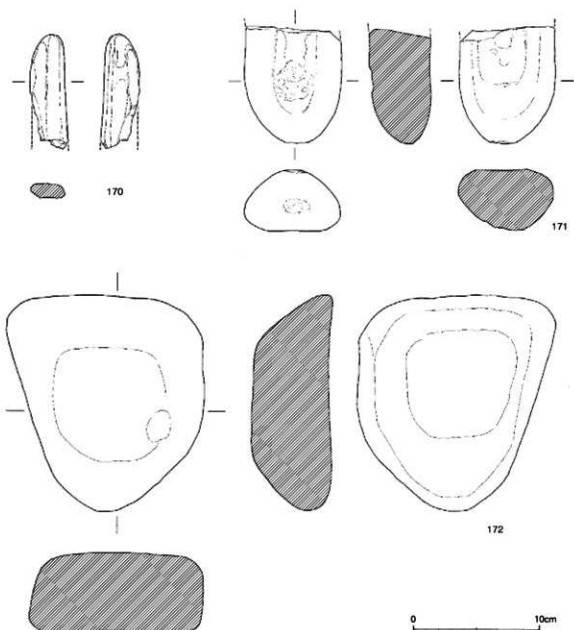
第23図の148～153が石鎌、154が石錐、155・156が石匙、157～159が削器、第24図の160が加工痕のある剥片、161～169が楔形石器、第25図の170が石棒、171・172が石皿である。なお、171は、欠損後に磨石・叩石として再利用されている。これら石器は、いずれも縄文時代のものである。個々の石器の出土した土層や法量、石材等は、表1に示しているが、石材は、肉眼観察で判別したものである。



第23図 遺物包含層出土石器(石鏃・石錐・石匙・削器)実測図 2/3



第24図 遺物包含層出土石器（加工痕のある剥片・楔型石器）実測図 2/3



第25図 遺物包含層出土石器（石棒・タキ石・石皿）実測図 1/3

表1 石器一覧

報告番号	種 類	地 区	出土層位・遺構	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	石 材	備 考	実測番号
148	石皿	不明	不明	19.0	13.5	3.0	0.5	サヌカイト		右-10
149	石皿	南区西平	第3層	20.5	12.5	4.0	0.7	サヌカイト		右-8
150	石皿	南区	第6層上面	25.0	13.0	3.0	0.7	サヌカイト		右-7
151	石皿	北区	南北部遺トレンチ南平7層	22.0	20.0	5.0	1.5	サヌカイト		右-9
152	石皿	北区	東西部遺トレンチ横支河川	21.5	14.5	4.0	0.7	サヌカイト		右-11
153	石皿	南区	道路付付設	(17.0)	(13.0)	3.0	0.4	サヌカイト	欠損あり。	右-12
154	石皿	南区	サヌカイト断片集中部	30.5	21.0	6.0	1.9	サヌカイト		右-6
155	石皿	南区西平	第4層	36.0	46.0	9.0	10.3	サヌカイト	一部欠損。	右-4
156	石皿	不明	不明	48.0	31.0	8.0	12.3	サヌカイト	一部に原面残る。	右-5
157	削器	北区Ⅱ-2区	横支河川c層	36.0	49.0	10.0	13.3	サヌカイト	片方。原面残る。	右-2
158	削器	不明	不明	49.0	45.0	10.5	15.4	サヌカイト	原面残る。	右-3
159	削器	北区	横支河川	46.0	79.0	10.0	33.5	サヌカイト	両端打込。側面に原面が残る。	右-1
160	加工痕のある断片	南区	道路付付設	29.5	14.0	3.5	1.1	サヌカイト		右-14
161	楔形石斧	不明	不明	28.0	19.5	8.5	5.2	サヌカイト		右-13
162	楔形石斧	南区	南側遺	35.0	40.0	19.0	26.0	サヌカイト	原面残る。	右-15
163	楔形石斧	北区	南北部遺トレンチ南平深層	43.0	25.0	10.0	6.2	サヌカイト		右-16
164	楔形石斧	不明	不明	55.0	34.0	14.5	14.2	サヌカイト	原面残る。	右-17
165	楔形石斧	北区Ⅱ-1区	褐色砂(道路14)	54.0	15.0	8.0	5.7	サヌカイト	原面残る。	右-19
166	楔形石斧	北区Ⅲ区	白黄色砂	38.5	13.0	9.0	5.3	サヌカイト	原面残る。	右-18
167	楔形石斧	南区	サヌカイト断片集中部	33.0	7.0	4.0	0.9	サヌカイト		右-20
168	楔形石斧	北区	東西部遺トレンチ横支河川	20.0	8.0	5.5	0.9	サヌカイト		右-21
169	楔形石斧	南区	道路付付設	9.5	20.5	5.0	1.0	サヌカイト		右-22
170	石棒	不明	第3層上面上面	91.0	29.0	7.0	45.5	結晶片岩	平削。	実-73
171	石皿	北区	河川口下部	91.0	27.0	49.5	約500	花崗閃緑岩	平削。磨石・叩石に転用。	右-23
172	石皿	北区Ⅱ-2区	流木の南側	173.0	158.0	64.0	2000以上	砂岩		右-24

7. まとめ

堂ノ上遺跡は、従来、銅鐸の出土地として知られていたが、平成8年度以降はその分布範囲を南東部に広げて発掘調査を実施するようになった。その結果、中世・近世の集落や耕作地の存在が確認されるようになった。加えて、今回の発掘調査によって、新たな知見を得ることができたので、以下に列挙する。

①南区第1～3遺構面で中世の犁痕を検出したことで、当時は耕作地であったことがわかった。当該地は国道2号に南接しているが、国道との間に段差があって、一段低くなっている。土層や遺構面の状況からみて、大規模な切土によって耕作地が開かれたわけではなく、中世にはほとんど現状の地形であったことを確認した。

翠ヶ丘丘陵の開発は、古代（8世紀頃）よりその裾部の開田が進み、中世以降は丘陵上の南半部にも耕作地を広げていったと考えられる。堂ノ上遺跡第1地点では、近世の新田開発の痕跡も確認されている。しかし、北半部については、大正時代に宅地化が始まるまでは広範囲に山林が広がっていたことがわかっていて（芦屋ミュージアム・マネジメント2014）ので、近世段階では手が加わらなかったようである。したがって、近世の耕作地は南半部に限られていたと推測できる。

②南区第1～3遺構面を覆う遺物包含層は瓦器や貿易陶磁などの中世遺物を多く含んでおり、中世集落が存在していたことがわかる。とくに、平安時代後期～鎌倉時代前半ごろの遺物が多いのは、この段階で当該地に近接する丘陵上に集落が営まれていたことを示唆している。一方、中世後半や近世の遺物の少なさは、平安時代後期～鎌倉時代前半の集落が連続と同じ場所にあったのではなく、当該地から離れた位置に移動したことによるのであろう。実際、近世の西国街道（本街道）は当該地よりも200mほど南側を通っており、集落は街道沿いに展開していたので、近世遺物の少なさと適合する。

③当該地で出土した古代の遺物は極めて限定的であるが、須恵器杯の転用硯や灰釉陶器がみられる。近在の若宮遺跡（第52・57地点）では、法隆寺式忍冬唐草文軒平瓦や平瓦、金属器写しとみられる丁寧な作りの須恵器杯などが出土している（第89集）。また、打出小槌遺跡（第41地点）では、須恵器台付皿を含む、奈良時代後半～平安時代初期の須恵器・土器がまとまって出土している（第66集）。このような様相から、翠ヶ丘丘陵南縁部に官人層の居住域や官衙的な施設の存在を推測しており、今回出土した遺物は、その可能性をさらに高めるものである。

④当該地で出土した中世遺物の中に、一定量の貿易陶磁が認められる。若宮遺跡（第1・2・3・10・1・25地点など）や打出小槌遺跡（第22・41地点など）で

も白磁碗・皿や龍泉窯系の青磁碗が少量出土している（第30・38・66・97集）ので、貿易陶磁が出土すること自体は珍しいことではない。しかし、他の調査地点と比べるとその量や種類が多く、白磁四耳壺や青白磁合子、褐釉陶器の壺（無耳壺）を含んでいることは注目値する。大輪田泊や福原京、あるいは大物の港に近い海岸部といった地理的条件だけではなく、平氏と密接な関わりをもつ人物の存在をうかがわせるものである。

⑤第3遺構面で、弥生時代の遺構（南区流路A～C、北区流路2・5など）を検出した。これらの埋土が黒色粘土であることから、当該期にこの地点が湿地であったことが推測されるので、銅鐸埋納地の周辺には谷や湿地が広がっていたことが推測できる。弥生時代の遺構や遺物の希薄さは、堂ノ上遺跡が弥生時代における恒常的な居住域ではなかったことを示唆しており、集落から離れた位置を選んで銅鐸を埋納した可能性も考えられる。

⑥縄文時代の流路を検出し、土器・石器・植物遺体が多数出土したことによって、堂ノ上遺跡が縄文時代の遺跡であることを初めて認識した。時期については、実績報告書では前期から晩期にわたると解釈していたが、今回の再整理によって、中期～晩期であることが明らかになった。

⑦調査当時には、南区南半で後期旧石器時代の礫群を検出したと考えていたが、これは縄文時代の流路に流入・堆積したものと理解するに至った。

⑧南区第3遺構面で、地震に伴う噴砂を検出した。砂脈は南東～北西方向に走っており、白茶色極細砂が0.25m以上噴きあげていた。発掘調査時に、中世の遺物包含層を貫いていることが記録されているので、この噴砂は中世以降の巨大地震に伴う液状化現象を示すものである。

⑨今回、遺跡形成時期の自然環境を復元することを目的として、自然科学的分析を実施した（次節に報告）。大型植物遺体にはコマツ、エゴノキ、ハクウンボク、自然木（流木）にはカエデ属の一種やクマシデ属の一種、クリが確認できている。このほか、花粉分析では、針葉樹のコウヤマキ属、落葉広葉樹のハンノキ属やコナラ属などが多く認められる一方で、草本花粉は少ないといった結果が出ている。また、植物珪酸体（プラントオパール）分析では、イネ科・タケ亜科のネザサ節やメダケ節が多く検出されるとともに、ブナ科シ属も検出されている。これらの分析から、縄文時代中期～後期頃は現在と同様に温暖で、周辺には松林や森林が広がっていた様子がうかがえる。

一方、第8層を対象とする火山灰分析では、一次堆積の火山灰層でないことが確認された。これは、旧石器時代に堆積した可能性を考えた第8層が、縄文時代以降の堆積層であることの証左となる。

第3節 第4地点の自然科学的分析

株式会社 トーコー地質

1. 業務概要

(1) 業務の目的と一般事項

本業務は、堂ノ上遺跡第4地点において自然科学的分析を行い、当時の自然環境を復元し、当時の人類の生活環境を知る手がかりを得ることを目的とし、遺跡の重要度を認定する一助として実施した。

(2) 業務内容

① 植物遺体分析

大型植物遺体分析および花粉化石分析

化石として地層（堆積物）中に残存する材化石、種子・葉実、プラントオパールおよび花粉化石の分析

大型植物	5 試料
材化石	5 試料
花粉	2 試料
プラントオパール	1 試料

② 火山灰分析

鉱物分析による組成分析、層序観察をおこなう。

重軽鉱物組成	10 試料
層序観察	1 試料

2. 分析結果

(1) 植物遺体分析

① 大型植物

出土した大型植物遺体は現地取り上げ試料（5 試料）で、時代や層位等の詳細は不明である。同定結果は、表2に示す。加えて、第26図に写真を掲載している。

クロマツ（*Pinus thunbergii* Parl.）

球果は多数の種鱗からなり、アカマツよりも縦に長いものが多く、やや曲がる。種鱗は先端が肥厚し、中央がややへこんで突起がある。海沿いに多く生育する。

エゴノキ（*Syrax japonica* Sieb. et Zucc.）

内果皮は卵形、通常3本の溝があり、先端はやや尖り、基部は斜めに切れたへそがある。表面はややざらつき、肉眼では確認できない網目模様がある。山地や丘陵に生育する落葉小高木である。

ハクウンボク（*Syrax obassia* Sieb. et Zucc.）

内果皮はエゴノキより一回り大きい卵形、3本の溝と3本の比較的明瞭な稜がある。表面はなめらかで、拡大するとエゴノキよりも細かい網目模様がある。山地などに生育する落葉小高木である。

《用語解説》

大型植物遺体 広義には、漠然と大型胞子や種子以上の大きさのすべての植物の器官が堆積したものを指す。この場合には木材遺体も含まれるが、材は同定の過程で、薄片作成や透過型顕微鏡（生物顕微鏡等）を使い、種子や葉は水洗篩い分けや実体顕微鏡を使うことから、材以外の大型胞子、種子、果実、葉、花、菌核等を総称して大型植物遺体（大型植物化石）とすることが一般的となっている。なお、完新世以降の比較的時代が新しく、軟かいものを大型植物遺体、それ以前の比較的固結したものを大型植物化石とする場合もある。

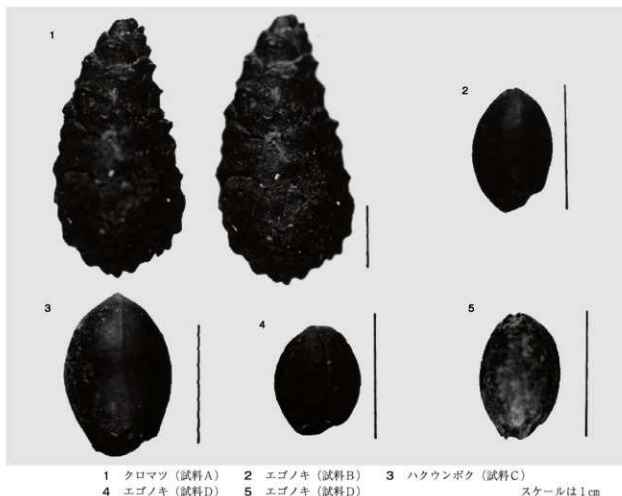
球果 裸子植物の器官で、木化した鱗片が集まり球状あるいは楕円体となった果実状の構造で、いわゆるまっほっくりなどを指す。

種鱗 球果を構成している鱗片のこと。

内果皮 果実の構造の呼び名で、液果などの果皮が良く発達しているものは顕著に分けられる。たとえば、ウメやモモの場合、一番外側のうぶげが生えた薄い皮が外果皮、多肉質で水分の多い可食部分が中果皮、堅い殻状の部分が内果皮（核とも呼ぶ）となる。さらに、中にあるアーモンド状のものが種子（仁）、その茶色い薄皮が種皮である。植物の種類によって発達する部分や堅さが違う。

表2 大型植物遺体同定結果

試料番号	遺 構	和名と出土部位
A	北区Ⅳ区流路 15 上層流木面	クロマツ、球果
B	北区Ⅳ区流路 15 上層流木面	エゴノキ、内果皮
C	北区南北土手流路 11	ハクウンボク、内果皮
D	南区縄文河川	エゴノキ、内果皮
E	北区Ⅰ区南西隅流路 12 下層	エゴノキ、内果皮



第26図 大型植物遺体

② 材化石

試料 試料はNo.1～5の5試料である。試料の注記から判断して、いずれも旧流路に埋積していた自然木(流木)のようであるが、所属時期など不明である。

方法 剃刀の刃を用いて試料の木口・柃目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真も作製した(第27図)。

結果 試料は以下の3Taxa(分類群。ここでは属と種の異なった階級の分類単位を総称している)に同定された。

- 試料1(流路11出土) カエデ属の一種
- 試料2(流路11出土) クリ
- 試料3(流路15上層出土) クリ
- 試料4(流路15上層出土) クマシデ属の一種
- 試料5(流路12下層出土) クリ属の一種

試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は『日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ』[佐竹ほか1989]にしたがう、一般的性質などについて

は『木の事典』第1巻～第17巻[平井1979～1982]も参考にした。

クマシデ属の一種 (*Carpinus* sp.) カバノキ科 試料4(第27図1)

散孔材で、管孔は放射方向に2～10個(時にそれ以上)が複合する。横断面では楕円形、管壁は薄く、単穿孔をもつ。放射組織は同性～異性Ⅲ型、1～4細胞幅、1～40細胞高のものとも集合組織よりなり、結晶細胞が認められる。柔組織は短接線状およびターミナル状、年輪界はやや明瞭。

クマシデ属は、サワシバ(*Carpinus cordata*)・クマシデ(*C. japonica*)・イワシデ(*C. turczaninowii*)・イヌシデ(*C. tschonoskii*)・アカシデ(*C. laxiflora*)の5種が自生する。このうちサワシバ・クマシデは階段穿孔を持つことで後3種と区別できる。イワシデは本州(中部地方)・四国・九州の石灰岩地に生育し、アカシデは北海道南部・本州・四国・九州に、イヌシデは本州(岩手・新潟県以南)・四国・九州に生育する温帯性落葉高木～低木である。このうちアカシデは山野に普通に見られ、二次林の構成種でもある。材はやや重硬で、割裂性が小さく、曲木や木地、薪炭材などに用

いられる。

クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 試料2・3・5
(第27図2)

環孔材で孔部は1~4列またはそれ以上、孔圈外でやや急激に管径を減じたの漸減しながら火炎状に配列する。大管は単独、横断面では円形~楕円形、小管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形~多角形。管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では櫛状~網目状となる。放射組織は同性、単(一部2)列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、柾木や海苔粗朶などの用途が知られている。

カエデ属の一種 (*Acer* sp.) カエデ科 試料1 (第27図3)

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。管は単穿孔をもち、壁孔は対列~交互状に配列する。放射組織は同性、1~5細胞幅、1~30細胞高で時に100細胞高を越える。柔組織はターミナル状、周囲状および接線状。年輪界はやや不明瞭。

カエデ属はイロハモミジ (*Acer palmatum*) やハウチワカエデ (*A. japonicum*) など26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木~低木である。一般に材はやや重硬・強韌で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・施作・薪炭材などに用いられる。

〈用語解説〉

Taxa 分類群と同じ。他から区別され、それぞれ個別の単位として扱われる分類学上の生物の群。Taxon はTaxaの複数形。

木口 樹幹や枝の横断面。年輪が同心円状に現れる。

柾目 樹心を通して縦に割った面。年輪は縦の平行線になる。

板目 柾目に垂直な縦断面。すなわち木口の同心円状の年輪に対して接線方向に割った面で、年輪は面の傾きによってしばしば放射線状に現れる。

散孔材 木口面における管の配列で、管が一年輪を通じてほぼ平等に分布する配列。

環孔材 木口面における管の配列で、直径の大きな管が年輪に沿って年輪の細内部に明らかな列をなして配列する。この列の外側の管は小さく、前者と明

らかに区別できる。

道管 縦に並んだ道管細胞が上下の隔壁の消失、すなわち穿孔により相連なって長い管となった組織。

大管 孔部に配列する大きな道管。

孔部 環孔材で直径の大きな道管の占める部分(木口面)。

孔圈外 孔部以外の部分。

短接線状(短接線状柔組織) 木口面における柔細胞の配列の1つで、放射組織から放射組織までの短い接線状に集まる傾向を示す組織。

ターミナル状(ターミナル柔組織) 木口面における柔細胞の配列の1つで、生長期間の終わりに単独あるいはいろいろの幅の多少とも連続した層を成して生ずる組織。

柔組織 柔細胞が集まった組織。

単穿孔 道管は道管要素が長く連続した細胞群で、道管要素が相互に相接する面で壁の全部、または一部が消失して水分通導に好都合な構造になっているがこの壁の消失した部分を穿孔と呼び、穿孔の存在する面を穿孔板と呼ぶ。単穿孔は穿孔板の全面にわたって細胞壁が消失したもので、穿孔の周辺にわずかに穿孔縁を残すだけのものである。

階段穿孔 穿孔板に水平方向に長い孔が平行して存在するもので、孔と孔との間に残された細胞壁がちょうどはしごの横木のような状態になる。

火炎状 専門用語ではない。孔圈外の道管が火が燃えてゆれているような配列をしていることを形容している。

対列~交互状(対列壁孔~交互壁孔) 壁孔は道管の側壁に形成された縁のある孔(有縁壁孔)で、対列壁孔は比較的同じ大きさの有縁壁孔が道管の長軸と直角の方向に2ないし数個ずつ並ぶ配列。交互壁孔は同じ程度の大きさの有縁壁孔が斜め方向に規則正しく蜂の巣型に並ぶもの。

放射組織 放射方向(柾目の方向)に走る組織。

同性~異性(同性放射組織~異性放射組織) 同性放射組織は個々の放射組織がすべて平伏細胞(放射方向に長い煉瓦状の細胞)のみによって構成される放射組織型。異性放射組織は個々の放射組織がすべてあるいは一部分、方形または直立細胞によって構成される放射組織。異性型は放射組織型を6型に分類しうその1つである。

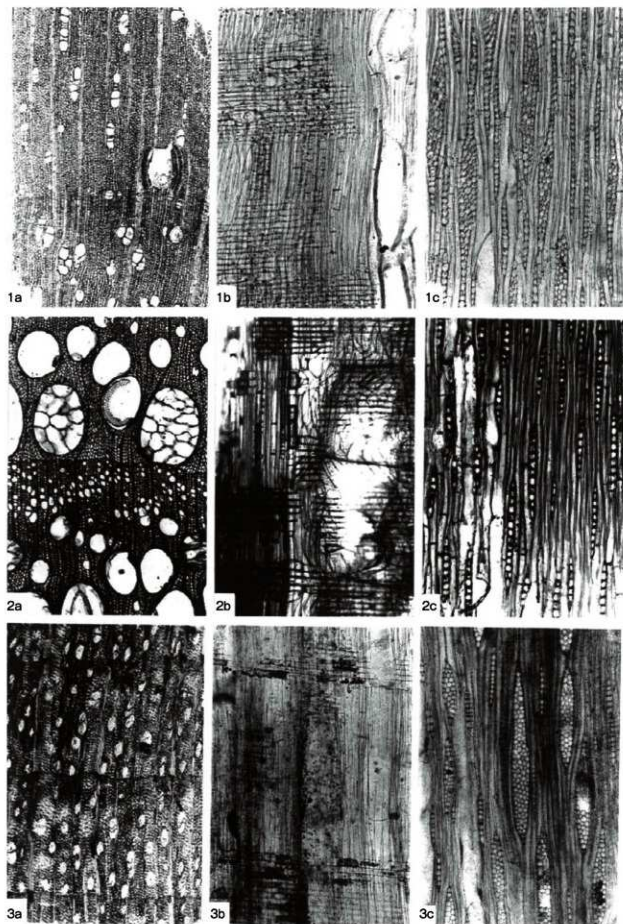
晩材部 夏から秋にかけて形成された材。

肥大生長 茎がその軸の直径方向に増大する成長。幹・枝の場合、形成層による新しい木部および師部の形成による太さの成長に基づく。

施作 ろくろ細工のこと。

柾木 たきぎにする木のきれはし。

海苔粗朶 のりを採取するときに使う枝。



1 クマシデ属の一種 2 クリ 3 カエデ属の一種

a : 木口 x40 b : 柃目 x100 c : 板目 x100

樹木の肥大成長方向は、木口では画面下から上へ、柃目では左から右へ

第27図 木材の顕微鏡写真

③ 花粉

試料と方法 堂ノ上遺跡第4地点北区の確認トレンチから採取した2試料の花化石の検討を行った。分析試料は、24層(北区 東西確認トレンチ西半24層)が褐色シルト質細～極細粒砂からなり、バブル型火山ガラスを多く含む灰白色細～極細粒砂が小ブロックないしレンズ状に入る。29層(北区 南北確認トレンチ北半29層)は褐色シルト質中～細粒砂からなり、明褐色極粗粒～中粒砂が不定形に混じる。なお、試料の時期及び層序、堆積物の状態等は不明である。

花化石の抽出は、試料約15～20gを10% KOH(湯煎約15分)→傾斜法により粗粒砂を除去→48% HF(約30分)→重液分離(比重2.1)→アセトリス処理(硫酸と無水酢酸の混液)の順に行った。プレバート作成は、残渣を蒸留水で適量に希釈し、タッチミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り、グリセリンで封入した。なお、主要な花化石の写真は第28図に掲げている。

花粉化石群集の出現傾向と若干の考察 堂ノ上遺跡第

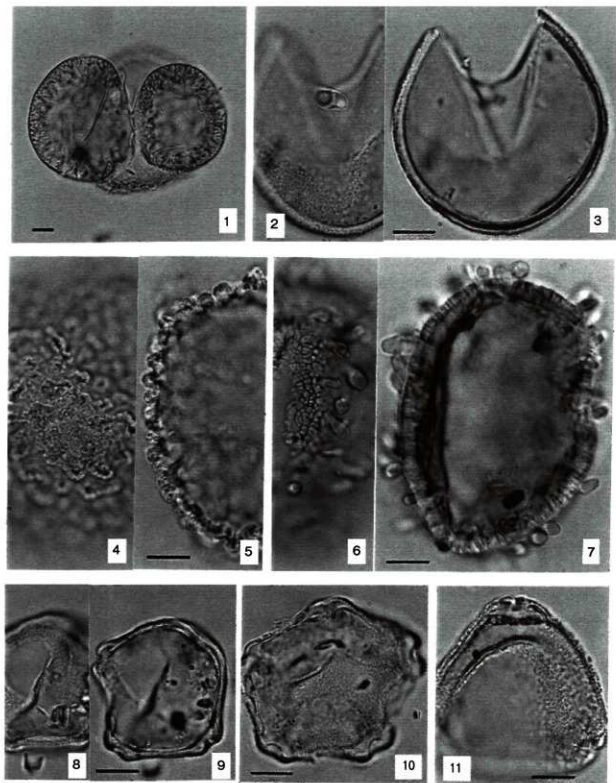
4地点の確認トレンチから出現した花化石のリストを表3に示す。表中で複数の分類群をハイフンで結んだものは、分類群間の区別が明確でないものである。

花化石は、24層では花粉が産出したが、29層からは全く産出しない。24層についても絶対量は少ない。花粉化石はシルト以下の微細な粒子と挙動を伴いすることから、花粉化石の少ない要因は堆積物が粗粒であること、さらに堆積速度が速いためとみられる。こうしたことから、粗粒な堆積物である29層からは花粉が得られなかった。出現傾向は24層では、針葉樹のコウヤマキ属が比較的多くを占め、落葉広葉樹のハンノキ属やコナラ亜属、寄生植物のヤドリギ属が比較的多く出現し、モミ属、アカガシ亜属、クマシデ属→アサダ属などを伴う。草本花粉は少ないが、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属及びシダ植物胞子が僅かに出現した。また、花粉化石の保存は悪く、外膜にビツト状に穴が開いたもの、外膜が薄くなっているものが多くを占める。

さて、24層ではコウヤマキ属が59%と高率に占め、

表3 花粉化石一覧

和 名	学 名	24層	29層
樹 本			
マキ属	<i>Podocarpus</i>	1	
モミ属	<i>Adiantum</i>	7	
ツガ属	<i>Tsuga</i>	2	
マツ属単葉管葉亜属	<i>Pinus subgen. Haploxylen</i>	1	
マツ属複葉管葉亜属	<i>Pinus subgen. Distylium</i>	3	
コウヤマキ属	<i>Sciadopitys</i>	143	
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) D.Don	2	
クルミ属	<i>Juglans</i>	2	
クマシデ属→アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	3	
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	28	
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	20	
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	5	
クリ属	<i>Castanea</i>	1	
ケヤキ属	<i>Zelkova</i>	2	
エノキ属→ムクノキ属	<i>Celtis - Aphananthe</i>	1	
ヤドリギ属	<i>Viscum</i>	20	
サンショウ属	<i>Zanthoxylum</i>	1	
カエデ属	<i>Acer</i>	1	
ハイノキ属	<i>Symplocos</i>	2	
草 本			
イネ科	<i>Gramineae</i>	2	
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	3	
サナエタデ属→ウナギツカミ節	<i>Polygonum sect. Persicaria - Echiochloa</i>	1	
アカザ科→ヒユ科	<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	1	
キンボウグ科	<i>Ranunculaceae</i>	1	
ヨモギ属	<i>Asteraceae</i>	3	
他のキク亜科	other Tubuliflorae	1	
シダ植物			
単葉型胞子	<i>Monolete spore</i>	14	
三葉型胞子	<i>Trilete spore</i>	1	
樹木花粉総数	Total arboreal pollen	244	0
草本花粉総数	Total nonarboreal pollen	12	0
シダ植物胞子総数	Total fern spore	15	0
花粉・胞子総数	Total pollen and spore	271	0
不明花粉	Unknown pollen	13	0



1 マツ属複維管束重属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*), 24層。
 2・3 スギ (*Cryptomeria japonica*), 24層。 4・5 コウヤマキ属 (*Sciadopitys*), 24層。
 6・7 ヤドリギ属 (*Viscum*), 24層。 8・9 ハンノキ属 (*Alnus*), 24層。
 10 ハンノキ属 (*Alnus*), 24層。 11 ハンノキ属 (*Symplocos*), 24層。

スケールは10 μ m

第28図 花粉化石

普通多く出現しないヤドリギ属が比較的多いなど特異な組成を示す。コウヤマキは、中部地方以西の山地(福島県に隔離分布)に主に分布し、土地の極相林を形成する。コウヤマキ属花粉が卓越する組成は、六甲アイランドのコアから得られた約5万年前の最終氷期の堆積層にみられ、完新世の初頭にも一時的に不連続に卓越する〔前田1985〕。しかし、これらの層準はいずれも粗粒な堆積物から構成されており、単純にコウヤマキが卓越する森林が形成されていたかどうかは疑問である。

さらに、神戸市周辺の遺跡においても一部でコウヤマキ属が多くを占める組成は認められるが、いずれも粗粒な堆積物からなる。こうしたことから、周辺の植生を反映した結果というよりも、むしろ選択的に堆積した結果とみられる。しかしながら、少なくとも周辺の山地にコウヤマキ林が分布していたことは確かである。周辺の植生としては、落葉広葉樹のハンノキ属、コナラ亜属、クマシデ属-アサダ属、ケヤキ属、常緑広葉樹のアカシ亜属、針葉樹のモミ属、マツ属複雑管束亜属などが分布していたものと推定される。また、花粉化石が残らないクスノキ科の植物も主要な構成要素になっていた可能性はある。なお、〔松下1992〕は、六甲山系の植生変遷を、縄文時代から弥生時代を中腹から山麓にかけて照葉樹林が分布する原始林の時代、中世をアカマツを中心とする二次林の時代、江戸から明治時代をはげ山の時代としている。

《用語解説》

土地的極相林 土地的特殊環境(地形、地質、乾燥、土壌の発達が悪いなど)のもとで気候の極相にかなり成立する森林。

④ プラントオパール

プラントオパールについて プラントオパール(植物珪酸体)は、おもにイネ科植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸(SiO_2)が蓄積したものであり、植物が枯れたあとでも微化石(プラントオパール)となって土壌中に半永久的に残っている。プラントオパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出する分析であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている〔杉山1987〕。

試料 分析試料は、北区南壁地点の第8層から採取した1試料である。

分析法 植物珪酸体の抽出と定量は、プラントオパール定量分析法〔藤原1976〕をもとに、次の手順で行った。

- ① 試料を105℃で24時間乾燥(絶乾)
- ② 試料約1gに直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加(電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)

③ 電気炉灰化法(550℃・6時間)による脱有機物処理

④ 超音波水中照射(300W・42KHz・10分間)による分散

⑤ 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去

⑥ 封入剤(オイキッパ)中に分散してプレパラート作成

⑦ 鏡検・計数

同定は、イネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数(機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位:10-6g)をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。メダケ節の換算係数は1.16、ネザサ節は0.48、ミヤコザサ節は0.30である。

分析結果

(1) 分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表4および第29図に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す(第30・31図)。

〔イネ科〕

ウシクサ族A(チガヤ属など)

〔イネ科-タケ亜科〕

メダケ節型(メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属)、ネザサ節型(おもにメダケ属ネザサ節)、ミヤコザサ節型(おもにクマザサ属ミヤコザサ節)、未分類等

〔イネ科-その他〕

棒状珪酸体(おもに結合組織細胞由来、カヤツリグサ科やシダ類でも形成される)、未分類等

〔樹木〕

ブナ科(シイ属)

(2) 植物珪酸体の検出状況

北区南壁地点の第8層について分析を行った。その結果、ネザサ節型が多量に検出され、メダケ節型も比較的多く検出された。また、ウシクサ族A、ミヤコザサ節型、およびブナ科(シイ属)なども検出された。

植物珪酸体分析から推定される植生と環境

第8層の堆積当時は、ネザサ節やメダケ節などのタケ亜科を主体とするイネ科植生であり、周辺にはブナ科(シイ属)などの照葉樹林も分布していたものと推

表4 植物珪酸体分析結果 (単位: $\times 100$ 個/g)

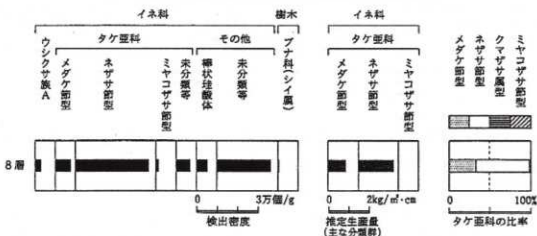
分類群	学名	地点・試料	北区南壁
イネ科	Gramineae (Grasses)		8層
ウシクサ属A	Andropogoneae A type		28
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)		
メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake		77
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa		365
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa		14
未分類等	Others		70
その他のイネ科	Others		
棒状珪酸体	Rod-shaped		56
未分類等	Others		267
樹木起源	Arboreal		
ブナ科(シイ属)	Castanopsis		7
植物珪酸体総数	Total		886

おもな分類群の推定生産量 (単位: $\text{kg}/\text{m}^2 \cdot \text{cm}$)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	0.90
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	1.75
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	0.04

タケ亜科の比率 (%)

メダケ節型	Pleioblastus sect. Medake	33
ネザサ節型	Pleioblastus sect. Nezasa	65
ミヤコザサ節型	Sasa sect. Miyakozasa	2



第29図 植物珪酸体分析結果

定される。タケ亜科のうち、メダケ属ネザサ節は温暖、クマザサ属は寒冷の指標とされており、ネザサ率（両者の推定生産量の比率）の変遷は、地球規模の水期-間氷期サイクルの変動とよく一致することが知られている〔杉山・早田1996〕。ここでは、ネザサ節が優勢であり、ブナ科（シイ属）などの照葉樹も検出されていることから、当時は現在と同様の比較的温暖な気候であったものと推定される。

《用語解説》

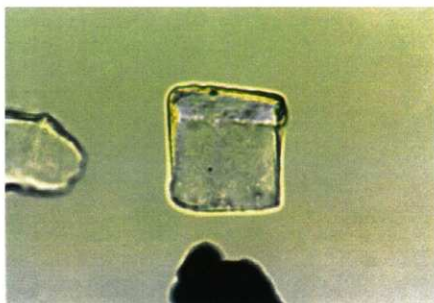
プラントオパール（植物珪酸体） イネ科などの葉の表皮内細胞に集積された珪酸体。普通、堆積物中に含

まれる植物珪酸体をプラントオパールと呼ぶ。

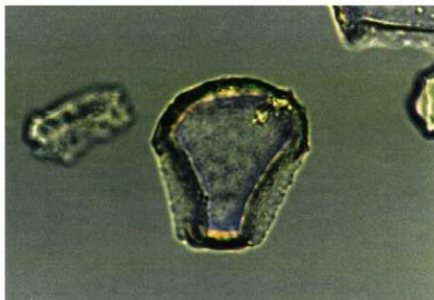
機動細胞 表皮細胞に集積された珪酸体の内、大型のファン型（扇形）をしたもので、イネでは葉の表面側に2つの維管束の中間に形成される。

植物体生産量 試料1g中のプラントオパール個数に、試料の仮比重と各植物の換算計数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾燥重量）をかけて算出した値で、単位面積で層厚1cmあたりの植物体の乾燥質量。

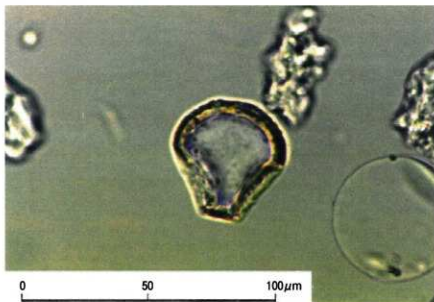
水期-間氷期サイクル 酸素同位対比の変動から見いだされた10万年周期の気候変動。過去70万年間に7回繰り返されている。水期は両極を中心に氷河の発達した氷河期で、間氷期は水期と氷期の間の温暖期。



1 ススキ属型

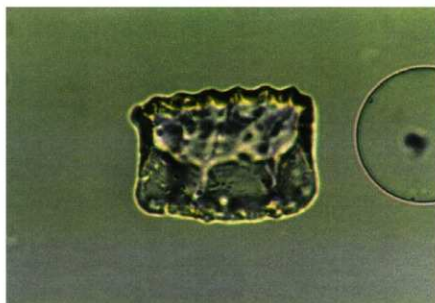


2 メダケ節型

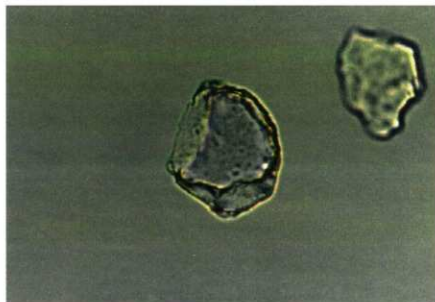


3 ネザサ節型

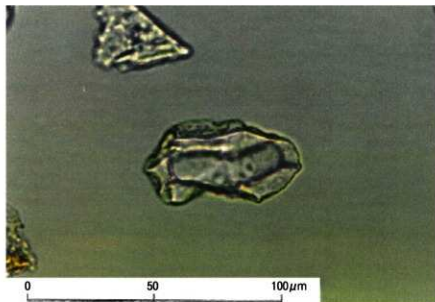
第30図 植物珪酸体の顕微鏡写真(1)(倍率×400)



4 ネザサ節型



5 クマザサ属型



6 ブナ科 (シイ属)

第31図 植物珪酸体の顕微鏡写真 (2) (倍率×400)

(2) 火山灰分析

① 重軽鉱物組成

概要 芦屋市堂ノ上遺跡の第4地点には橙白色のシルト混じりの粗砂(8a層)及び黄白色の砂質シルト～シルト質細砂(8b層)が分布する。8a層および8b層ともにサヌカイト剥片等の遺物を包含する地層である。色調などから火山灰層の可能性も考えられるため、火山灰層であるか否かを明確にし、火山灰層である場合にはその火山灰層が既知の火山灰層のいずれの火山灰層に対比されるかを明確にする目的で、重・軽鉱物分析を行い、更に火山ガラスを多く含む場合には火山ガラスの屈折率測定を行う。

試料と分析方法 試料は、8a・8b層について、15×15cmで、長さ約50cmの柱状で採取されており(第32図)、厚さ5cmで、連続して柱状試料から分析試料を10試料採取し、以下の方法により分析を実施した。

- ① 超音波により分散。洗浄後、1Φ(0.5mm)、2Φ(0.25mm)、3Φ(0.125mm)、4Φ(0.063mm)の4枚の篩を重ねて、流水下で篩分けを行う。
- ② 3Φ篩上の残渣を定温乾燥器により乾燥し、秤量する。
- ③ 3Φ篩上の残渣については乾燥・秤量後、磁性分離を行い、比重2.95に調整したテトラブロムエタンを用いて、重液分離を行う。
- ④ 得られた重鉱物・軽鉱物を乾燥・秤量後、重鉱物については封入剤レークサイドセメントを用いてプレバートを作成し、軽鉱物についてはスライドガラス上に適宜散布し、それぞれ偏光顕微鏡下で重鉱物・軽鉱物組成を調べた(第34・35図)。なお、軽鉱物中に多くの火山ガラスが含まれる場合には、形態分類も行うが、今回の場合、含まれる火山ガラスの量が非常に少なかったため実施しなかった。

分析結果 第33図の重鉱物、軽鉱物の組成グラフに示すように、重鉱物ではしそ輝石がいずれの層でも50%以上を占め、角閃石がいくつでも多く20%以上を占める。このしそ輝石・角閃石だけでいずれの試料も約

90%以上を占める。全鉱物に対する重鉱物の割合は小さく、大半が軽鉱物である。個々の試料を比較すると大きな相違は認められない。

一方、軽鉱物では斜長石が10～20%強、石英が約70～80%強を占め、この斜長石と石英だけで90%以上を占める。火山ガラスの含有量は非常に少なく、5%以下であり風化も著しい。個々の試料の間には大きな相違は認められない。

考察 分析結果から、いずれの試料も大半が軽鉱物の石英、斜長石からなり、重鉱物の全鉱物に対する割合は少ない。個々の試料を比較しても大きな相違は認められない。また、極少量の火山ガラスが混入するが、風化が著しく、純粋な一次堆積の火山ガラスとはいえない。これらの試料は一連の連続した堆積物であり、花崗岩起源のマサ土化したものが、その後の風化により更に粘土化したものと推定され、火山灰層とすることはできない。

《用語解説》

重・軽鉱物分析 重液により重鉱物と軽鉱物にわけた分析。鉱物は比重が2.85以上の重鉱物と2.85以下の軽鉱物に区分される。重鉱物は光を通す透明重鉱物と光をほとんど通さない不透明重鉱物に区分される。(新版地学事典より抜粋)

重液分離 重液中に粉砕した試料を入れ、液より比重の大きいものを沈め、小さいものを浮かせて鉱物の分離を行う方法。(新版地学事典より抜粋)

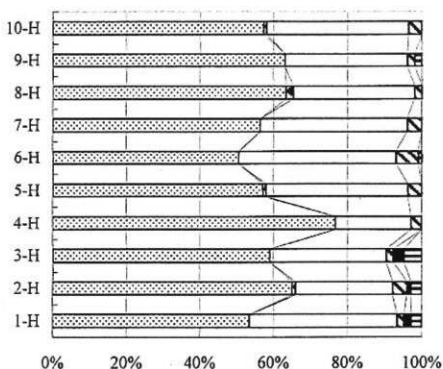
屈折率測定 光が媒質ⅠからⅡ入射するとき、入射角*i*で入射し、屈折角*r*で屈折したとき、 $\sin i / \sin r = n$ は一定で、媒質ⅡのⅠに対する屈折率という。この屈折率を屈折計を用いて測定することを屈折率測定と呼ぶ。(新版地学事典より抜粋)

オープンニコル 偏光顕微鏡には上下2枚のニコル(偏光板)があり、上方にあるニコルを除いた状態をオープンニコル(単ニコル)と呼び、形、大きさ、色、多色性、劈開などが観察される。

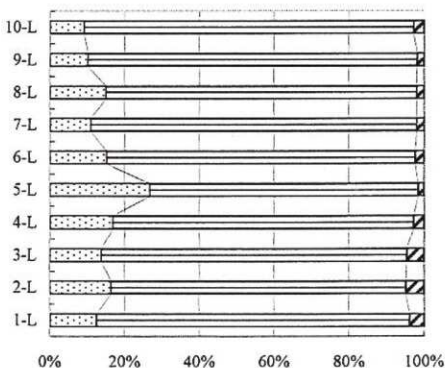
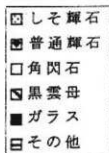
クロスニコル 偏光顕微鏡で上下2枚のニコル(偏光板)を入れた状態で観察をいう。直交ニコルとも呼



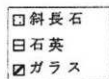
第32図 土層採取試料



重鉱物



軽鉱物



第33図 重軽鉱物の組成変化

び、干渉色、複屈折、双晶、累帯構造、消光角などが観察される。

火山ガラス マグマの急冷によって生ずる天然のガラス。単にガラスともいう。軽石・スコリア等の急冷火砕岩の主要な構成物質である。テフラ（火山灰）中に含まれる火山ガラス細片は火山の噴火様式やマグマの

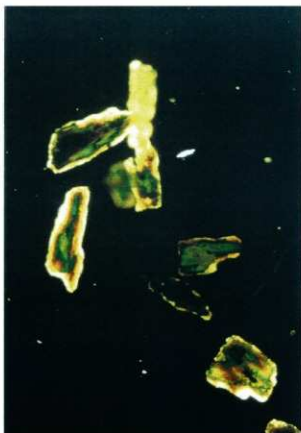
化学組成に対応して形態・色・屈折率などにそれぞれ特徴を示し、化学組成と共に特定テフラの同定に役立つ。（新版地学事典より抜粋）

② 層序観察

採取試料の観察結果 採取した試料の観察結果を、第



重鉱物顕微鏡写真（オープンニコル）



重鉱物顕微鏡写真（クロスニコル）

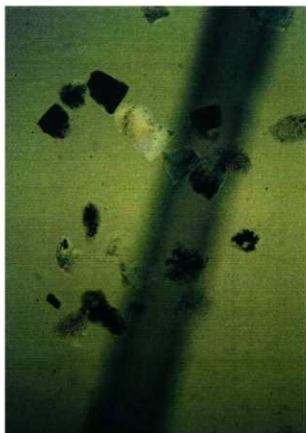


重鉱物顕微鏡写真（オープンニコル）

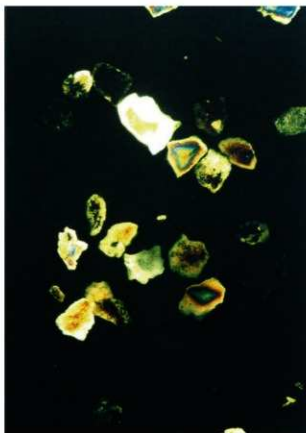


重鉱物顕微鏡写真（クロスニコル）

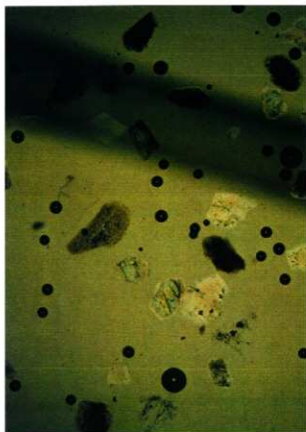
第34図 重鉱物の顕微鏡写真



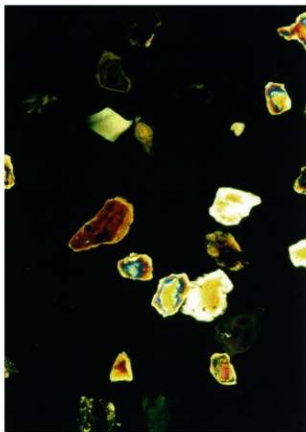
軽鉱物顕微鏡写真（オープンニコル）



軽鉱物顕微鏡写真（クロスニコル）



軽鉱物顕微鏡写真（オープンニコル）



軽鉱物顕微鏡写真（クロスニコル）

第35図 軽鉱物の顕微鏡写真

36図に示す。

層序の記載 採取した試料の層位は上位から第3層と第8層に区分され、そのうち第8層は上位の8a層と下位の8b層に区分される。鉱物分析はこのうちの8a層及び8b層を対象に実施した。

第3層は層厚4.3cmの粗粒な砂質土からなり、肉眼観察では全体に酸化褐色を帯びる灰褐色を呈し、灰色の石英や白濁した長石が認められる。

8a層は層厚20.4cmを有し、ササカイト片等の遺物を包含する。肉眼観察では橙白色のシルト混じりの粗砂であり、乾燥した試料では灰褐色を呈する。粗砂は顕微鏡観察では大半が長石及び石英から構成され、火山ガラスは殆ど含まれない。

8b層は層厚39.3cmを有し、最上部にササカイト片等の遺物の存在が確認されている。肉眼観察ではやや灰色を帯びた黄白色を呈する砂質シルトないしシルト質砂であり、乾燥試料では灰褐色を呈する。砂は8a層と同様、顕微鏡観察を行うと、大半が長石、石英であり、火山ガラスはほとんど含まれない。

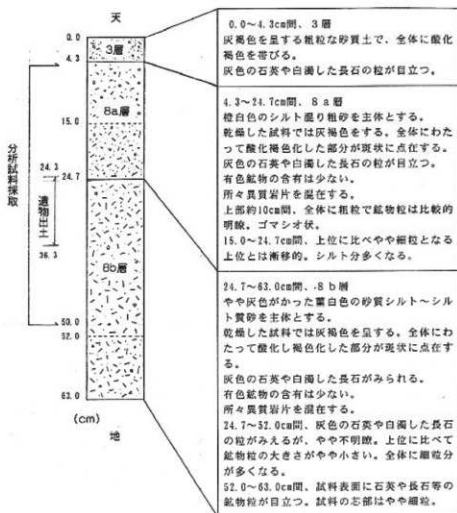
8a層、8b層共に、重鉱物の含有量は、肉眼観察・顕微鏡観察でも少なく、大半が軽鉱物の長石、石英から

なるのが特徴である。

なお、今回採取した試料に含まれる火山ガラスの量は非常に少なく、また、風化が激しく純粋な一次堆積のものとはいえないことから、屈折率の測定は実施していない。

《用語解説》

シルト混じり粗砂、砂質シルト、シルト質細砂 堆積物はその粒径により、大きく礫（2mm以上）・砂（2mm以下0.063mm以上）・シルト（0.063mm以下0.004mm以上）・粘土（0.004mm以下）の4つに区分される。純粋に礫、砂、シルトあるいは粘土のみから構成される堆積物は少なく、シルト中に砂が混じったり、粘土が混じったりするのが通常である。この場合、砂の混じる量によって砂混じりシルト（砂の混入量が15%以下）、砂質シルト（砂の混入量が15%以上50%以下）と表現される。他の場合も同様である。砂の場合はその粒径により粗砂（2mm以下0.5mm以上）、中砂（0.5mm以下0.25mm以上）、細砂（0.25mm以下0.125mm以上）、微細砂（0.125mm以下0.063mm以上）に区分される。



第36図 土層採取試料観察結果



第37図 調査地近景（西から）



第38図 調査地全景（北西から）



第39図 調査地全景（南東から）

第40図 南区近現代遺構面全景
(北西から)



第41図 南区第1遺構面全景
(南東から)

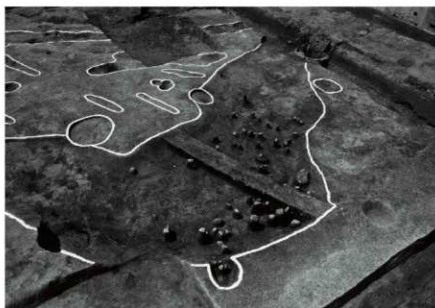


第42図 南区第2遺構面犁痕
検出状況 (南東から)





第43図 南区第3遺構面全景
(北西から)

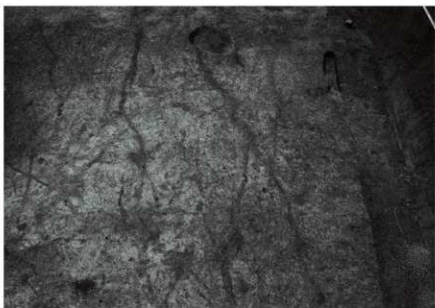


第44図 流路A東部掘削状況
(南から)



第45図 流路A土層断面
(南西から)

第46図 噴砂検出状況
(北西から)



第47図 噴砂土層断面
(北西から)



第48図 南区南壁土層
(北西から)





第49図 南区最終検出面
(北西から)



第50図 縄文時代旧河川掘削
状況(北西から)



第51図 礫群検出状況(北から)



第52図 北区全景（北西から）



第53図 北区上層遺構面全景（南東から）



第54図 流路2・3掘削状況
(北東から)



第55図 流路3・6掘削状況
(南東から)



第56図 流路4・5、落ち込み2
掘削状況(北東から)

第57図 北区下層遺構面全景
(南東から)



第58図 流路9掘削状況
(南から)



第59図 流路9土層断面
(北東から)





第60図 流路11木材出土状況
(南東から)



第61図 流路11掘削状況
(北東から)



第62図 流路11土層断面
(北東から)

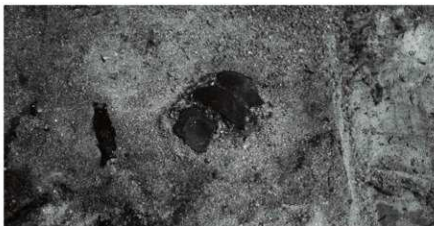
第63図 流路11掘削状況
(北東から)



第64図 流路11縄文土器出土状況
(北東から)



第65図 流路11縄文土器出土状況
(手前が北東)





第66図 流路15掘削状況
(北西から)



第67図 流路15木材出土状況
(北西から)



第68図 流路15木材出土状況
(手前が北)

第69図 北区南部掘削状況
(南西から)

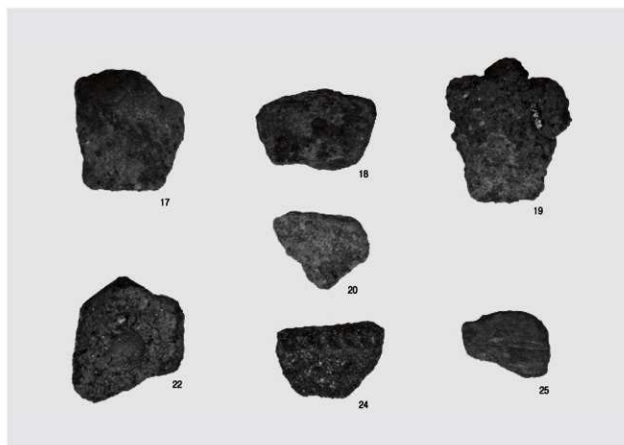


第70図 東西確認トレンチ
西半土層(北西から)

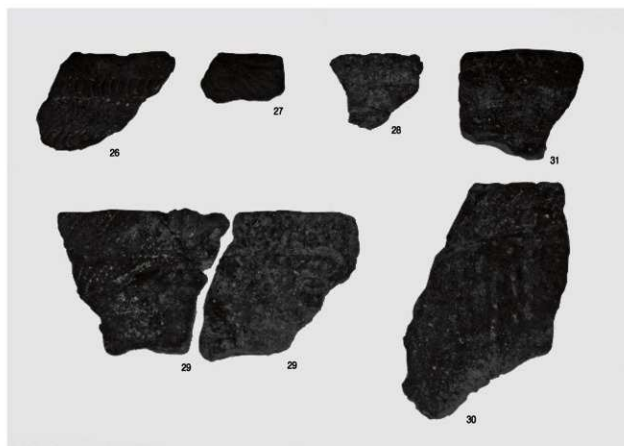


第71図 北区完掘状況
(北西から)

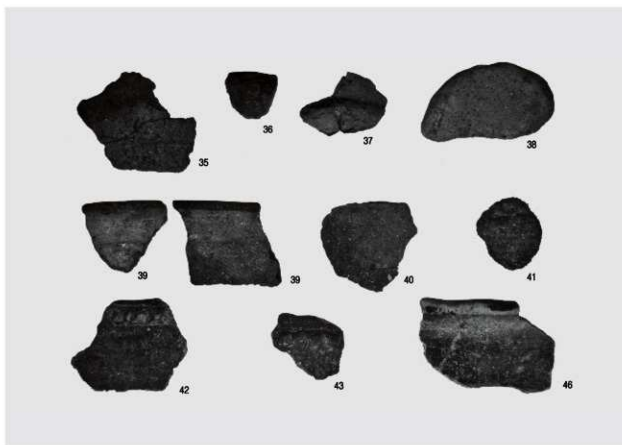




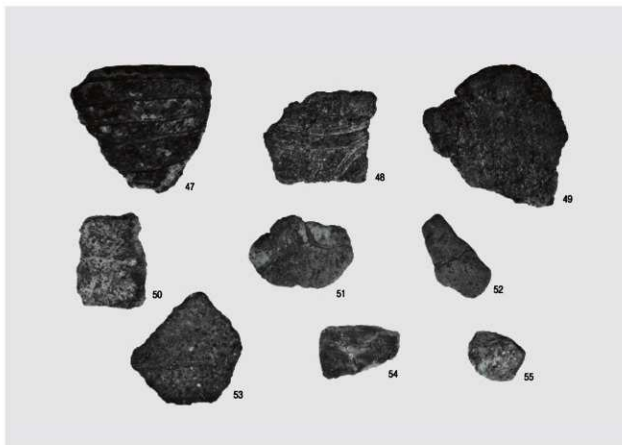
第72図 南区・北区遺構出土縄文土器



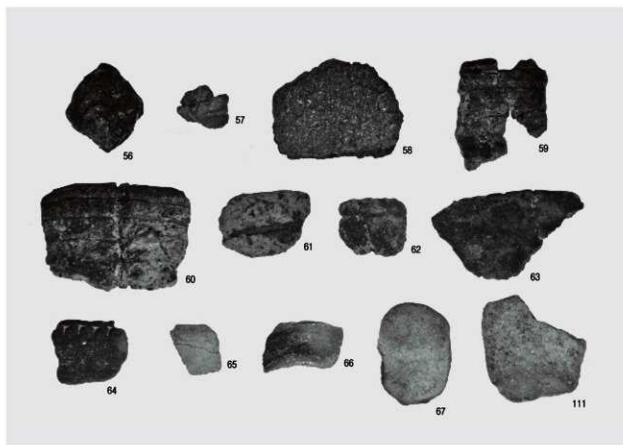
第73図 流路11出土縄文土器（1）



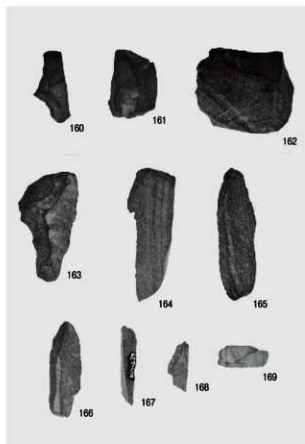
第74図 流路11出土縄文土器（2）・流路12・13出土縄文土器



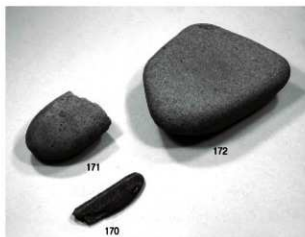
第75図 遺物包含層出土縄文土器（1）



第76図 遺物包含層出土縄文土器（2）



第77図 遺物包含層出土石器（1）



第78図 遺物包含層出土石器（2）

第5章 総括

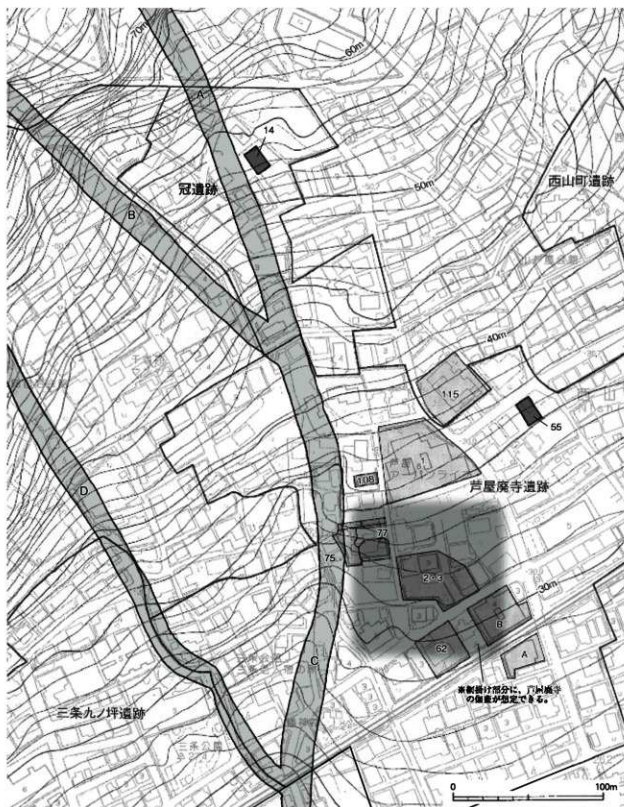
第1節 芦屋廃寺遺跡と冠遺跡

(1) 芦屋廃寺遺跡と冠遺跡の関わり

第2・3章で報告している冠遺跡と芦屋廃寺遺跡は、

震災復興調査の成果を盛り込んで作成した平成13年度の埋蔵文化財包蔵地分布地図以降、南北に接する遺跡と認識されるようになっている（第1図）。

また、東川の旧流路の痕跡を想定した〔第35集〕第



第1図 芦屋廃寺遺跡・冠遺跡の微地形復元 1/2500

21図を合成すると、東川の旧流路と関わりがあることがわかる。具体的には、冠遺跡の中央を流下する谷が東川の最も東側の谷筋（第1図A）で、それが冠遺跡と芦屋廃寺遺跡の境界付近で西側の谷（第1図B）と合流し、芦屋廃寺遺跡を通過して現在の三条八幡神社の西側に抜ける（第1図C）。さらに、旧三条川の西側から三条九ノ坪遺跡と芦屋廃寺遺跡の境界部分を下ってくる谷（第1図D）とも合流している（第1図）。このように、芦屋廃寺遺跡と冠遺跡は、地形的に密接なつながりがあるといえる。

冠遺跡は、第2章で紹介した第14地点などが、芦屋廃寺の中心域からは北に300mほどの距離にある。この辺りは等高線の間隔がやや狭くなっている上に、谷（第1図A）が入り込んでいるなど、複雑な地形になっている。さらにその北側は断層に伴う急斜面である。このような地形なので、集落の展開を想定するのは難しいが、奈良時代～平安時代の遺物が一定量出土するので、何らかの建物があったことが考えられる。あるいは、芦屋廃寺の僧や寺院従事者の住まいなどの施設が点在していたのかもしれない。

（2）芦屋廃寺の寺域

芦屋廃寺遺跡の発掘調査は昭和42年（1967）10月の第1地点から始まるが、この地点について、発掘調査報告書には、「大半が巨石を用いた大池庭であり」、「寺院址関係の遺構は存在しないこと、遺物よりみて古墳時代の生活の場であったことなどが認定された。」と記されている〔第7集〕。したがって、伽藍等は、第1地点より南側に広がっていたと理解してよいだろう。

既往調査で古代瓦がまとも出土している地点は、第2・3・B・62地点である〔芦屋廃寺跡発掘調査団・芦屋市教委1987、第7集、実績報告集3〕。とくに、第62地点では、芦屋廃寺に関連する建物基壇や整地面が確認されており、白鳳期～中世の瓦や埴が大量に出土している。また、第62地点とB地点の間には、かつて塔心礎（兵庫県指定文化財）が遺存していた（現在は、芦屋市立美術館に移設）。一方、B地点のすぐ南に位置するA地点から出土した瓦は極めて少ない。

また、第75地点では、奈良時代中頃の万灯会に使用したとみられる土器の一括廃棄を確認している。第108地点では、幅広い埴場の破片やスラグなど、金属加工に関わる遺物や、平安時代の被熱瓦、炭化物など、火災後の片づけを想定させる遺物が出土している〔第72・84集〕。おそらく、第75・108地点は、伽藍から外れていて、恒常的に西側の谷（第1図C）への廃棄を行う場所だったのだろう。なお、第77地点は、西側の谷への傾斜が認められない平坦地であったが、芦屋廃寺に関連する遺構は未検出である〔第72集〕。

以上のような調査結果から、芦屋廃寺は、東川の旧流路である西側の谷（第1図C）を西限として、それ

より東側の等高線の間隔が広がった緩傾斜地に占拠していたと理解することができる。また、南北域は、概ね第1・108地点より南側、A地点より北側とみることができる。東限については明確な根拠を示すことができないが、B地点より東側で古代瓦がまとも出土した情報がないので、ひとまずB地点付近とした。さらに、芦屋廃寺の伽藍が、通例の古代寺院と同様に正方位の区画を採用していたとすれば、第1図に網掛けで示したような、1町：108m四方ほどの範囲を考えるとできよう。

この区画から外れる第115地点では、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物がまとも出土しているが、奈良時代から平安時代の遺物は乏しい。これについては、芦屋廃寺の造寺集団との関わりを推測する一方で、奈良時代～平安時代の遺構が近世の耕作地化によって削平を被った可能性も考えている〔第87集〕。また、第3章で報告した第55地点では、芦屋廃寺に直結するような古代の遺物は乏しかったが、平安時代以降の遺構や遺物が確認できるので、芦屋廃寺の造営時や万灯会が行われた時期には生活の場として用いられておらず、その後土地利用がなされるようになったと理解している。もちろん、この段階には、芦屋廃寺にかかわる施設や住居等が存在していたことが推測できる。

第2節 縄文土器の出土について

（1）芦屋市内における縄文遺跡把握の経緯

第4章で報告している堂ノ上遺跡は、市内唯一の銅鐸出土地として周知されてきた遺跡であるが、第4地点の発掘調査までは、中世以降の遺跡と認識していた。しかし、第4地点で、開析谷における流路群を検出し、縄文時代中期～晩期の土器や石器が出土したことから、縄文時代の遺跡としての側面を持つことが明らかになった。もちろん、土器の出土は自然流路からなので、集落の中核ではないが、翠ヶ丘丘陵の南端に居住域が営まれていたことは確実である。

従来、芦屋市域の縄文遺跡は、朝日ヶ丘遺跡（朝日ヶ丘町）や山芦屋遺跡（山芦屋町）といった標高50mを超える丘陵高所に展開していると理解されてきた〔芦屋市役所1971・1976、森岡秀人1983a・1983b・1985、第4集〕。それ以外では、昭和59年（1984）に発掘調査を実施した扇状地上に位置する寺田遺跡第1地点で、2点の凸帯文土器片が出土したことが報告されているだけであった〔古代学協会1985〕。

ところが、寺田遺跡の北東に位置し、やはり扇状地上の月若遺跡で平成3年（1991）に実施した第13地点の発掘調査では、地山（13層）直上から縄文時代早期末～前期の土器片49点がまとも出土した〔六甲山麓遺跡調査会1993〕。発掘調査報告書では、これについて、「土器片はすべて表裏条痕土器で、2～4cm大

表1 縄文土器出土遺跡一覧

朝日ヶ丘遺跡(朝日ヶ丘町) 丘陵高所に立地

地点番号	調査年	遺構・遺物包含層	内 容	備 考	文 献
第1地点	1964	工事現場での表採	縄文・爪形文・縄文・条痕文のみ れる前期の土器片	石蔵・石造・石斧も出土。	第4集・市史 資料編1
第2地点	1973	J グリッド・灰褐色粘質砂層	土器の出土状況写真のみ	石蔵・石造・石簾なども出土。 龍岡確認調査。	第8集

山戸遺跡(山戸町) 丘陵高所に立地

N1地点	1981		早期・前期の土器	文章のみ。	第14集
S1地点	1981		早期・前期・後期の土器		
S4地点	1983	茶褐色小礫混じり土	早期の土器(山形押型文・楕円押型 文・無文土器)	山形押型文が下位。楕円押型 文・無文土器が上位から出土。 完全復元可能な無文土器あり。	網干・米田・ 山口1985
S4地点	1983	赤褐色土	前期	文章のみ。	
S4地点	1983	黒灰色土	後期	文章のみ。	第27集
S8地点	1995	遺物包含層	中期末から後期前期の土器		
S14地点	2007	遺物包含層	前期・中期末～後期初頭・後期後葉の 土器	石蔵・楔形石器・削器などの石 器も出土。	第79集
城山・三桑古墳 群第118地点(山 戸屋遺跡近接地)	2014		早期の土器(山形押型文)	古墳群の調査で出土。	第104集

冠遺跡(山戸町・三桑町・西山町) 崖下の層状地上部に立地

第14地点	1998	遺物包含層	後期～晩期の土器		第113集
-------	------	-------	----------	--	-------

堂ノ上遺跡(春日町・橋町) 丘陵縁部に立地

第4地点	1998	開拓谷の流路	中期～晩期の土器		第113集
------	------	--------	----------	--	-------

月若遺跡(月若町・西山町・西戸屋町) 層状地に立地

第13地点	1991	13層上面	早期末～前期の土器		六甲山麓遺跡 調査会1993
第18地点	1994	遺構や遺物包含層	中期から後期の土器		第29集
第19地点	1994	SK17・301か	後期から晩期の土器		第26集
第81地点	2004	遺構や遺物包含層	中期末の土器		第62集
第83地点	2005	暗黄茶褐色砂質シルト～粗 砂層	中期末の土器	石蔵も出土。	第68集
第96地点	2008	SR02に混在	早期の土器		第76集
第98地点	2009	検出	晩期の土器		第86集

寺田遺跡(三桑町・西戸屋町) 層状地に立地

第1地点	1984	第3層	晩期の土器	石蔵・楔形石器も出土。	古代学協會 1985
第95地点	1997～1998	第5遺構面出土	晩期の土器		第32集
第120～122地点	1999～2000	土壌層B	晩期の土器		第39集
第127地点	2000～2001	SD31	凹線と巻貝による層状圧痕のある土器 13層部		第43集
第130地点	2000～2001	SB202に混入	晩期の土器		
第181地点	2004～2005	第3遺構面 SD301	後期の土器		第62集

西山町遺跡(西山町) 層状地に立地

第7地点	2000	3区第3遺構面出土	後期の土器		第65集
------	------	-----------	-------	--	------

戸屋遺寺遺跡(三桑町・三桑町・西山町・西戸屋町) 層状地に立地

第71地点	2000	第21・25層など	早期末～前期初頭・晩期の土器	石蔵やササカイト剣片も出土。	第65集
第77地点	2001	1区第6層など	早期末～前期初頭の土器	石蔵やササカイト剣片も出土。	第72集

六条遺跡(清水町・前田町) 層状地に立地

第2次確認	1998～1999	6トレンチ	晩期前期の土器		兵庫県教委 2003
第2次確認	1998～1999	10トレンチ	晩期前期の土器	ササカイト剣片も出土。	
第2次確認	1998～1999	11トレンチ	晩期前期の土器		

重平遺跡(重平町・船戸町) 層状地に立地

第31地点	1997	第8層上面(石器製作所)	前期前期の土器	石蔵・石簾や大量の銅片も出土。	第95集
第34地点	1997	第4遺構面層1	1口堀面に銅目を持つ浅鉢	ササカイト剣片の出土を確認。	第109集
第61地点	2004	ST301	晩期中葉の土器箱		第62集
第61地点	2004	遺物包含層	晩期の土器	石蔵・楔形石器・削器などの石 器も出土。	

若宮遺跡(若宮町) 沖積平野に立地

第1地点	1997	第54層	晩期前期の土器		第30集
第2地点	1997	第5遺構面より下のサブトレ ンチ	晩期の土器		
第3地点	1997	道路とその周辺	晩期の土器		第38集
第4地点	1998	SI101に混入	晩期の土器		
第4地点	1998	第3遺構面土器層より	晩期の土器		
第4地点	1998	遺物包含層	晩期の土器		
第4地点	1998	第4遺構面SR02b	晩期の土器		
第10-11地点	1999	第9層	晩期の土器		

津知遺跡(津知町) 沖積平野に立地

第123地点	2002	第2遺構面出土	晩期の土器		第78集
--------	------	---------	-------	--	------

の小破片」で、「胎土・色調・調整技法や集中的な出土状況から同一個体とおもわれる」が、「破片の中には底部が1点混じっているものの、口頸部は全く見られず、土器の復元はもちろんなこと形態もよくわからない」。しかし、「磨耗度が少なくローリングを受けた形跡は見られず、現位置からあまり動いた状況にない」が、「遺構に伴う状況は否定的であった」ので、「底部付近の大きな破片が現在地まで運び込まれて、何らかの意思のもとに小さく破砕されたものと想定でき」として、月若遺跡について、縄文時代の狩猟を含む生活空間という性格が付け加えられた。次いで、平成6年(1994)に発掘調査を実施した月若遺跡第18・19地点で中期～晩期の土器が出土した〔第26・29集〕。このように、扇状地にも縄文時代の遺跡が存在していることが意識され始めた。

この状況を一進したのが、平成7年(1995)に発生した阪神・淡路大震災を受けて進められた復興調査や、都市計画道路山手幹線幹線路事業に伴う発掘調査である。これらの発掘調査によって、扇状地や沖積平野において次々に縄文土器が出土し、新たな遺跡の存在も確認できた〔兵庫県教委2003、第27・30・32・38・39・43・62・65・68・72・76・78・86・95・109集〕。

(2) 芦屋市内の縄文遺跡の分布

表1は、芦屋市域の縄文時代の遺跡について、立地や時期を概観するために作成した。ここでは、発掘調査報告書、『市史』『年報』に遺物の実測図・写真等の提示がある事例のみを対象としている。

現在、縄文土器の出土が知られている遺跡は、丘陵高所の朝日ヶ丘遺跡・山芦屋遺跡、丘陵縁辺部の堂ノ上遺跡、扇状地上で芦屋川右岸の冠遺跡・月若遺跡・寺田遺跡・西山町遺跡・芦屋庵寺遺跡・六条遺跡と芦屋川左岸の栗平遺跡、さらに沖積平野に立地する若宮遺跡と津知遺跡である。

個々の遺跡から出土した土器をみると、丘陵高所では朝日ヶ丘遺跡が前期に限られるが、山芦屋遺跡は早期・前期と中期末～後期の土器が確認できている。また、丘陵縁辺部の堂ノ上遺跡からは、中期～晩期の土器が出土している。

扇状地では、栗平遺跡において、前期前葉の土器を伴う石器製作跡を確認したり(第31地点)、晩期中葉の土器棺を検出したり(第61地点)と、これまで予想しなかった成果を得ている。このほか、月若遺跡や芦屋庵寺遺跡で早期末から前期初頭の土器が、月若遺跡で中期末～後期の土器が、西山町遺跡で後期の土器が出土しており、従来は弥生時代以降の遺跡と認識されてきた遺跡が、縄文時代以来の遺跡であることがわかってきた。また、冠遺跡では後期ないし晩期とみられる土器が出土している。さらに、晩期の土器は、月若遺跡・寺田遺跡・六条遺跡に加えて、沖積平野に立

地する若宮遺跡・津知遺跡でも出土しており、生活空間の広がりが把握できる。

このような成果から、扇状地や沖積地の深部にも、縄文時代の遺跡の分布が明らかになっている。

第3節 貿易陶磁の出土について

(1) 概要

堂ノ上遺跡からは、中世遺物が多数出土しており、その中に一定量の貿易陶磁がみられる。これらの意義について検討するため、発掘調査報告書等に遺物の実測図・写真等が示されているものをまとめたのが、表2である。なお、年代については、便宜上、大宰府の陶磁器分類〔太宰府市教委2000〕の、白磁碗Ⅳ・Ⅴ類、白磁皿Ⅷ類、龍泉窯系青磁鉢連弁文碗Ⅱ・Ⅲ類を「中世前期」、大宰府の陶磁器分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類や小野正敏分類〔小野1984〕の青磁連弁文碗B・C群、青磁無文碗、森田分類〔森田1982〕の白磁皿D・E類や青花を「中世後期」としている。

芦屋市域で最初に貿易陶磁が出土したのは、昭和52年(1977)に発掘調査を実施した三条岡山遺跡第2地点である。ここでは、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類や無文碗を中心とする貿易陶磁片を30点以上確認した〔第10集〕。その後、昭和62年(1987)の芦屋庵寺遺跡G地点〔第15集〕や平成2年(1990)の寺田遺跡第25地点〔第21集〕で、龍泉窯系青磁碗の小片が出土した。これらの事例から、芦屋川右岸の丘陵上や扇状地で貿易陶磁が出土することが認識されるようになっていった。

このような認識の下で進められた阪神・淡路大震災の復興調査や都市計画道路山手幹線幹線路事業に伴う発掘調査で、貿易陶磁の出土例は急増した。その結果、出土範囲は、芦屋川右岸だけでなく、芦屋川以東の扇状地や丘陵部、さらには沖積平野にも広がった〔栗平遺跡第52地点遺跡調査会2001、兵庫県教委2003、六甲山麓遺跡調査会1992、第27・28・30・34・37・38・39・43・45・46・51・62・66・78・79・82・84・91・94・95・97・101・105・109・110・112集、実績報告集1・2・3〕。

これらの調査結果から、ほとんどの中世遺跡で少量の貿易陶磁が出土することが明らかになった。ただし、一般的に白磁や青磁の碗・皿は普遍的にみられるが、青白磁や青花、褐釉陶器は限られる。

貿易陶磁を出土する遺跡について、遺跡の立地、出土量や器種の多様性、時期などに着目すると、芦屋川右岸の扇状地、芦屋川右岸の丘陵上、芦屋川右岸の平野部、芦屋川左岸の扇状地、宮川左岸の翠ヶ丘丘陵縁辺部から平野部の5つのグループを抽出することができた。そこで、各グループの動向についてまとめる。

(2) 芦屋川右岸の居跡地の動向

このグループは、緩傾斜地に広がる芦屋廃寺遺跡・寺田遺跡・月若遺跡・六条遺跡などである。このうち、芦屋廃寺遺跡は白鳳期に遡る古代寺院跡で、第62地点では唐三彩の小壺小片が出土している〔実績報告集2〕が、これに続く初期貿易陶磁の出土は報告されていない。

寺田遺跡や月若遺跡は弥生時代以降、連続と居住域として土地利用が行われてきた場所で、とくに寺田遺跡は、総柱建物跡や苑池を検出したり、墨書土器・土馬・和同開珎が出土したりしたので、官衙的な性格をも有する、古代における芦屋地域の中心地である。この寺田遺跡は、このグループで貿易陶磁の出土地点が最も多い遺跡で、平安時代後期～鎌倉時代初頭ごろの白磁碗・皿や青磁碗が普遍的に認められる。

加えて、第139地点では、直径0.3m、深さ0.3mの円形ピット（SP055）から、手のひら大に破砕された黄釉鉄絵盤と東播系須恵器鉢が出土している〔第45集〕。盤はほぼ完形に復元できるものであったので、何らかの祭祀に伴うものと考えられる。また、第181地点では、埋土に焼土塊や炭を含む大形の方形土坑（SK101・103）から、Ⅳ・Ⅴ類の白磁碗、同安窯系青磁碗・皿、青白磁の合子が出土している〔第62集〕。これらの土坑からは、大量の土師器・須恵器・瓦器や刀子・釘・鉄鍋などの鉄製品も出土しており、12世紀後半の鍛冶に関わる遺構が埋没する過程で、一括投棄された可能性が指摘されている。ただし、出土した貿易陶磁は残存率が高いので、廃棄以外の理由があったとも考えられる。このほか、居館に伴う東西方向の堀を検出した第233地点では、小片ばかりではあるが、白磁碗・壺や青磁碗が出土している。

これら、第139・181・233地点で出土した貿易陶磁は、概ね福原京期前後の資料なので、平清盛による日宋貿易との関わりが考えられる。あるいは、大輪田泊から直接持ち込まれたものかもしれない。

さらに、当該期の苑池を確認した六条遺跡でも、白磁皿や青白磁合子が出土している〔兵庫県教委2003〕。このように、このグループでは中世前期の貿易陶磁の種類は豊富で、量も多い傾向がある。

ところが、中世後期になると、青磁碗などはみられるが、中世前期のような特徴的な遺物は少なくなる。

(3) 芦屋川右岸の丘陵上の動向

このグループに属するのは、三条岡山遺跡である。標高50m付近の斜面地に位置していて、眺望の良い場所である。三条岡山遺跡では、第2地点に加えて、平成20年（2008）に第2地点に隣接する第19地点で実施した発掘調査によって、大量の煮炊具や土師器皿、備前焼鉢鉢などとともに、青磁碗や青磁花皿が出土している〔第82集〕。この調査では、斜面地を離壇状に加工して平坦面を造り出し、堀や庭園（池・滝・溝・

ピット群）、廃棄土坑などを設けた中世後期（15世紀）の居館の存在が明らかになった。したがって、貿易陶磁は、この居館の主の所有物であったと理解できる。

本調査地点から北方1kmほどの鷹尾山（標高約250m）の山頂には、永正8年（1511）の芦屋河原の戦いとその後の城攻めによって落城したとされる河尾城があり、その城主は瓦林政頼と伝えられている。三条岡山遺跡の居館は、瓦林政頼の居館とみることできる。

(4) 芦屋川右岸の平野部の動向

このグループに属するのは、津知遺跡である。この遺跡は、平安時代末以降に遺構・遺物が増加し、耕作地が面的に広がったと理解されている。ただし、第17・19・28地点では、柱穴や掘立柱建物跡、堤状遺構も検出しているので、集落の存在も推測できる〔第34・37・46集〕。

各調査地点では、流路や遺物包含層から白磁碗・皿、青磁碗など一般的な貿易陶磁が出土している。津知町の日吉神社に現存する石祠には、「永正十七年」の年号や「久村」（つじ村）の刻印があるので、中世後期には津知村が成立していたと考えられている。したがって、これらは、津知村に関わる遺物といえる。

(5) 芦屋川左岸の居跡地の動向

このグループでは、大原遺跡・船戸遺跡・栗平遺跡で貿易陶磁が出土している。その量はあまり多くないが、大原遺跡第3地点で青白磁合子〔六甲山麓遺跡調査会1992〕、栗平遺跡第41地点で青白磁梅瓶片〔第109集〕が出土するなど、中世前期の特徴的な遺物が認められる。

このグループは、近現代に宅地化が進むまでは、基本的には耕作地が広がっていたと考えられるが、船戸遺跡や栗平遺跡では、局所的に10世紀の遺構や遺物を検出している〔第95・110集〕。

船戸遺跡は、「船戸（ふなと）」の地名が、古代律令制下の品部の一つである〔船戸（ふなもりべ）〕に由来していて、近在に船乗りや船大工に関わる施設があった可能性が指摘されている〔芦屋市役所1971〕。第10地点では、印花文花緑釉陶器片や須恵器双耳甕片が出土しており、第10地点のすぐ東に位置する第14地点では、移動式竈や印花文花緑釉陶器片が出土したほか、大形の方形柱穴を検出している。このため、特殊な施設が存在が考えられる。

また、栗平遺跡第29地点では、焼土や炭化物を含む土坑や構状遺構、掘立柱建物跡を検出しており、集落の端にあたと解釈している。

これらの施設や集落が中世前期まで継続した痕跡は認められないが、12世紀前後にも、特殊な施設が営まれていた可能性は考えられる。

中世後期については、栗平遺跡第29・41地点で青花

皿・青花碗が出土しており、中世後期でも末に下る遺物が存在している〔第95・109集〕。同時期の遺物としては、第29地点で中国南方産の青磁碗や戦国時代の城館に類例の多い白磁碗、さらに江戸時代初頭の唐津焼の皿が出土しているほか、第26地点で砥石7個を、大原遺跡第21地点で初期唐津焼片を確認している〔第95集〕。これらの遺物から、徳川大坂城再築の際、採石活動のための飯場や番所が存在したことが想定できる〔第95集〕。

(6) 宮川左岸の翠ヶ丘丘陵縁部から平野部の動向

翠ヶ丘丘陵の縁部には、堂ノ上遺跡のほかに、久保遺跡・打出小櫃遺跡・金津山古墳・小松原遺跡が分布している。また、そのすぐ南側の沖積平野にかけて、若宮遺跡が広がっている。このグループでは、久保遺跡や打出小櫃遺跡において、平安時代末～鎌倉時代前半ごろに耕作地の開発や集落の形成が考えられるようになっている〔第66・91・95・97・109集〕。

堂ノ上遺跡第4地点の開析谷流路の上部堆積層や遺物包含層から、平安時代後期～鎌倉時代前半ごろの遺物がまとまって出土している。また、打出小櫃遺跡第45地点で検出した打出小櫃古墳の後円部周濠の中位層には、貿易陶磁のほかに、白色系土器・東播系須恵器・灰釉陶器などの平安時代後期～鎌倉時代の遺物がみられた。ただし、これらの遺物が流入した流路や周濠があるものの、当該期の住居跡や明確な土坑など、居住域の広がりや示す遺構は確認されていない。したがって、堂ノ上遺跡や打出小櫃遺跡には耕作地が広がっており、北側の丘陵上にある久保遺跡付近に居住域が存在したことが推測できる。

ところで、堂ノ上遺跡第4地点では、青白磁合子や褐釉陶器壺も出土しているので、この地域の開発に携わった人々の中には、大輪田泊や平氏政権と関わりをもつ人物がいたことも想定できる。

中世後期になると、打出小櫃遺跡第45地点で検出した打出小櫃古墳の後円部周濠の上位層から、土師質土器・東播系須恵器・瓦器・瓦質土器・陶器などの遺物が出土しており、この頃に打出小櫃古墳の周濠が完全

に埋没したようである。この地点では、溝や耕作面、遺物包含層からも、中国製青磁碗・皿とともに土師質土器・瓦質土器・東播系須恵器・備前焼・瀬戸美濃焼・唐津焼などが出土している。また、第22地点の流路からも貿易陶磁を含む中世遺物が出土しているため、15世紀以降も、打出小櫃遺跡一帯に耕作地や集落が展開していたことがわかる。

一方、若宮遺跡は、頻繁に洪水に見舞われた様子が観察できるが、第34地点で14世紀前半の護岸状遺構を検出したほか、各調査地点で中世から近世にかけて営まれた複数の耕作面を確認している〔第30・38集〕。また、遺物包含層や耕作溝から貿易陶磁の破片が出土している。ここでは、白磁碗Ⅳ類・白磁皿Ⅹ類といった中世前期のものも散見されるが、龍泉窯系青磁碗Ⅳ類・青磁無文碗・青磁細連弁文碗・青花碗や高台に挟りの入る白磁皿（森田分類Ⅱ類）など、中世後期のものが多い。14世紀頃から耕作地として開発が進んだようだが、耕作地以外の遺構としては、第25地点で丸太を削り抜いた水溜を伴う石組の井戸、第10・1・25・34地点で獣骨の加工に関わる廃棄遺構を確認したものの、居住域を示す明確な遺構は不明である。おそらく、一帯に耕作地が広がって、その中に住居が点在していたのであろう。

ところで、近世には、このグループを東西に貫通する西国街道（本街道・浜街道）があり、集落は街道沿いに形成されていたことが知られている。この街道と貿易陶磁の出土地の位置関係をみてみると、本街道は金津山古墳の南側や打出小櫃遺跡の南縁部を通って、金津山古墳第9地点や打出小櫃遺跡第22・31・41・45地点は、本街道よりやや北側に当たっている。一方、浜街道は若宮遺跡よりも南に位置しているので、若宮遺跡の各調査地点は、浜街道よりは北側で本街道より南側である。打出小櫃遺跡や若宮遺跡で広く耕作地が検出されるのに対してそれ以外の遺構が乏しく、集落の位置がはっきりしないことや、土器・陶磁器類の出土状況を勘案すると、中世後期には西国街道（あるいは古代山陽道を踏襲する道路）に近い位置に、住居がまとまるようになっていたのかもしれない。

表2 貿易陶磁出土遺跡一覧

三条岡山遺跡（三条町）丘陵上に立地

地点番号	調査年	白 磁		青 磁		その他	時 期	備 考	文 献
		碗	皿	碗	皿				
第2地点	1977	○	○			青白磁碗・青花鉢	前期		第10集
第19地点	2008			○	○	緑花皿	後期	○	堀や庭園を伴う居館跡。第82集
冠遺跡（山岸町・三条町・西山町）崖下の扇状地上部に立地									
第9地点	1997	○		○			○		第109集
第14地点	1998			○			○		第113集
芦屋寺遺跡（三条町・三条南町・西山町・芦屋町）扇状地に立地									
G地点	1987			○			○	○	第15集
W地点	1995～1996			○					第28集
第38地点	1996						○		第27集
第44地点	1996		○						第95集
第45地点	1996	○	○	○		甃または鉢	○		第97集
第55地点	1999		○	○			○		第113集
第88地点	2003			○		青白磁皿	○	○	第78集

寺田遺跡（三条南町・西芦屋町） 扇状地に立地

[illegible]

月若遺跡（月若町・西山町・西芦屋町） 扇状地に立地

第28地点	1995・1996	○		○				○	○		第27・28集	
第33・37地点	1996		壹		○			○				
第36地点	1996	○	壹	○				○	○			第95集
第71地点	2003		○						○			

六条遺跡（清水町・前田町） 層状地に立地

H11年度	1999	○	○					○			
H12年度	2001	○						○		苑池を確認。	
H13年度	2001～2002	○	○	○			喜白礬含子	○			県第256冊

津知遺跡（津知町） 沖積平野に立地

第17编点	1998		○					○	○			第34集
第19编点	1990	○										第37集
第26编点	2000	○		○					○			
第28编点	2001	○	○									
第37编点	2001			○								第46集
第142编点	2002	○						○				

大原遺跡（大原町） 扇状地に立地

第3地点	1990	○	○	盤	○	○	青白磁合子	○	○	六甲山麓1992
第35地点	1998	○						○		第112集

船戸遺跡（船戸町・松ノ内町） 扇状地に立地

第10地点	2003	○	○				○			第110集
-------	------	---	---	--	--	--	---	--	--	-------

葉平遺跡（葉平町・船戸町） 扇状地に立地

第25地点	1996	○				○			实践报告集1
第26地点	1996			○					第95集
第27地点	1996			○					实践报告集1
第29地点	1996~1997	○	痕	○	○	青花皿	○	○	实践报告集1、 第95集
第34地点	1997	○					○	○	
第41地点	1997			○		青白磁梅瓶、青花碗、青花里		○	第109集
第52地点	2000			○				○	调查会2001
第61地点	2004	○						○	第62集

久保遺跡（親王塚町）丘陵緩斜面に立地

第29地点	1996				○				○			実績報告集1
-------	------	--	--	--	---	--	--	--	---	--	--	--------

堂ノ上遺跡（春日町・楠町） 丘陵緩斜面に立地

[illegible]

打出小槌遺跡（打出小槌町） 丘陵緩辺部に立地

[illegible]

金津山古墳(春日町) 丘陵縁辺部に立地

[illegible]

若宮遺跡（若宮町） 沖積平野に立地

地点	年份	是否参加	是否获奖
第1地点	1997	○	○
第2地点	1997	○	○
第3地点	1997	○	○
第10-1地点	1999	○	○
第10-2地点	1999	○	○
第16-2(2)· 16-3地点	1999	○	○
第25地点	1999	○	○
第24地点	2000	○	○

臺 縣—兵庫縣文化財調査報告
六甲山麓—六甲山麓道跡調査会
調査会—栗平道跡第52地点道跡調査会

引用・参考文献

- 芦屋市教育委員会 2005a 『平成8年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』〈芦屋市文化財調査実績報告集1〉
- 芦屋市教育委員会 2005b 『平成9・10年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』〈芦屋市文化財調査実績報告集2〉
- 芦屋市教育委員会 2006 『平成11・12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査－震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査－実績報告書集』〈芦屋市文化財調査実績報告集3〉
- 芦屋廃寺跡発掘調査団・芦屋市教育委員会 1987 『芦屋廃寺B地点道跡発掘調査現地説明会ノート』
- 芦屋市役所 1971 『新修芦屋市史』本篇 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編
- 芦屋市役所 1976 『新修芦屋市史』資料篇1(考古・古代・中世) 武藤 誠・有坂隆道・末中哲夫・村川行弘 編
- 芦屋ミュージアム・マネジメント 2014 『阪神間モダンイズム調査報告書2013』
- 網干善教・米田文孝・山口卓也 1985 『山芦屋遺跡(S4地点)』〈兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度〉兵庫県教育委員会
- 泉 拓良 1981 『後期の土器 近畿地方の土器』『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
- 泉 拓良 2008 『鷹島式・船元式・里木Ⅱ式土器』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 今村道雄・町田利幸 1997 『芦屋廃寺遺跡(第48地点)』『平成8年度 年報』兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 石田由紀子 2008 『中津式・福田KⅡ式土器』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 伊野近富 1995 『土師器Ⅲ』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 大阪府立近つ飛鳥博物館 編 2006 『年代のものさしー陶器の須恵器ー』〈大阪府立近つ飛鳥博物館図録40〉
- 岡田憲一 2008 『凹線文系土器(宮崎式・元住吉Ⅱ式土器)』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 岡田憲一 2008 『近畿・中国・四国地方』『縄文時代の考古学』2 歴史のものさし 縄文時代研究の編年体系同成社
- 小野正敏 1984 『『第4回貿易陶磁研究集会』, その成果と課題』『貿易陶磁研究』№4 日本貿易陶磁研究会
- 尾上 実・森島康男・近江俊秀 1995 『瓦器論』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 関西大学山芦屋遺跡発掘調査団 1983 『山芦屋遺跡S4地点の発掘調査概要』芦屋市教育委員会
- 木戸雅寿 1995 『石鍋』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 古代学協会 1985 『芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書』南博史ほか 編
- 佐竹義輔・原 寛・亙理俊次・富成忠夫(編) 1989 『日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ』平凡社 p.321・p.305
- 寒川 旭 2007 『地震の日本史－大地は何を語るのか』(中公新書) 中央公論新社
- 杉山真二 1987 『遺跡調査におけるプラント・オブール分析の現状と問題点』『植生史研究』第2号 p.27-37
- 杉山真二 1987 『タケ亜科植物の機動細胞浸透性』『富士竹類植物園報告』第31号 p.70-83
- 杉山真二・早田勉 1996 『植物珪酸体分析による宮城県高森遺跡とその周辺の古環境推定 中期更新世以降の水期 間氷期のサイクルの検討』『日本第四紀学会講演要旨集』26 p.68-69
- 高橋照彦 2003 『平安京近郊の緑釉陶器生産』『古代の土器研究－平安時代緑釉陶器－生産地の様相を中心に－』(古代の土器研究会第7回シンポジウム) 古代の土器研究会
- 太宰府市教育委員会 2000 『太宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』(太宰府市の文化財 第49集) 山本信夫 編
- 中世土器研究会 2014 『東播系須恵器捏鉢の新分類および変遷概略図の提示』『第33回 中世土器研究会 東播系須恵器(2)－編年と分布から考える－』
- 中世土器研究会事務局 2015 『東播系須恵器鉢の分類と編年』『中近世土器の基礎研究』26(東播系須恵器－編年と分布から考える－) 日本中世土器研究会
- 千葉 豊 2008 『緑帯文土器』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 横井一郎 1995 『中世後期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 富井 寛 2008 『白川口C式土器』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 中村健二 2008 『凸帯文系土器(中四国・近畿・東海地方)』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 中村 豊 2008 『西日本磨研土器(滋賀Ⅰ～Ⅲ式土器)』『総覧縄文土器』小林達雄 編 アム・プロモーション
- 業平第52地点遺跡調査会 2001 『業平第52地点発掘調査報告書』藤井利幸 編
- 桑岡 実 2000 『備前焼捏鉢の編年について』『第3回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会
- 白谷朋世 2013 『東播系須恵器生産地周辺の動向－兵庫県下の資料から－』『第32回 中世土器研究会 東播系須恵器－編年と分布から考える－』中世土器研究会
- 白谷朋世 2015 『東播系須恵器生産地周辺の動向－兵庫県下における13世紀～15世紀の消費地資料の再検討－』

- 「中世土器の基礎研究 東播系須恵器—編年と分布から考える—」26 日本中世土器研究会
- 長谷川 眞 2006 「瀬戸内東部—播磨」第25回 中世土器研究会 土製煮炊具の諸様相 日本中世土器研究会
- 長谷川 眞 2007 「播磨における土製煮炊具の様相」『中世土器の基礎研究』21 日本中世土器研究会
- 平井信二 1979—1982 『本の事典』第1巻—第17巻 かなえ書房
- 兵庫県教育委員会 1983 『魚住古窯跡群』〈兵庫県文化財調査報告 第19冊〉
- 兵庫県教育委員会 1998 『旧道跡—本州四国連絡橋道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』〈兵庫県文化財調査報告 第176冊〉
- 兵庫県教育委員会 2003 『芦屋市六条道跡』〈兵庫県文化財調査報告 第256冊〉
- 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1999 『平成10年度 年報』
- 藤原宏志 1976 「プラント・オパール分析法の基礎的研究 (1) —数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法—」『考古学と自然科学』9 p.15—29
- 藤澤良祐 2001 「瀬戸・美濃大窯製品の生産と流通—研究の現状と課題—」『戦国・織豊期の陶磁器流通と瀬戸・美濃大窯製品—東アジアの視野から—』〈財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立10周年記念「瀬戸大窯とその時代」シンポジウム・講演会 資料集〉財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター
- 前田保夫 1985 「六甲アイランドの最終水期相当層の花粉分析」『月刊地球』p.315—318
- 松下まり子 1992 「六甲山系の変遷」「六甲山の植物」神戸新聞総合出版センター p.168—177
- 森田 勉 1982 「14—16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 森岡秀人 1983a 「山芦屋道跡N地点緊急発掘調査」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1983b 「山芦屋道跡S1地点緊急発掘調査」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和55年度』兵庫県教育委員会
- 森岡秀人 1985 「山芦屋道跡(S3地点)」『兵庫県埋蔵文化財調査年報 昭和57年度』兵庫県教育委員会
- 家根祥多 1981 『晩期の土器 近畿地方の土器』『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣
- 山下将司 1995 『灰釉陶器・山茶碗』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 山本信夫 1995 『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 編 真陽社
- 六甲山麓道跡調査会 1992 『芦屋市大原道跡—第3地点—』橋本 久・浅岡俊夫・姫路真保・古川久雄 編
- 六甲山麓道跡調査会 1993 『芦屋市月若道跡—第10地点・第13地点—』浅岡俊夫 編

『芦屋市文化財調査報告(関連分)』

- 第4集 『朝日ヶ丘縄文道跡 八十塚古墳群』村川行弘・橋爪康至・藤岡 弘・安田博幸 編 1966年刊行
- 第7集 『芦屋廃寺址』村川行弘 編 1970年刊行
- 第8集 『朝日ヶ丘縄文道跡 会下山弥生道跡』藤井祐介・森岡秀人 編 1974年刊行
- 第10集 『三条岡山道跡』森岡秀人 編 1979年刊行
- 第14集 『埋蔵文化財調査メモリアル'80—'85』森岡秀人 編 1986年刊行
- 第15集 『昭和62年度国庫補助事業 芦屋廃寺道跡G・I地点発掘調査概要報告書』森岡秀人・和田秀寿・関野 豊 編 1988年刊行
- 第16集 『芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き』森岡秀人 編 1988年刊行
- 第17集 『昭和63年度国庫補助事業 芦屋廃寺道跡K地点・寺田道跡第16次地点発掘調査概要報告書』森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1989年刊行
- 第19集 『平成元年度国庫補助事業 寺田道跡第20次地点金津山古墳後内郭範囲・構造確認調査 三条九ノ坪道跡第4地点 発掘調査概要報告書』森岡秀人・和田秀寿・後神 泉 編 1990年刊行
- 第21集 『平成2年度国庫補助事業 芦屋廃寺道跡ほか発掘調査概要報告書 寺田道跡第23次地点 寺田道跡第24次地点 寺田道跡第25次地点 寺田道跡第27次地点 芦屋廃寺道跡M地点 芦屋廃寺道跡N地点』森岡秀人・松村朋世・後神 泉 編 1991年刊行
- 第22集 『平成3年度国庫補助事業 芦屋廃寺道跡ほか発掘調査概要報告書 月若道跡第12次地点 月若道跡第14次地点 八十塚古墳群岩ヶ支群第50号墳』森岡秀人・白谷朋世 編 1992年刊行
- 第23集 『平成4年度国庫補助事業 芦屋市内道跡発掘調査概要報告書 打出小槌道跡第7次地点 打出小槌道跡第2次地点 打出小槌道跡第3次地点』森岡秀人・白谷朋世 編 1993年刊行
- 第26集 『平成6年度国庫補助事業 芦屋市内道跡発掘調査概要報告書 月若道跡(第19地点)』森岡秀人 編 1995年刊行
- 第27集 『平成7年度国庫補助事業 芦屋市内道跡発掘調査—震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認(試掘)調査—概要報告書 寺田道跡(W地点・第29・38地点) 月若道跡(第20・25・28・30・33地点) 打出岸造り道跡(第1地点) 打出小槌道跡(第17地点) 金津山古墳(第9地点) 久保道跡(第15地点) 山芦屋道跡(S8地点)』森岡秀人・木南アツ子 編 1996年刊行
- 第28集 『阪神・淡路大震災復興・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査(平成7年度分)概要報告書 芦屋廃寺道跡(W地点) 芦屋廃寺道跡(第29地点) 月若道跡(第20地点) 月若道跡(第28地点) 打出岸造り道跡(第9地点) 久保道跡(第15地点)』森岡秀人・木南アツ子 編 1997年刊行
- 第29集 『月若道跡(第18地点) 発掘調査簡報—芦屋川扇

- 状地右岸地域における古墳時代集落の展開」 森岡秀人 編 1997年刊行
- 第30集 「若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告書-震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮町住宅1号館建設)に伴う埋蔵文化財事前調査の成果」 森岡秀人・竹村忠洋 編 1999年刊行
- 第32集 「寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書 阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果」 重藤輝行・竹村忠洋 編 1999年刊行
- 第34集 「津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書-芦屋西部第二地区土地区画整理事業(津知第2公園)に伴う震災復興調査」 竹村忠洋 編 1999年刊行
- 第35集 「芦屋廃寺遺跡(第53地点)・寺田遺跡(第104地点)震災復興埋蔵文化財確認調査概要報告書 津知川排水区雨水管敷設工事(東川用水路推定地)に伴う確認調査」 森岡秀人・竹村忠洋・古川久雄 編 1999年刊行
- 第36集 「三条岡山遺跡(第11地点)発掘調査概要」 渡辺昇 編 1998年刊行
- 第37集 「津知遺跡(第19地点) 従前居住者用住宅(仮称津知町住宅)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-震災復興事業」 篠宮 正 編 2000年刊行
- 第38集 「若宮遺跡(第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点)発掘調査概要報告書-若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果」 竹村忠洋 編 2002年刊行
- 第39集 「寺田遺跡(第117~124地点)発掘調査概要報告書 都市計画道路路西線建設に伴う発掘調査-震災復興調査」 山田清朝 編 2001年刊行
- 第40集 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図利用の手引き」 森岡秀人・竹村忠洋 編 2001年刊行
- 第41集 「六条遺跡発掘調査報告書-芦屋西部第一地区震災復興土地区画整理事業・清水公園建設事業に伴う六条遺跡(第17・18地点)の事前調査記録」 森岡秀人・坂田典彦 編 2002年刊行
- 第43集 「兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査」 前田佳久・平田朋子・中居さやか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2002年刊行
- 第45集 「兵庫県芦屋市 寺田遺跡発掘調査報告書 第132・133・137・139・141・142地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅱ」 前田佳久・千種 浩・佐伯二郎・平田朋子・中居さやか 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2003年刊行
- 第46集 「津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書-芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果」 竹村忠洋・山内芳子 編 2003年刊行
- 第47集 「平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡(第128地点)発掘調査報告書-集落東端部の様相と知見」 森岡秀人・坂田典彦 編 2003年刊行
- 第51集 「月若遺跡(第71地点)発掘調査報告書」 竹村忠洋・白谷朋世 編 2004年刊行
- 第52集 「前田公園建設事業に伴う前田遺跡(第20地点)発掘調査概要報告書-弥生前期水田跡の構造と水利動態」 森岡秀人 編 2004年刊行
- 第58集 「若宮遺跡(第42地点)発掘調査報告書 須恵器集中遺存地点の調査と成果」 森岡秀人・坂田典彦 編 2005年刊行
- 第62集 「兵庫県芦屋市 栗平遺跡第61地点 月若遺跡第79・81地点 寺田遺跡第178・181地点 発掘調査報告書-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅴ」 安田 滋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2006年刊行
- 第65集 「平成12年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書-震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果」 城山南麓遺跡(C・D地点) 西山町遺跡(第7地点) 芦屋廃寺遺跡(第71地点) 六条遺跡(第13地点) 津知遺跡(第24・31地点) 打出岸造り遺跡(第32地点) 四ツ塚(第7地点) うの塚(第1地点) 森岡秀人・竹村忠洋 編 2007年刊行
- 第66集 「打出小畑遺跡(第41地点)発掘調査報告書」 竹村忠洋・白谷朋世 編 2007年刊行
- 第68集 「兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第83地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅵ」 齋木 巖 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2007年刊行
- 第72集 「平成13年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書-市内遺跡及び震災復興に伴う埋蔵文化財緊急確認・本発掘調査の結果-芦屋廃寺遺跡(第74・75・77・79地点) 寺田遺跡(第143地点) 六条遺跡(第43地点) 津知遺跡(第43・69地点) 大原遺跡(第45地点) 打出岸造り遺跡(第35地点)」 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年刊行
- 第73集 「平成18年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書-徳川大坂城東六甲探石場Ⅷ- 三条上遺跡(第45地点) 岩ヶ平刻印群(第122地点) 岩ヶ平刻印群(第124地点) 岩ヶ平刻印群(第126地点)」 森岡秀人・竹村忠洋 編 2008年刊行
- 第74集 「芦屋市山手幹線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要-総集編」 山本雅和 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2008年刊行
- 第75集 「金津山古墳発掘調査報告書-第17地点で検出した外周壕の発掘調査成果」 白谷朋世 編 2008年刊行
- 第76集 「兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第96地点-都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査Ⅷ」 竹村忠洋・守田めぐみ 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2009年刊行
- 第78集 「平成14年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書-震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査とその成果-城山南麓遺跡(E・F・G地点) 冠遺跡(第23地点) 芦屋廃寺遺跡(第81・88地点) 月若遺跡(第74地点) 寺田遺跡(第144地点) 津知遺跡(第123・187地点) 打出岸造り遺跡(第38・39地点) 久保遺跡(第47・48地点) 打出小畑遺跡(第36・37地点)」

- 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦 編 2009年刊行
- 第79集 『平成19年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡(第191地点) 山芦屋遺跡(S14地点)』 森岡秀人・竹村忠洋・守田めぐみ 編 2009年刊行
- 第82集 『三条岡山遺跡発掘調査報告書(第19地点) - 片鱗をみせる中世居館と三条岡山古墳群 -』 白谷朋世 編 2009年刊行
- 第83集 『平成15年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 芦屋廃寺遺跡(第89地点) 寺田遺跡(第171地点) 清水遺跡(第22地点) 金津山古墳(第12地点)』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年刊行
- 第84集 『平成20年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 城山南麓遺跡(K地点) 芦屋廃寺遺跡(第108地点) 月若遺跡(第102地点) 寺田遺跡(第197地点) 岩ヶ平刻印群(第169地点) - 徳川大坂城東六甲採石場X -』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年刊行
- 第86集 『兵庫県芦屋市 月若遺跡発掘調査報告書 第98・100地点 - 都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査IX -』 竹村忠洋 編 芦屋市・芦屋市教育委員会 2010年刊行
- 第87集 『兵庫県芦屋市 芦屋廃寺遺跡(第115地点) 発掘調査概要報告書』 森岡秀人・竹村忠洋・坂田典彦・白谷朋世 編 2010年刊行
- 第88集 『平成21年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 岩ヶ平刻印群(第176地点) - 徳川大坂城東六甲採石場XⅢ - 芦屋廃寺遺跡(第113地点) 打出岸造り遺跡(第56地点)』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2011年刊行
- 第89集 『平成22年度 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡(第209地点) 若宮遺跡(第50・51・52・57地点)』 森岡秀人・坂田典彦・白谷朋世 編 2012年刊行
- 第91集 『平成22年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 三条九ノ坪遺跡(第40地点) 打出小槌遺跡(第45地点)』 森岡秀人・白谷朋世 編 2012年刊行
- 第94集 『寺田遺跡第213地点発掘調査報告書』 坂田典彦・西岡崇代 編 2013年刊行
- 第95集 『平成8年度国庫補助事業(1) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 三条九ノ坪遺跡(第15地点) 月若遺跡(第35・37地点) 月若遺跡(第36地点) 業平遺跡(第26地点) 業平遺跡(第29地点) 業平遺跡(第31地点) 大原遺跡(第21地点)』 白谷朋世 編 2013年刊行
- 第97集 『平成8年度国庫補助事業(2) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 芦屋廃寺遺跡(Z地点・第45地点・第49地点) 寺田遺跡(第77地点・第89地点・第90地点) 打出小槌遺跡(第22地点)』 白谷朋世 編 2014年刊行
- 第98集 『芦屋廃寺遺跡(第122地点) 発掘調査概要報告書』 竹村忠洋・森岡秀人・坂田典彦 編 2014年刊行
- 第101集 『平成8年度国庫補助事業(3) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 寺田遺跡(第55地点)』 白谷朋世 編 2015年刊行
- 第104集 『平成26年度 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 八十塚古墳群第153地点 城山・三条古墳群第118地点』 白谷朋世 編 2016年刊行
- 第105集 『平成8年度国庫補助事業(4) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 寺田遺跡(第40地点)』 白谷朋世 編 2017年刊行
- 第108集 『平成27年度 芦屋市内遺跡発掘調査報告書 寺田遺跡第233地点』 白谷朋世 編 2018年刊行
- 第109集 『平成9年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 冠遺跡(第9・10地点) 西山町遺跡(第4地点) 業平遺跡(第34地点) 小松原遺跡(第5地点)』 白谷朋世 編 2018年刊行
- 第110集 『平成27・28年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 寺田遺跡(第230地点) 船戸遺跡(第14地点) 打出小槌遺跡(第56地点)』 西岡崇代 編 2018年刊行
- 第111集 『芦屋市指定文化財 小阪家住宅発掘調査報告書』 森山由香里 編 2018年刊行
- 第112集 『平成10年度国庫補助事業(1) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 - 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 - 八十塚古墳群(第68地点) 岩ヶ平文群第50号墳 大原遺跡(第35地点) 寺田遺跡(第105地点・第106地点・第109地点) 城山・三条古墳群(第19地点・城山古墳群第18号墳)』 白谷朋世 編 2019年刊行

報告書抄録

ふりがな	へいせい10ねんどこっこほじょじぎょう(2) あしやしないいせきはつくつちようさがいようほうこくしょ —はんしん・あわじだいしんさいふつきゅう・ふつこうじぎょうにともなうまいぞうぶんがさいはつくつちようさ—
書名	平成10年度国庫補助事業(2) 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書 —阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査—
副書名	冠遺跡(第14地点) 芦屋廃寺遺跡(第55地点) 堂ノ上遺跡(第4地点)
巻次	
シリーズ名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第113集
編著者名	(編集・執筆) 白谷朋世 (執筆) 森岡秀人・竹村忠洋・若林純也・株式会社トーコー地質
編集機関	芦屋市教育委員会
所在地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-38-2115
発行年月日	2020年(令和2年)3月31日

所収遺跡名		冠遺跡（第14地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・竹村忠洋							
所在地		兵庫県芦屋市山芦屋町145番地 4											
コード		北緯		東経		調査期間		調査面積		調査原因			
市町村		遺跡番号		34度73分81秒		135度29分53秒		1998.1124～1998.1215		95㎡		木造2階建個人住宅建設	
28206		070029											
所収遺跡名		種別		時代		主な遺構		主な遺物		特記事項			
冠遺跡 （第14地点）		散布地・集落 ・その他の生産遺跡		縄文 弥生 古 代 中 世 近 代		溝・環状・ 自然流路		縄文土器・弥生土器 ・土師器・須恵器・ 瓦器・瓦質土器・陶 器・磁器・土錘・石 鏝・サヌカイト剥片 ・銅製品など		弥生時代の遺物包含層や中世の耕作地を確認した。			
要約		合計2面の遺構面を検出した。第1遺構面では、北西から南東方向に走向する環状溝や近世から近代の溝を検出した。第2遺構面では、中世前半の自然流路を検出した。また、西から順に、第5層、第15層、第12層、第6層と土質や包含する遺物の年代に差のある自然堆積土がみられるので、東から西に下る微地形を観察することもできた。											

所収遺跡名		芦屋廃寺遺跡（第55地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・若林純也	
所在地		兵庫県芦屋市西山町112番地1					
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34度73分63秒	135度29分79秒	19990112～19990121	26㎡	鉄骨造1階建個人住宅建設	
28206	070033						
所収遺跡名		種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
芦屋廃寺遺跡 （第55地点）		散布地・集落・寺院・その他の生産遺跡	古代 中世	溝・土坑・ピット・石列・埴垣・土石流跡	弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・瓦質土器・陶器・磁器・瓦・土製品（移動式甕・イイダコ壺・土鉢）・石器（砥石・硯石・ササカイト剥片）・鉄釘・スサの壁土片	調査面積に比して遺物の出土量が多かったことから、本調査地点は、平安時代以降生活の場として土地利用がなされていたといえる。しかし、芦屋廃寺に直結するような古代の遺物は乏しかった。その要因として、第3遺構面より下位で確認した土石流跡からもわかるように、土砂災害を受けやすい不安定な場所であったことが想定できる。そのため、芦屋廃寺の寺域や周辺集落の範囲外であったと考えられる。 また、時期差のある廃棄土坑（SK01・02）がほぼ同じ位置に設けられていることから、建物配置との関わりでは、中世後期において土地利用に大きな変化はなかったことがわかる。	
要約		合計3面の遺構面を検出した。 第1・2遺構面は中世後半の遺構面で、溝や土坑、ピットを確認した。土師器へそ皿や東播系須恵器鉢、古代から中世の瓦や移動式甕片、土師質焼成のイイダコ壺、石鉢転用の温石、青白磁皿などが出土したSK01と、SK01の下位にあって土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などの調理具や食器が多く出土したSK02は、廃棄土坑と考える。また、SP22では、土師器小皿（へそ皿）3枚が重なって出土しており、地鎮等の祭祀遺構であろう。 第3遺構面では、ピットや石列を検出しており、中世よりも遅る遺構を含んでいる可能性がある。なお、第3遺構面の下位では、大規模な土石流跡を確認した。					

所収遺跡名		堂ノ上遺跡（第4地点）		発掘調査担当者		森岡秀人・竹村忠洋	
所在地		兵庫県芦屋市春日町106番地1、106番地2、106番地6～13					
コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
市町村	遺跡番号	34度73分42秒	135度31分71秒	19980511～19980805	430㎡	鉄筋コンクリート造9階建	
28206	070142					店舗・事務所併用住宅建設	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
堂ノ上遺跡 （第4地点）	集落・その他の 生産遺跡	縄文 古代 中世 近世 近代	溝・土坑・埴垣・ 痕・落ち込み・ ピット・自然流路	縄文土器・弥生土器・ 土師器・須恵器・ 瓦器・瓦質土器・灰 釉陶器・陶器・磁器・ 瓦・土鉢・石器 （石鏃・石錐・石匙・ 削器・楔形石器・ 石皿・叩石・石棒・ ササカイト剥片）	開析谷において縄文時代中期～晩期の流路を検出した。上流からの流水によって砂礫の供給が旺盛な環境と、流水が停滞して湿地となっている環境が顕著に現れられ、徐々に谷が埋没していった様子がうかがえる。 縄文時代の流路が埋没した後に形成された弥生時代の遺構は、埋土が黒色粘土であることから、当該期にこの地点は湿地であったことが推測される。したがって、銅鐸が埋納された地点の地形・環境として、谷や湿地に臨む丘陵縁辺部を想定する根拠となる。		
要約	南区第1～3遺構面では中世の耕作地を検出し、近接する丘陵上に集落が存在していたことが明らかになった。また、中世の遺物包含層を貫く噴砂（地震痕跡）を検出した。 耕作地の下位には弥生時代の湿地状の遺構や開析谷を流下する縄文時代の流路を検出した。流路からは、縄文時代中期～晩期の土器・石器や植物遺体が多数出土しており、堂ノ上遺跡が縄文時代の遺跡であることをはじめに認識した。 古代の資料は極めて限定的であるが、須恵器杯の転用碗や灰釉陶器がみられたことから、打出丘陵の南縁部に官衙や官人の住居が想定できる。また、中世資料の中に貿易陶磁が一定量あって、白磁四耳壺や青白磁合子、褐釉陶器の壺（無耳壺）が含まれているので、大輪田泊との関わりが推測できる。						

芦屋市文化財調査報告 第113集

平成10年度国庫補助事業（2）

芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書

— 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 —

冠遺跡（第14地点）

芦屋魔寺遺跡（第55地点）

堂ノ上遺跡（第4地点）

令和2年（2020）3月31日 印刷発行

発 行 芦屋市教育委員会

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号

TEL. 0797-38-2115

印 刷 ウニスガ印刷株式会社

〒677-0054 兵庫県西脇市野村町大坪471

TEL. 0795-22-3226

Ashiya Archaeological Record 113

2020.3

Ashiya City Board of Education, Japan